

---

# 九龍姫物語

藤藤キハチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

九龍姫物語

### 【Nコード】

N1112V

### 【作者名】

藤藤キ八チ

### 【あらすじ】

「いつかここから、わたしを連れ出してね」真っ直ぐな瞳を向けてくる少女に、心の底から「はい」とは言えなかった。神と呼ばれる九龍をその身に宿した少女・由良と、九龍を狙う加賀忍の若き忍び・夕影。側仕えとして忍び込んだ夕影は、信頼されるために由良に優しく接するが、次第に彼女に惹かれていく。由良もまた、心に寂しさを抱えており、二人は互いを求め合ってゆく。どうあっても結ばれぬ、二人の恋の行方は。

<ニューベルライブラリー様の方でも投稿しております>

## 朔の夜の逃亡（1）

灯りもない森の中を、一行は進んでいた。

誰一人として声を出さず、静まり返った森の中に呼吸を繰り返す音だけがこもる。

己は夜目が利かぬ。が、灯りを持つわけにはいかない。朔の夜の森ではわずかな灯火でも目立つ。

神が住んでいるとも言われる人を寄せ付けぬ深い森は、右を見ても左を見ても木々が生い茂り、同じ風景に見えた。すでにどこを指して進んでいるのか皆目見当がつかなかった。

しかし、先に行く霧矢とその仲間たちは己らが森のどこにいるのかわかっているようだ。息の上がる自分を先導して、なるべくつまずかないような安全な個所を選んでいる。地形が頭の中に叩き込まれているのか、さすがとしか言いようがない。

大木が斜面に必死にしがみつくと張ったうねる根を乗り越える。膝より高い位置にあるそれを乗り越えるので精一杯だ。息が上がる。

この辺り一帯は切り立った崖を多く持つ独特の地形で、山肌も同じく急斜面が多い。

逃亡には手間取る地形だ。普段、獣道を使う者ならばいざ知らず。狩に出かけるぐらいでしか山など入らない。それに、狩の最中は馬を駆っているのだから実際に山道を己の足で歩くわけではない。森に入って一時間もたたないうちに膝は笑い、肺が悲鳴を上げ始めた。だが、敵の裏をかかねば意味がない。囿になってくれた者たちのためにも、無事に逃げおおせなければ。

「殿、ここを越えれば山道に出ます。もうしばらくのご辛抱を」  
身を案じて声をかけてきた霧矢に頷いて見せた。こんなときでさえ、あとどれぐらいで抜けるかということをはっきりと言わないところが彼らしい。詳しい時間を言えば己がここで逃亡を諦めてしまいかもしれないと思っっているのだ。

つくづく甘い……優しい男だと小さく笑みがこぼれる。

(……大丈夫だ)

まだ、笑みさえ浮かべる気力がある。

必ずここを抜けてみせる。奴らにむざむざ殺されたりなどするものか。

もう一度、奥と子供と再会したい。

いや、再会しなければ。

「奥は、無事だろうか」

思わず呟いた彼の言葉に、霧矢は前を見据えながら答えた。

「奥方様とご子息には我が里の手練をつけましたゆえ、ご無事でいるはずです。落ち合う手はずになっている場所に着きましたらば静かに待つよう、里の者に言いつけてあります」

主をなんとしても無事に逃がすため、囷をいくつも街道に放った。奴らが囷だと気づかないうちに、囷が奴らを引きつけているうちにできるだけ遠くへ逃げなくてはならない。

(千代、藤丸……)

霧矢は心の中で己の妻と子の名を呼んだ。彼女らには主の奥方と息子のふりをさせて、狙われやすい街道へ放した。

もう会うことはないだろう。

最後に言葉を交わしたのは、ほんのわずかな時間だった。

主と奥方たちは別々に二手に分かれて逃げる手はずだと逃亡の作戦を打ち明けた。千代は穏やかで優しい女だが聡いので、言わんとしていたことがすぐに知れた。

千代は主の奥方と背恰好が似ていた。そしてなにより、主の子供と年が近いのはこの里で我が子・藤丸だけだった。

「わかりました。わたしが藤丸とともに囷になります」

正直、非道なことをすつきりと口にしてしまえる千代が羨ましかった。心の中はどうであれ、迷いや葛藤が表に出ない、真っ直ぐなまなざしを持つていたから。

あなたは優しい人だから、と千代には言われるが、いつそのこと

情などなければいいと思う。そんなものがなければ、今ここで妻と子供に酷な仕事を頼むことにも息苦しさなど覚えないだろう。

捨ててしまえるものなら、さっさと捨ててしまいたかった。

「あなたは殿を警固するのでしょうか。早く支度をしなくては」

昔、優しいところがいいところだと言ってくれた妻は、ほんやりしていた己を促した。

「……っ」

背中をやりわりと押したその手を掴んだ。突然のことで震えた肩を抱き寄せると、昔と同じくすっぽりと腕の中に収まる。

(小さい。温かい……)

呼吸をして、生きてるのが伝わってくる。だからこそ、余計に非情さが身に染みた。守ってやると約束したのに、自らの手で死地に送り出すことになるなんて。

もう二度と会えないとわかっているから、その手を離せなかった。

(時間がない)

わかっている。

奴らは鬼だ。嵐のように全てを食い潰して滅ぼしてしまう鬼だ。

いかに早く逃亡を行動に移せるかが生死を左右する。

わかってはいたけれど、離れがたくて髪に口付けた。ふと振り仰いだ千代と目が合う。灯りもつけずにいた中で、格子から差ししてきたわずかな明るさで黒目がちの瞳が細められたのを見た。

なくさめるように口付けされて、ようやく腕を緩める。

「いつまでたつても甘えん坊ね」

くすつと小さく笑った彼女は腕を抜け出した。

あのまま連れ出せてしまえたら、どんなに良かっただろう。

「……ま、霧矢様」

呼ばれたことと、近くではたばたと大きな羽音がしたために、はたと我に返る。霧矢の一団の前に飛び込んできたのは夜鷹だ。夜、

視界が利かなくなる鴉の代わりに伝令として使用する鳥だ。

仲間からの伝令でも持つてきたのだろうか。

夜鷹は隙間なく空に向かって枝を伸ばしている木々の間から割って入り、着地に失敗して腐葉土の重なる地面を滑った。いくらなんでも木々に突っ込んだぐらいで鷹が見誤るとは思えない。

動きがおかしい、と気づいたのは霧矢だけではなかった。

霧矢に目で言われて確認に行った男は、苦しそうに羽ばたく夜鷹をなんとか抱き上げた。鋭い爪のついた脚を探るが、文は付けていない。良く見ると灰褐色の体は血に汚れて、翼の骨が折れている。

伝令鳥を攻撃するなんて……、

「霧……」

男が顔を上げるやいなや、ヒュパッと風を切る音がした。数秒ののち、男の上半身がかしいだかと思うとみなまですげずに地面に転がる。腕の中にいた夜鷹は翼をはちゃめちやに動かして逃げようとしたが、ともにくずおれた。

霧矢の後ろで主がひっと息を詰めたのが聞こえた。

しかしそれを皮切りに、上からばらばらと音を立てて何か降ってきた。火薬臭くないことで爆薬ではないことに一瞬で気づいたが、頬にかかったためりを帯びた液体は血であろうことにも気づいた。

「ひいつ!？」

ぼとつと重たい音を立てて主の側に落下したのは明らかに人の腕だ。蟬のように白い腕は作り物にも見えるが、切断面が赤黒く染まっていたために本物だとわかる。濃い血の臭いもした。

呼吸が詰まったような声を上げた主は、極度の緊張と恐怖に耐えきれずにとつとつと気絶した。頭を打つ前に霧矢が抱き止める。

「なるほど、ここにいたのか」

刃のように切れそうに冷たい声が下りてきた。ざつと木々を揺らして現れた複数の影が、霧矢たちを取り囲む。

## 朔の夜の逃亡(2)

「我らから逃れようなどとよくぞ思ったものだ」

朔の夜で月明かりもない。だが、墨を塗りたくった暗い森の中に立ちはだかった男の姿は見えぬというのに、瞳が肉食獣のようにキラキラと輝いているのは見えた。

実際、彼らは暗闇で目立たない紺色の忍び装束を纏っていた。面も目元しか露出しているところがないので、奇妙にそこだけ白く浮いて見える。

「橘の城主だな」

霧矢は答えずに、主を抱えたまま忍刀を抜き放った。

ざっと見て数は十。対してこちらは霧矢を含めて三人だ。相手は『鬼の忍軍』と名を馳せているつわものだ。たったの三人で主を守って突破できるだろうか。勝算はない。

(逃げ切れるか)

まさかこちらが本隊だとばれているとは思わなかった。

もしくは、囷が全て全滅してしまったか…？

「わたしが防ぎます」

すっと背後に寄り添ってきた男は声をひそめてそう言った。任せたと霧矢は答えたが、しかし、彼らも二人で防げる数ではないと重々承知していた。

己はどうなつても、主だけは無事に逃がす。それが彼らに与えられた最後の任務だ。

男は懐に手を差し入れると、煙幕弾を破裂させる。風も抜けない森の中に一瞬で煙が充滿した。

主を抱え上げた霧矢は崖を滑り降りた。大の男を一人抱えて走ることは造作もない。

必ずや無傷で落ち合うと決めた場所まで連れていかなければ、橘家お抱えの忍びとして名折れだ。

霧矢は駆け出したが、逃がすまいと降りてきた忍軍に行く手を阻まれる。煙幕弾のきな臭さが鼻を付いた。

さらに上から降りてきた忍びが横に腕を薙ぎ、棒手裏剣が空を切り裂いて頭上から降ってきた。忍刀で力任せに薙ぎ払い、払いきれなかった数本が肉に刺さる。痛みを感じる間もなく腕が痺れた。

「くっ……」

鋭い剣戟を受け、かちあった刃から火花が散った。力に押し負けて痺れた腕は忍刀を取り落す。背後から切りつけてきた忍びから主をかばって背中を切られ、痺れが脚にまで達してその場にうずくまった。

そんな霧矢の目の前に音を立てて何か落下してきた。わたしらが防ぎます、と勝ち目のない戦いに向かっていった仲間だった。両の腕を失くし、すでに事切れている。一人は頭すらなかった。

「ああ……っ！」

仲間の変わり果てた姿に、言葉にならないうめき声を上げた。身動きが取れない霧矢をいたぶるように彼らは刀を振るった。

ちりつと焦げるような熱が左目を襲い、一拍置いて痛みが脳髄を駆け抜ける。

「ぎゃあああああっ」

左目を斬られた霧矢は痛みにとたうちまわる。痺れも忘れるほどの痛みだった。

昏倒している主を忍軍が引きずり、仰向けになったその喉元に白刃が突き付けられた。

「や、めろ……」

斬られた左目を押し潰すほどの力で押さえ、かろうじて視力のきく方の目で彼らをにらみつけた。どこもかしこもギシギシと悲鳴を上げて、頭を上げるのがやっただ。

耳が遠い。膜でもかかっているように、音がわんわんとぶれて聞こえる。

振り上げられた刀が、主の頭と胴とを真っ二つにしたのが滲む視

界でも見て取れた。頭は毬のように急斜面を転がって、忍軍のうち  
の一人の足下へ転がった。それを、彼は足蹴にして止める。

「うっ、…」

噴き出した血が地面を黒々と染めていく。辺りに満ちる血の臭い  
にめまいがした。声が出ない。

「あ、ああ…、殿……」

ようよう呻くように言つて、守り切れなかった己の非力さに唇を  
噛む。この失態、先に安全な場所へ辿り着いているはずの奥方とこ  
子息になんと詫びればいいのか。己の命をもつてしても償いきれぬ。  
『霧矢』というのはお前か？」

唐突に忍びは言つた。答える前に、忍びは目を細めた。口元を覆  
つた布の奥からくつと嘲笑う声が聞こえたので、顔をゆがめて笑つ  
たのだらう。

「冥土の土産にこれをやろう。持っていた女は胆の据わつた奴だつ  
たが、最後の最後で『霧矢』という名に助けを求めながら死んだぞ」  
放られたなにかは軌跡を描いて霧矢の前どころと転がった。

首飾りだ。なめした革紐の先に、木を涙型に削り出した飾りが一  
つだけついている。忘れもしない、若いころ、千代にあげるために  
自分の手で作つたのだ。

生涯かけて守つてやると誓いを立てた。だが、形に残るものは渡  
したことがなかった。

女は綺麗なものが好きだ。あとからかんざしの方が良かったのか  
もしれないとも思つた。けれど、装飾品を求めにそうそう里を留守  
にするわけにもいかず、考えた末に栗の木を切り出して削り、手ず  
から作つたのだ。

そんな色気も何もない首飾りだが、千代は大層喜んでくれた。

それが今、赤黒く汚れて地面に転がっている。

「……ち、よ…?」

吐息混じりに呟いて、首飾りに手を伸ばす。指が鉛のようだ。動  
け、動けと頭の中で何度も繰り返す、ゆるゆると伸びた手はようや

く首飾りに届いた。

栗の木の匂いがする、とそつと口元に近づけては笑っていた千代。手のひらに収まった滑らかだった珠は、血がこびりついてざらざらとしていた。同じく革紐もじつとりと湿っている。指でつまむとまだ乾ききつていない血液が指の腹につくほどに。

「千代、藤丸……！！」

どんなに怖かっただろう。気丈に見えていたとしても彼女は怖がりなのだ。毅然とふるまっていたても、きつと最初から最後まで助けを求めていたに違いない。

守ってやると、約束したのに。

傍にいてやればよかった。手を離さずに、傍にいてやれば、幼い藤丸にも怖い思いをさせなかったかもしれない。

だが、むざむざ殺されるとわかつている場所へ送り込んだのは、他でもない己だ。

二度と生きて会うことはできないだろうと、  
わかつて、いたのに。

「うっ……」

喉から嗚咽が漏れる。木の珠を握り込んだ。

「『ちよ』？お前の妻か？ならば良かったではないか、最期に会うことができて」

会うことができて…？

頭の中でのろりと言葉を繰り返した。くつくつとさも滑稽なものを見たように、忍軍は笑った。

「さきほど、お前らの上に降らせてやっただろう」

いつとき、呼吸が止まる。何を言っているのかを理解して、心臓が大きく跳ねた。

地面に落ちて跳ねた蟬のように白い腕が、脳裏にふとよぎる。

「う、あ……ああああああっ」

喉を裂いて飛び出した声は、獣の咆哮に似ていた。

頭をもたげてしゃにむに立ち上がるうとするが四肢は凍ったまま

答えない。爪が土を掻くだけで、気だけが先走る。

「殺してやる」

呪いの言葉を吐き出した。

何を引き換えにしてもいい。今、この瞬間、奴らをこの手で引き裂くことができるなら、邪神にだって魂を売ろう。

「おのれ……おのれえっ!!」

霧矢は怒鳴った。

ままならぬ様子を弄んでか、数回に渡って刃が振り下ろされた。憤怒で体が燃えるように熱い。吹き出す血の感覚もおぼろげだ。とどめを刺すために閃いた白刃が脇腹を深くえぐったが、その痛みすらも掻き消される。

口腔に鉄の味が広がって、ごぼつと血泡を吹いた。荒い息遣いが自分のものだと思いついたとき、上体は柔らかく冷たい地面の上に崩れる。

「おのれ……」

怨嗟の声を聞く者はすでに近くにいない。忍軍がいつ退いたのか、霧矢にはわからなかった。

もう音も拾えない。ひどい耳鳴りがして、夜目が利くはずだというのに視界は真っ暗だ。

体が急激に冷たくなっていくのがわかる。首飾りを握り締めているはずだが、感触がない。だのに臓腑はねじ切れそうなほど熱い。

棒手裏剣に仕込まれていた毒が回っている、と嫌にはつきりと思つた。立ち上がりたいのに体が言うことを聞かない。

そうだ、伏している暇はない。主を守らなければならないのに……。

ふと、意識が混濁して目の前で惨殺されたことを忘れていた。

(そう、か)

もう、仕える主人もいない。

愛する人もいない。

(千代)

傍にいてやればよかった、と何度目かに思い、まなじりからぼろりと涙が一粒こぼれた。

「……よ、……ふじ……、……」  
薄く唇を開くと……、

珠を握り締めたまま、霧矢は意識を手放した。

## 夕影の任務（1）

こつこつ、と木戸が叩かれた。師のいいつけで、乾燥させた薬草を乳鉢ですりつぶしていた夕影はいったんその手を止めた。

「はい」

「おい、夕影、霧矢様がお呼びだ」

その声に土間へ降りて木戸を開けた夕影は、呼びに来た男を見上げてはたと小首をかしげた。

「先日頼まれていた薬は、まだ寝かせておかなきゃならないんだけど……」

「いやあ、おれあなんだか知らねえ。呼んで来いって言われたから来ただけだ」

男も首をすくめる。

新しく薬の注文だろうか、それにしても毒飼いの梵爺の名前を出さないのはおかしい。夕影は弟子入りしてまだ数年のひよっこだ。梵爺を通さずに薬の要望を出しても、夕影が応えられるとは思えない。

怒られるようなこともした覚えもない。

「わかった、今行く」

釈然としない思いを抱えたまま薬小屋を出た。仕事が終わっていないが仕方ない。梵爺には後で説明すれば許してくれるだろう。

里の外れにある薬小屋から頭目の屋敷は遠い。呼ばれたとあってはすぐに馳せ参じなければ無礼だ。夕影は急いで里の中を駆けた。住居の並ぶ通りには、忙しそうに動き回る母親のすぐ近くで、適当な長さの木の枝でちゃんばらごっこをする子供たちがいた。

やあつ、と気合十分に声を上げて斬りかかった半蔵が、夕影を見つけて声をかける。

「おつ、双子。急いでどこ行く」

「……夕影」

「ああ、落ちこぼれーっの夕影なっ！！」

訂正を加えた夕影に対して歯をむき出してにししと笑うと、ちゃんばらごっこをしていた少年たちは一斉にげらげらと笑った。

「よう落ちこぼれ、一発相手してかねーか?!」

「……急いでるから」

「逃げるかコノーっ！者ども、であえであえーっ」

半蔵がふざけて言うのと、数人がわつと追いかけてきた。枝で思い切り後ろ頭を殴られて、頭にきた夕影は振り返りざまに足を振り上げた。

「遅い！！」

相手が上体をかがめてよけたため、足は空しく風を切る。その上、逆に足を払われて見事に尻もちをつく結果となった。

とどめに額を枝で打たれて、夕影は頭を抱えた。

「いった……」

はは、と大きく笑いながら、とどめを刺した半蔵は手にした枝を肩で何度か弾ませた。

「のろまだなー。そんなだと、いつまでたっても兄ちゃんにおっつけねえぞ！」

「余計な御世話だよ！」

怒鳴って立ち上がると、冷やかしてくる半蔵たちに背中を向けて走り出す。

(うるさいなっ)

夕風と比べるな、心の中で吐き捨てた。

双子の弟として生を受けた夕影はことあるごとに兄の夕風と比べられる。それというのも兄の夕風は、弱冠五つにして免許皆伝を受けた神童だった。それに対して夕影は、今年の正月で八つを迎えたというのに同い年の子供たちと比べても後れを取っていた。

もともと穏やかな性格で喧嘩も嫌いなので武芸には不向きだ。

双子であるため両親は「きつと弟もそのうち素晴らしい忍びとして開花するはず」という期待を捨てきれずにいたようだ。が、しば

らしくて才がないと周囲に諦められた夕影は、武芸の師の勧めで毒飼いの道を進むことになった。

毒飼いとは忍びのなかでも少々特殊で、毒を持つまむしや蜘蛛を飼い、そこから毒を取り出すことを生業とした者である。入用であれば任務の前に毒を生成し、仲間たちに渡すこともある。その他にも薬草の知識にも長け、里の薬屋といったところだ。

夕影は修業中の身であるため、まだ危険なものは取り扱ったことはない。しかし、無心に何かに取り掛かる姿勢は、ちゃんばらごっこよりもほど自分に向いていると理解していた。

ただ、里の中でも特殊ゆえに忌み嫌われたり爪弾きにされるのは確かだった。

夕影は息を切らして茅葺屋根のいっとう大きな屋敷の入口をくぐり、木戸を叩いた。

「失礼します」

引き戸を開くと土間からすぐの座敷の奥で、円座に腰をおろした隻眼の男がこちらを見た。三十路に届いているかどうかの若い頭目だが、年に似合わず威圧感は里の中でも一番だった。

無駄な肉のない精悍な顔もそうだが、なにより片方だけの瞳が研がれた刃のように鋭い。その目を向けられるだけで、火傷でもしたかのように背筋にちりつと恐怖に似たものが走る。

「おお、夕影。なんだ、そのように急がなくなるともよかったものを」  
息も整わぬうちにあがりかまちから失礼した夕影をくつくつと笑った。

座敷をさりげなく見渡すと、召集されたのは夕影一人ではなかったようだ。嗜好きのくの一の隣に背の低い夕凧が背筋を伸ばして座っていた。

「遅れて、申し訳ございません……」

上がる呼吸の合間に言くと、夕凧はちらとこちらを見やる。隣に来るように視線で示した。そうして隣同士に並んでいると、まだあどけなさの残る顔立ちが鏡に映したかのようにそっくりだった。

「さて、では話に入るか」

夕影が一息ついたところで霧矢は三人を順に見た。

「お前たち、九龍というのは知っておるうな」

これには三人が頷き、夕凧が答えた。

「九匹の神のことですね」

「そうだ」

太古の昔、世界を創った九匹の龍神がいた。

龍が世界を創造する前、世界はただの闇だった。

龍が虚空を駆けると夜空が生まれ、そこに龍の命の輝きを放つと太陽となってあたりを照らした。

龍の落とした涙が海となり、龍の吐いた息が風となり、龍からはがれた鱗が大地となった。

龍が晴天でくると回転すると、雨雲が生まれて雨が降り注いだ。しばらくして雨雲が去ると、太陽が輝き、大地に眠っていた木々や草花が芽吹き、肥沃な大地となった。

次に、龍が尾っぽで水を跳ねると、そこから人と動物が生まれた。龍は人々に言葉と火の力と穀物を与えると、九龍は天を故郷とし、天へ昇っていった。

しかし地上はいつまでも平和ではなかった。人々は同じ龍から生み出されたにもかかわらず、自分とは異なる人々を虐げ、いさかい、争った。

人々は人々を力で支配しようと考えた。

とある人々は武器を手に取り、とある人々は恐怖で人々を支配し、とある人々はいにしえの神の力を手に入れようと考えた。

九匹の神のうち、一匹の力を手に入れた人々は、その力を使って他国を滅ぼし始めた。

歯向かうものは女も子供も皆殺し、逃げ惑うものも皆殺し、ひれ伏すものも皆殺し……、

そうして、世界は一度滅んだ。

細々と生き残った人々は、一人の乙女を贄として龍の力を封印し

た。

それから幾星霜　　気の遠くなるほどの月日が流れ、人々が龍の力を忘れたころ、ある人々がいにしえの人々の記憶を見つけた。

同時に、封印された龍の力を手に入れた。

それは、雨を晴れにも、嵐を凪ぎにも変えられた。枯れた作物はよみがえり、病床の者は病が消えた。

これぞ神の力ぞ、我らは神の力を手に入れた、と人々は歓喜した。そうして、人々は悟った。

世界を創造せし九匹の龍の力、『九龍』の力を手に入れし者は、世界を統べる、霸王となろう。

「その九龍の力を、安斎の小僧がとうとう手に入れた……という一報を受けた」

霧矢は口の端をくつと上げて、なにかに引つかかったような笑みを浮かべた。

戦乱の世、霸王の力を求めて誰しもが九龍を求めた。

霧矢を頭目とする忍者・加賀衆は？<sup>てんがきよう</sup>峨郷を根城としている。仕える主が特にいらないことを考えると、ただの賊か荒くれ者の集団とも言える。

そして、根城としている？峨郷は加賀衆だけのものではない。

？峨郷国主の安斎家は、郷に点在していた？峨国衆と呼ばれる土豪を破竹の勢いで併呑し、力をつけてきた武家一族だ。その歴史は千年に及び、名は畏怖の対象として広く知られているが、同時に、安斎家に仕える忍者衆の名も有名である。

元は盗賊集団であった白波衆は、高い戦闘能力を買われて安斎お抱えの忍びになったといわれている。戦闘能力もさることながら、彼らは潰すと決めた土豪はたとえ赤子だろうと一人残らず抹殺するという鬼のような所業で、一切慈悲のないことで恐れられていた。

最強の忍軍・白波衆を抱え、？峨郷を支配してきた安斎一族は、長年に渡り『九龍』を手に入れることにも力を入れていた。

むしろ、？峨郷の支配は領土の拡大よりも生贄の調達の意味が大

きい。

九龍は処女の身に降りる。しかし神の力は一度に手に入るものではない。一匹を降ろすためには一人の贅を必要とし、必ず成功するというわけでもない。百年続けて一匹をこの世に呼べるかどうかという確率だ。

霸王となりうる神の力は『九龍』でなければ意味がない。九龍の完成には力の継承の儀式が必要だった。龍の力の継承は龍に選ばれた処女でなければならず、神の力を持つ少女の肉を食らうことで、その身に新たな龍の力が宿るといふ。

しかし、神を降ろしたといっても少女は人と変わらぬ寿命であり、少女が没すると龍は天に還ってしまう。それを防ぐために少女に呪をかけ、死したあとには肉片に分けて保存するという手段がとられていた。

そうして、九匹の龍を手に入れるには長い年月がかかった。

千年に渡り九龍を手中に収めんと「神降ろし」に従事してきた安斎家の犠牲になった少女の数は数え切れない。

安斎と同じく九龍の力を望む霧矢だが、彼が忍び衆の頭目であったことと主がいないことが、九龍を安易に手に入れられない理由だった。

九龍に関する情報は他の国主よりも、安斎家が群を抜いて詳しくった。霧矢は早い段階から間者を送り込み、九龍の状況を探っていた。安斎家が他国主から龍を降ろすことに成功した少女を奪い、いち早く九龍を完成させるであろうという見解からでもある。

今回、最後の龍を降ろした少女が九龍になり次第、横からかつさらおうという考えだ。

安斎の当主は霧矢より年のいった男である。四十は超えていないにしても確実に霧矢よりは年上だ。小僧ではないのに、と夕影は内心で不思議に思った。

## 夕影の任務（2）

「そこでだ。 たつ、夕影」

「はっ」

くの一のおたつは切れの良い返事をしたが、夕影は遅れて「はい」と小さく言った。今の話の進み具合からして、まさか自分が呼ばれるとは思っていなかったので意表を突かれた。背中でもつままれたように背筋を伸ばす。

「九龍の完成間近ということ、新たにお前たち二人に偵察を頼みたい。なに、難しいことではない。我が加賀忍らがすでに多く偵察に入っているからな」

夕影は軽く眉根を寄せるといぶかしげな顔をした。

なぜ夕風ではなく自分が指名されたのか得心がいかない。霧矢の言うとおり、難しい任務ではないからか。しかし、敵地への密偵ならば夕風の方が霧矢の期待に応えられるはずだ。

自分では役不足なのではないだろうか。

考えているうちに話は進んでいく。

「特に夕影は、くだんの籠を降ろした姫の側仕えをしてもらおう。進捗の状況を間近で見ることのできる立場だ」

夕影は思わずえっと声を上げた。

「霧矢様、そんな大事な立ち位置にわたしを送り込んでいいのですか？わたしよりも、夕風の方が確実に霧矢様のご期待に添えると思います」

自分で言っていて情けなくなってきたが、そのとおりなのだ。仕方ない。しょぼんと頼りない顔をした夕影に、霧矢は口を開けて豪快に笑った。

「ははは、確かに、忍術では夕風の方が上だな。しかし夕影、お前はどこか人を安堵させる何かがあると俺は感じている。悪く言えば人を油断させるような奴なのだ。だから夕影を選んだのだ。忍術は

夕凧に劣ると言っても、お前はうつけではないだろう。正体を暴かれるようなへまはしまい」

「はあ」

「夕凧が駄目だと言っているわけではないのだ。ただ、目的の姫に警戒されては元も子もない。生来の気質を考えて、夕影が適任だと言っているのだ。夕凧を今日ここへ呼んだ理由は、夕影が報告へ戻るときの替え玉として行ってはくれぬか、と言おうと思っていたからなのだ」

「側仕えであると、しよつちゆういなくなつては不審だからですか」  
夕凧の言葉に霧矢は頷いた。

「そうだ。側仕えなれば、そうそう暇はもらえまい。これはお前たちが双子だからできるのだ。やってくれるな？」

瓜二つの双子を交互に見る。夕影は頷き、はいと答えた。

夕凧は己が選ばれなかったことで気分を害した様子もなく、淡々と答える。

「喜んでその任、引き受けさせていただきます」

もとより断る理由がない。任務を下されるということは、頭目に一役買われている証拠である。三人の様子を見て、霧矢は満足げによしと言った。

「急ですまんが出立は明日の早朝だ。各自準備をしておいてくれ。

夕影、確か鴉は使えたな？」

伝令の役目を果たす鴉または夜鷹が使えなくては一人前の忍びとしては認められないが、幸いなことに夕影はどちらも問題なく扱うことができた。

「夕凧に関しては夕影と入れ違いのため、後々城へ潜入する指示を下すまで待機」

「はっ」

頭を下げて、おたつから順に座敷をあとにする。最後に夕影が立ち上がり、あがりかまちへ向かうところで後ろから呼び止められる。

「夕影」

「はい」

振り返り、居住まいを正した夕影に、霧矢は常と変らぬ様子で、

「一層励めよ」

と、言葉少なに言った。

門をくぐったところで待っていた夕風は、駆け寄ってきた夕影を真っ直ぐに見つめた。

「良かったな、夕影」

「え？」

「霧矢様の信頼を得ているということだよ。しっかりお勤めして、がっかりさせないようにな」

微笑んだ顔が妙に大人びていて、夕影は外見では照れた様子を見せつつ視線を外した。

母のお腹の中にいたときも、生まれたときも一緒だったのに、いっただって兄は自分の上を軽々と越えて行く。今だってそうだ。すでに免許皆伝を受けている夕風は、他の忍びたちと同格だ。なぜ己が密偵として選ばれなくて、他より劣っている弟が選ばれるのだと思っっていることだろう。

これほど悔しいことはないだろうに怒った様子もなく、癩癩も起こさずに、逆に「良かったな」と祝福の言葉さえ言つてのける。夕風の対応は、きっと大人でさえ難しい。そんなことが言える大人はこの里にどれだけいるだろうか。

忍術を多く扱える者はそれだけ矜持が高い。

夕風の心の広さを目の当たりにして、自分はどうしてこんなに情けないのだろうと落胆する。せめて、兄の半分でも忍びとしての能力に恵まれていたらどんなによかっただろう。

望んでも変わりはないものを、真剣に悩んで夕影は沈黙した。

「ほら、夕影、出立は明日だ。準備を整えて、父上と母上にも挨拶をしておいで」

父も母も、才能のない夕影には冷たかったので顔を見せるのは気が引けたが、今度顔を合わせるのはいっになるかわからないので夕

凧の言うとおりに頷いた。

毒飼いの梵爺のもとへ住み込みで弟子入りしている夕影にとって、三年ぶりの我が家となった。同じ里の中にあつて決して遠くはないはずなのに、この三年、実家を避けていた夕影にはまるで十数年も戻っていなかったような感慨を受けた。

しかし、煤けたかまども、燠の残る炉端も、出ていったときから何一つとして変わっていないかった。

炊事場に立っていた母親は、帰ってきた夕凧を見とめて破顔したが、夕影も一緒だということに気づいて怪訝そうな顔になった。

「お久しぶりです……母上」

「あら、夕影じゃない。何の用かしら。夕餉の支度どきにふらふらしては、師に叱られるのではなくて？」

確かに、三度の飯の支度は夕影の仕事だ。母親の顔を直視できずに、夕影は視線を泳がせた。

「父上と母上に、挨拶をしに参りました」

「やっとの思いでそれだけ言う。」

奥座敷に移動して、母親と向かい合つて座つた夕影は言葉に窮し、代わりに夕凧がことの顛末を話すこととなった。

母親は苦手だった。自分を見てくるときはいつだって、切り捨てるような目をしていたから。思い返せば夕凧が免許皆伝を受けた頃から自分につらく当たるようになった気がする。夕凧は自慢の息子だけど夕影はねえ……と隣のおばさんにこぼしていたのを耳にしたこともあった。

きつと夕凧よりも出来が悪いから、自分のことは嫌いなのだ。

鬱々と考えていると、夕凧の口から密偵に指名された夕影のことや、夕影の影武者として自分が出ること聞いた母親は苛立たしげに短く息を吐いた。

「どうしてそんな重要な偵察なのに、夕凧ではないのかしらねえ」

母は斜に夕影を見やった。言葉の端々が突き刺さる気分だ。お前が選ばれたことがおかしい、とあからさまに言っていた。

「どう考えてもここで夕影を送り出すなんて、人選を間違えたとしてもか言いようがないわ」

常ならば母親をいさめるのは父親なのだが、残念ながら今は留守であつた。代わりに夕凧が落ち着いた様子でまあまあと声を挟む。

「母上、霧矢様のご判断ですよ。わたしたちがどうこう口を出すような話ではありません。霧矢様もお考えあつてのことです」

「そうかしら」

「それよりも、夕影にとつてはいい機会では。九龍にかかわる任務に抜擢されるなんて、これほど名誉なことつてありますか？ 励みにもなりましょう、な、夕影」

隣に座っていた夕凧は、にこつと微笑んで覗き込んできた。夕影はひとまず頷いて言葉を探す。

「そう、ですね…霧矢様を落胆させないように、もつと励みたいと思います」

特に奇妙なことを言ったわけでもないのに、しばし沈黙が下りた。息苦しくなつていてもたつてもいられなくなった夕影は、父親によくと言いついて早々に実家を後にした。飛び出すようにして出てきてしまつて失礼だつただろうかとも思ったが、もう遅かつた。暮れなずむ夕日が山の端にかかり、影を長く伸ばした。足下から伸びる濃い影を見下ろしながら、とぼとぼと薬小屋に向かって歩いていると、夕餉の匂いがまるで誘うように漂ってくる。

「そつだ、夕餉の支度……」

思い出して薬小屋を目指して一気に駆け出した。毒を持つ生き物を置いてある薬小屋の隣に立っている、寝起きするための茅葺屋根の水車小屋の手前までやつてきたところであつたと足を止めた。煮炊きをしている匂いがしたからだ。

「梵爺…」

木戸を開けると、かまどに向かつていた梵爺は振り返らずに言っ

た。

「全部聞いとる」

何から言うか迷うひまもなくそう言われてしまったので、頭が理解するのにしばしかかった。梵爺は入口で突っ立っている弟子を手招きする。

何度かまたたいて正気に戻ると、夕影は木戸を閉めて歩み寄った。側に立った弟子を、梵爺はぎょろりとした目で見上げる。

「よう帰った。話は全部聞いた……最後のメシぐらい、わしが作ってやる」

「……最後つて、いつか帰ってきますよ」

「こつち戻ってきたら顔出しに来い」

人の話を聞かない梵爺は、再び夕餉の支度に取りかかる。

今回与えられたのは帰還できるかどうかもわからない難しい仕事だ。指の先ほどでもへまをしたら命はないだろう。

でも、ちゃんと帰りを待っていてくれる人がここにいる。

玄米よりも雑穀が多く入った山菜鍋の、香ばしい匂いが目に染み

### 夕影の任務(3)

？てんがきょう峨郷は、数十という土豪がそれぞれの地を治めていた頃から起  
伏の激しい大地であった。

山の頂が常に雲を引っかけたように隠れている峰々は少なくない  
ため、雷雨も多く、山頂から流れる川もいくつも分岐して裾野へと  
広がっていた。

雨量が多いことと急斜面であることも手伝って、加速度がついた  
水は土の壁など簡単に削り取っていった。比較的広い川を持つ山岳  
では、隆起している分、川を挟んだ両側の斜面がほぼ垂直にそり立  
っていることなど珍しくなかった。

？峨郷全土はうまく使えば天然の要塞ともなる。

安斎の居城の背後には、天衝山と呼ばれる天をも衝かんとする峰  
が連なる山がある。いにしえに、封印され眠っていた龍の力を手に  
入れた人々が同時に入手した古記録では、実体となった龍が尾っぱ  
で国を一つ叩き潰した際に出来たもの、とされている。

そびえ立つそれを超えることは不可能に近く、背後を天衝山に守  
護されている限り、他国からの居城への直接の侵入はあり得なかつ  
た。

居城は天衝山へとつながる丘陵にある。城の周囲は石造りの城壁  
が取り囲み、堀切を超えた先に主郭がある。また、主郭全体も城壁  
で囲まれているが、二つある城門の外にはさらに郭が広がっていた。  
西門を出た先にある郭を西郭、東門を出た先にある郭を東郭という。  
最終的に城と三つの郭を取り巻くうずたかい城壁が、千年に渡つ  
て続く安斎一族の堅固さを表しているようであった。

西郭の外門をくぐってきた夕影とおたつは、広さも人通りも半端  
ない郭の賑わいに驚くことになった。加賀の里から一步も出たこと  
のない二人である。当たり前だ。

夕影は初めて見る屋台や喧騒に圧倒され、おたつは装飾品に目を

奪われていた。特におたつは年頃の娘なので、鼈甲カメノクワなどという高直なものとは言わず、水牛の角などの安いかんざしでもいいから一つは欲しいというのはごくごく自然なことだろう。

「ああ、あれいいなあ……」

銚色に輝くかんざしを見つけたおたつは、吐息混じりに呟いて立ち止まってしまった。夕影が待っていると、我に返ったおたつは背の低い彼を見下ろしてさつと頬を朱に染めた。

「なんでもないよ！こんなところで時間取られてる暇ないんだから！ほら、さつさと行こう」

最初に立ち止まったのはおたつだというのに、腕を取られてぐいぐいと引つ張られる。なんで怒っているんだろうと夕影は思ったが、気恥かしさから彼女がそうだった態度を取ったのだと気づけるようになるのはまだ先の話である。

いくつもの誘惑を乗り越えて、二人はようやく石造りの虎口こぐちまでやってきた。虎口を越えた門のところ、こちらで新しくお勤めすることになったのだと用向きを言う。

取りついでもらうまでしばらく待っていると、二人の家人がやってきた。

「おなごはこちらへ来い」

おたつは家人の一人についていった。確か彼女は厨の方へ回される予定だ。厨には女が多く働いている。女は噂好きなので、休憩中あるいはちよつとした小話をするとときに、あることないことをなんでも話す。

なかには大抵一人や二人、耳の早い情報屋がいて、彼女たちの手にかかれば噂が一日で城中に知れ渡ることなど造作もない。

なんでもない噂も裏でささやかれている噂も、厨にいれば簡単に手に入るだろう。

夕影は残された家人の一人について行くことになった。

「姫の側仕えだったな。まずは女中頭にご挨拶をして、そのあと姫のもとへ行ってもらう」

家人は歩きながらそう言うと、後ろも振り返らずに先導する。が大の男の歩幅と速度についていけず、夕影は小走りに後をついて行く羽目になった。

城内に入って家人用の裏廊下を行くと、忙しそうに行き違う家人が多かった。もうすぐ昼餉の時間だからだろう。

城内の作りは、先に間者として送り込まれている忍びが描いた見取り図をざっと見てきたのでだいたいを理解していた。

すれ違う人々を横目で見ているうちに女中頭のもとへ辿り着いた。家人はひとことふたこと女中頭に言うと、もと来た道をさっさと帰ってしまった。恰幅のいい女中頭はそれだけで威圧的だというのに、さらに腕を組んで夕影を見下ろした。

夕影は男と言ってもまだ幼い。相手は数十人という女中を束ねている女中の頭目とも言える。立ちふさがっているだけでもひねりつぶされそうな迫力だった。

「本日からお世話になる、ゆうと申します。まだいろいろとわからぬ身ですが、よろしく願ひいたします」

後々夕凧と入れ替わることも考えて、名前はどちらにもついている「ゆう」にした。

そう言つて夕影が頭を下げると、大福のような顔をした女中頭は大きく頷いた。

「まだ小さいけど、気骨がありそうだね」

女中頭はがしつと夕影の腕を掴むと、側にいた女中に彼を押し付ける。

「まずは風呂に入っておいで。その恰好で姫様のお側にいられないからね。あと、当分この子があんたの教育を担当する。この子について仕事を学びなさい」

「はい。よろしく願ひします」

そう若くもない、夕影と同一年の子供が一人ぐらいはいそうな女中に頭を下げた。梅と名乗った女中について行って、まず風呂場へ向かう。

そう小汚い恰好をしてきた覚えはなかったが、やはり名のある武家には通用しなかったようだ。聞けば一日に一回はきちんと湯を沸かした風呂に入るといふことなので、川で着物ごと水浴びをして乾くまで河原でのんびりしていた夕影からすると驚くべきことだった。夕影が風呂場へ行つたときには湯の時間ではなかったたので、残念ながら体を流すだけになった。

渡された着物はまだ真新しく、馴染んでいなかったため素肌にごわごわとした。

お梅に裏を軽く案内してもらっているあいだ、給仕が昼餉の下げ膳を持って厨に戻る時間になった。大殿や姫が食事を済ませると次は家臣で、女中や下男下女たちはその後順繰りに食事を取ることになっている。

膳には椀と羹と、小皿にちよつとだけお新香がのつていた。羹には菜の花や油揚げといった具しか入っておらず、香りは良かったが腹にたまるようなものではなかった。玄米はおかわり出来たが、一人二膳までと決まっておリ夕影には物足りなかった。

「まあ、よく食べることに」

隣でお梅が驚き半分、呆れ半分の声を上げた。どうやら彼女は食が細いようだ。微笑ましそうに夕影を見やる。お梅の隣で羹をすつた女中が言った。

「男の子ですもの、大きくなつたらきつと背が伸びますよ」

「そうねえ。力仕事をしてくれるようになったら大助かりね」

意外と力仕事の多い女中してみると、男手は大歓迎なのだろう。そうして昼餉を終えた後、女中頭が夕影を呼びにきた。

「これから姫様のところへご挨拶にいきます。ついてきなさい」

廊下をするすると音もなく歩いて行く女中頭について行った。この恰幅の良さで足音がしないということに目を見張る。そういえば、女中たちは歩くときにはたばたと音を立てたりしていない。

足音に気を使うところは、彼女たちもまるで忍びのようだところさと思つたところで女中頭は閉じられた障子の前に膝をついた。

「姫様、女中頭の初にございます。本日から姫様のお側に仕える男の子を連れてまいりました」

「入って」

幼い声が答えた。鈴の音のようなかわいらしい声だった。女中頭のお初は障子を静かに開けると、「失礼いたします」としゅつきりした声音で言った。

入ってすぐのところでお初と夕影は平伏した。やがて一人の少女が女中に連れられてやってきた。

どうやら奥の座敷で遊んでいたらしい。入るときに目に入った奥座敷には人形や色とりどりの千代紙がちらばっていた。が、円座に座った少女こそ人形のように、彼女は大きな頭をことりとかたむける。

「新しく仕えてくれるのはあなたね？」

「は。ゆうと申します」

「顔を上げて」

言われるままに面を上げると、視線の先には夕影よりはるかに年下の幼子がいた。正月で五つを迎えたという由良姫は、目をぱつちりと開いて興味深げにこちらを見ていた。

この子が、いずれ残りの八つの龍を身に降ろすという姫……。

(まだほんの、少女だ)

自分よりも年下の　そして自分となら変わりはしない　少女の身に、神が宿っていることなどにわかには信じられなかった。

夕影と同じく顔を上げたお初は真面目な顔で、

「本日より、姫様の側仕えとして勤めることになりました……」

とつらつらと言っているあいだに、由良はきゅきゅとはしゃぎ始めた。

「わあっ！男の子なのね？！嬉しい！」

「……まだ不慣れゆえご迷惑もおかけするかと存じますが、どうかご容赦を……」

「ゆうというのね？！わたしと一文字おんなじね！」

全くといっていいほどお初の話聞いていない由良の傍で、女中が困っておるおるとする。

「姫様！！姫様！！お話を聞いてください」

もとより、五つの少女に格式ばった挨拶は無理なのだ。だが、やはり体裁を整えなくてはならないのだろう。いくら姫が幼く、じつと話を聞いていられないのだとしても。

「ねえ、一緒に遊びましょうよ！外に出たいわ！！」

「そうでございますねえ」

いつものことなのか、お初は自分の言葉の一切を無視する由良をさらっと流すと、由良のわがままに頷いた。

夕影の仕事はまだ他にあるだろうに、お初はついて行って差し上げなさいと夕影に告げた。どうやら側仕えというのは遊びの相手ということも含まれていたようだ。

かくして夕影は由良と一緒に庭へ出ることになった。縁側からは数人の女中が二人を見守っているなかでの散歩となった。

「ゆう、あれが梅の木よ。あっちが白で、こっちが赤なの。もう咲き終わってしまったけど、また春の初めになれば見られるわ」

年近い男の子が相当嬉しいのか、由良ははしゃいで庭を案内した。そう広いものではなかったが、紅白の梅の木に、立派な桜の木まで植わっており、桜はつぼみが膨らんで、今にも弾けそうだった。

「姫様、あまり走ると転びます」

「ゆらよ。ゆらって呼んで」

唇を尖らせてそうせがんだ。言うとおりに呼び捨てにするわけにもいかず、由良様と呼ぶと不服そうな顔をしていた由良はしぶしぶ妥協したようだった。

由良は可憐な白い花を咲かせた水仙の前にしゃがんで指をさした。「これ、わたしが植えたの。庭師が植えていたんだけど、やらせてって頼んで一個だけわたしが植えたのよ。みんな、そんなことやるもんじゃないって怒ってたけど」

水仙を見下ろす横顔が、ふと寂しげなものに見えて、夕影はまた

たいた。しかし、次に顔を上げたときには快活な少女のものに戻っていたので、もしかしたら見間違いだっただのかもしれない。

「桜はもうすぐ咲きそうね！」

ぴよんと立ち上がり、桜の根元までやってきた由良は、幹に手を添えてまぶたを閉じた。

「もうちよつとなのよ……あともうちよつと」

口の中で呟いていたかと思うと、不思議なことが起きた。

夕影には桜が身震いしたように見えた。そして、膨らんでいたつぼみがひとつ、またひとつと開いていく。

まるでなにかが急ぎたてて、咲けと命じているように。

風もないのにさわさわと揺れる梢に、夕影は無意識に喉を鳴らし、唾を飲み込む。枝についたつぼみがあちらこちらで、春のほんのわずかな、いつとぎのために蓄えられた柔らかな色を見せ始めた。

（なんだ、これ……っ?!）

今まで感じたことのない得体の知れない力と、それによって目の前で不可思議な現象が起きていることを目の当たりにして、夕影は背筋を冷たい手でふつと撫でられた気がした。

由良は祈るように閉じていたまぶたをゆっくりと開けた。見る見るうちに満開となった桜を見上げて満足そうにうふふと笑う。

「見て！咲いたわ！」

無邪気に笑いかける少女に、先ほどとはまた違った恐怖を感じた。

（これが龍の力?!）

万物をも従える、世界を手に入れる力。

およそ人知の及ばぬ力だ。そしてそれを手に入れてしまった由良の幼さを憂いた。

由良はなにも悪意など持っていない。純粹に桜が見たいと思うがゆえの行動だったのだらう。

だが、桜にしてみればまだ準備が整っていなかったのかもしれない。無理矢理に開花の力を引き出されて樹に負担はないのだろうか。神の力といえど、ないとは言い切れない。

それを知らずに由良が力を使い続けたらと、夕影は子供心に考えざるを得なかった。

とても夢のようなことで、そしてひどく恐ろしい。

はしゃぐ由良は呆然と立ち尽くす夕影の顔の前で手を振って見せた。

「怖い顔してる」

「……あ、驚いただけです」

「ねえ、小枝を取って。お座敷に飾っておきたいの」

駄々をこねた由良に仕方なく夕影は桜を見上げた。しかし、一番低いところでも手が届きそうになかった。

大人であれば届くかもしれない。

「お待ちください」

言い置いて、女中を呼びに行く。駆け寄ったところで女中たちの様子がおかしなことに気がついた。

なにかに怯えている顔だ。なにかに怯えているのかすぐに合点があった。

異質なものに慣れていているはずの自分でさえ恐怖を覚えた。誰でも何かしらの感情を抱くだろう。

夕影がこちらへやってきたことで怪訝そうな表情も加わった。

「由良様が、桜の小枝を取ってほしいそうなのですがわたしでは届きません。代わりに取っていただけますか」

女中たちは一斉に眉をひそめた。肘で隣の女中をつつき合う。

「あなた行きなさいよ」

「いやよ、あなたこそ行ったらどう？」

「あなたが行けばいいじゃない」

それぞれ押し付け合い、結局一番背の高い女中が出ることになった。すらりとした彼女が小枝を折る様を縁側の側で見ていた夕影の耳に、ひそひそと女中の話す声が聞こえた。

(やあね、人とは思えないわ)

(化け物よ、化け物)

なぜか聞いていた夕影の方がどきつとした。なにも聞きたかったわけではないのに、勝手に耳が拾ってしまったのだ。どこか盗み聞きをしてしまったような後ろめたさを感じて夕影は視線を落とした。

## 夕影の任務（4）

何事もなくあっというまに一年が過ぎた。

由良の警護をしているはずの白波衆とも顔を合わせることもなく（もつとも、知らぬうちに接触はしていたかもしれないが）、夕影が間者だと気づかれた様子もなかった。

時折やってくる報せの鳥に「変化なし」と文をつけて送り返しているほど平和そのものだった。

変化が起きたのはそれから数日のことだった。

由良の夕餉の膳を厨に取りに行った夕影に、珍しく女中頭のお初が寄ってきた。

「今日は大殿が狩りにお出かけになられた際に、珍しい肉が手に入りました。姫様には残さず召し上がっていただくように」

「はい。かしこまりました」

現？峨郷国主の安齋康持は狩りを趣味としているので、鹿や猪といった獲物を捕らえて帰ってくるなど珍しくはなかった。しかし、いつもと何かが違うことを、夕影は敏感に感じ取った。

ふと、一年前ここへ一緒に密偵としてやってきたおたつの姿が目に入る。すっかり厨女の恰好も板について、洗い桶に山盛りになった大根の葉を落としていた。

ふと、彼女は薄く唇を開いた。

「龍」

わずかな唇の動きでそう読み取った。本当に一瞬だったので、普通の人から見れば短く息でもついたようにしか見えない。

夕影は膳を持って厨を後にした。

龍と聞いて、膳を運ぶ道すがら改めて素揚げにしてある肉を見下ろした。

過去、神である龍をその身に降ろした少女の肉だ。不思議と、死した後も龍の力を留めている少女の肉は腐らずにいつまでも綺麗な

ままだそうだ。

二番目に龍を降ろすことに成功した少女に、初代の肉を食わせる。そうすると少女は二匹の力を手に入れる。龍を降ろした者でしか龍の力を継承できないが、安齋一族はそうして長いあいだ神を飼ってきた。

何の変哲もないこの肉片には、八龍という想像を絶する力が込められている。

(やっとだ。やっと九龍になる……)

この一年、平和だっただけに長かった。「変化なし」と文を送るたび、もつといい知らせを持っていきたい、もつと霧矢の役に立ちたいと思った。

これでようやく、霧矢の夢に一步近付く。

一方で、桜の花を咲かせて見せた龍の力を思い出し、九龍となったら一体どうなってしまうのか未恐ろしさも感じていた。

「由良様、夕餉です。大殿が狩りで仕留めた肉だそうですよ、残さず召し上がってくださいね」

灯台に灯りを入れた中で文机に向かって書物を読んでいた由良は、ぱつと顔を上げた。

「お父様はまた狩りに出ていらしたの？たまにはわたしも連れて行ってほしいわ」

「由良様は、馬に乗れましたっけ？」

馬に乗れなければ狩りは無理だ。馬と聞いて由良は肩をすくめる。「見たこともないの。いいのよ、本気にしないで。……おいしそうね。いただきます」

手を合わせてから由良は肉に口をつけた。胸が高鳴ったが、すぐに変化が起こるわけもなく、しばらくして由良は夕餉を残さず食べ終えた。

膳を下げて厨に戻ると、いつもならば厨などで姿を見かけない家臣が何をするでもなく厳しい顔で立っていた。

夕影の手にした膳が厨女に渡り、それが全て綺麗に平らげられて

いるのを遠目で確認すると家臣はふつと姿を消した。

気分がすぐれないので早めに床に入る、と由良が言い出したのはそれから一刻ほどたった頃だった。

布団を敷き、準備ができるかと夕影はひとことかける。

「なにかありましたらお呼びください」

灯台の灯を消すと、座敷はふつと暗闇に包まれた。夕影は座敷を出ると閉じた障子の前に腰を下ろす。

空を見上げると、墨を流したような真っ暗な空には、だんこのようなまん丸の月が浮いていた。

あたりはとても静かだ。姫様が早く床に入るということで、女中たちも仕事を終えた者から寝起きをする座敷へと戻っていった。夕影だけは気分がすぐれないと言った由良の様子を見るために控えていた。後で交代で仮眠を取るので問題ない。

薄ぼんやりとした中で、桜の花びらが風に吹かれて小雪のように散っていた。幹は夜に紛れて沈んでしまっているが、色の薄い満開の花びらだけ闇夜に浮かんで見える。

「ゆう、と呼ばれた気がして夕影は振り返った。

「由良様、いかがでしたしました？……由良様？」

「……つでもないっ、……誰も、入ってこないでっ」

吐き出すような声が返ってきた。人払いを頼まれて、わかりましたとだけ答えておく。

そのあと、背にした障子の中からは、乱れた呼吸と喘ぐような声が何度も聞こえた。うわごとのように「苦しい」「助けて」と消え入りそうな声を聞いているのは苦痛だった。

夕影が交代の直前にひっそりと様子を見に入ったのは、もう少し後のことだった。

なにかおかしいと気づいたのは、夕餉の少し後だった。心臓はドクドクと早鐘のように打ち始め、体は火照り、めまいがした。

(熱…?)

にしては、心臓の鼓動が妙な気もする。はて、風邪でめまいは起こつただろうかと考えていたが、次第に息苦しくなってきたので嫌な予感が脳裏をかすめた。

(……なにか、妙なものでも食べたかしら)

いつもとなんら変わらない夕餉だったはずだ。猛毒を持つものもあるというきのこが夕餉に入っていた覚えもない。

しかし、もし毒だったとしたら自分のもとへ膳が来る前にわかつていたはずだ。必ず毒味を終えたものが由良の前に出される。

考えているうちにも耳鳴りがして気が遠くなってきた。

「おまえか……」

ふっと一瞬意識が遠のいたとき、夢うつつからささやかれているようなひっそりとした声が由良の耳をくすぐった。

もちろんそこには誰かがいるわけでもなく、由良は頭を抱えた。

ただでさえ自分は気味悪がられているというのに、変な声が聞こえるなんて言ったら女中にも医者にも何を言われるかわかったものではない。早く寝たいとだけ女中に告げた。

日に干された布団に潜り込んでしばらくすると苦しさは増してきた。心臓を握り締められているような息苦しさだ。全身はあぶらわれているように熱いのに、冷や汗まで出てきた。

どうしよう、本当に毒だったら。

不安になって、障子の方へ寝返りを打った。染みひとつない真っ白な障子は仄明るく照らされ、薄い影が落ちていた。

なにかあったら呼んでくださいと言った側仕えの少年の名を、心細くなつて舌の上に乗せた。

「……ゆう……」

かすれた声が漏れたとき、視界にあった自分の腕が奇妙なものに見えた。

夜着の袖から伸びた腕には、蛇のようなつろこがびっしり生えており、指先に鋭く尖った鉤爪があった。

びくつとしたところで障子越しに夕影から声がかかる。

激しく打つ心臓の音ですべての音が掻き消されてしまいそうだ。返事のない由良を不思議に思ってたか、夕影はもう一度呼んできた。これで答えなければ夕影は障子を開けるだろう。

怖い……でも、見られてしまう方がもつと怖い！

女中たちが自分のことをまた化け物だと噂するかもしれない。

「……つでもないっ、……誰も、入ってこないでっ」

それだけ言うと、由良は体を縮めて丸まった。

怖い痛い熱い。

体が引きちぎられているみたいだ。頭も割れるように痛い。ぎゅっときつくまぶたを閉じると、途端にどこかへ引つ張られていくような浮遊感が襲った。

収まったところでそっと目を開くと、そこは真っ暗な闇の中だった。

（どっ、どっ……）

夢だろうか。いつの間にか眠ってしまったのだろうか。

ふと顔を上げると、そこには大きな蛇の顔があった。

（違う、蛇じゃない?!）

光り輝く鱗を持ったそれは、蛇よりさらに神々しく、こちらを真っ直ぐに見ている瞳は七色に輝いた。顔を覆ったたてがみは金色の稲穂のようにそよぐ。

いつかも、どこかでこれを見た。

（龍だ……!!）

記憶もおぼろげな幼い頃、これと似たものを見たことがある。それだけははっきりと覚えていた。

龍は七色の瞳で真っ直ぐに由良を見つめた。

『私の器はおまえか』

威敵に満ちた男とも女ともつかない声は、何重にも重なって由良を包んだ。はつとして周りを見回すと、正面にいた龍の他にも八匹の龍がぐるりと由良を取り囲んでいた。

一斉にこちらを見ている龍は、それぞれ色合いが微妙に異なるものの、どれも美しい輝きを放っていた。

だが、龍たちは由良など一口で呑み込んでしまえるような大きさだったので、由良は身をすくめた。

『私の私のわわわ私の器うつわうつわはお前おまええええか』

幾重にも声は重なり、由良は耳鳴りがした。

目を細めたそのとき、一匹がずるりと這い出した。またたきほどの時間もかからずに由良のもとへ飛びかかってくると、口の中に滑り込んだ。

「んぐつ……?!」

喉をつるりとした長いものが通っていく。不思議と苦しくも、臓腑が破裂したりもせず、あんな大きなものがどうやってこの口から体内に入ったのかと思うほど、一瞬でするりと尾っぽまで全て呑み込んでしまった。

自分の体は一体どうなってしまったのかと思っているうちに、次々と飛びかかってきた龍はそれぞれ目に、鼻に、耳に、臍へそに入り込んで消えていった。

「やだっ、な、に……どうして」

すると今まで静かだった心の臓がドクンと大きく跳ねて、耳の奥でザアザアと血潮が逆流する音がした。脈打つ心臓は次第に壊れそうなほど大きく打ち始め、この体が破裂してしまうのではないかという恐怖に襲われた。

「ああつ……!!」

耳を塞いで目を閉じると、再び襟元を引っ張られる感覚に陥った。  
「……う、あ……はあ、はあ、あ……」

さっと霧が晴れたように急に感覚がはっきりして、灯も入ってい

ない闇夜にまぶしささえ覚えた。

頭がかち割れそうに痛む中、薄く目を開く。月明かりに照らされた、なんの変化もない自分の寝所だった。真っ白な敷布を握りしめている自分の手は、紛れもなく人の手だ。

耳が痛いほど静まり返っていて、聞こえてくるのは自分の荒い呼吸だけだった。

「ゆ、め……？」

違う、夢じゃない。

体の中に、龍が入ってきて……。

するりと音もなく体内に入り込んできた感覚をおぼろげに思い出して、身の毛がよだつ思いだった。

「うつつ」

体中が針で刺されているようだ。痛い、熱い。

苦しい。

喘いでいると、ふと何かの気配がした。

「……だあれ？」

はあはあと息を切らしながら薄く目を開けた。滲む視界には誰の姿も見えなくて、気のせいだったかとうつつすら思った。

すると、ひんやりとしたものが額に触れた。

（やっぱり、誰がいる……）

「やめて、見ないで……」

吐息混じりに懇願すると、ひんやりしたものは戸惑ったようにいったん引いた。由良はどうかして側にいる者から隠れようと、体を丸めこんだ。

自分の体は今どんな姿をしているんだろう。もし、人の姿をしていなかったら、女中たちにまた化け物だと言われるかもしれない。

違う。化け物なんかじゃない……。

「わたし、ばけものなんかじゃない……」

そんなふうには言わないで。

「お願い、見ないで」

そして、もしもわたしが人の姿でなかったら、それを誰にも言わないで。

体中を突き刺すような痛みには耐えながら自分の体に腕を回した。ひんやりとしたものは、躊躇しながらも額に張り付いた髪をよけた。何度か髪を撫で、頬を撫でる。ゆっくりと火照った頬をなぞっていく指の感触が、不安に満ちていた心に沁みた。

(気持ちいい)

そつと壊れ物でも扱つような仕草が、由良には不思議でたまらなかつた。

「…だれ…？」

「」

問うと相手はなにかを言ったようだったが、由良の耳はうまく音を拾えなかつた。

優しく撫でられてどこか安堵したことで、徐々に痛みが引いてきた。と同時に、疲労から眠気がとるとと由良を襲う。手の主はずでにいずこかへと消えていて、沈むように由良は眠りに落ちた。

## 夕影の任務（5）

翌日、昼過ぎになってようやく由良は目を覚ました。体の痛みは消えていたが、ひどく疲れて体に重しが乗っているのかと思っただけだと気がだるかった。

「起きられましたか」

声をかけてきた夕影はいくらかほっとした様子で、お加減はいかがですかと問うた。

「……のど渴いた」

「白湯をお持ちしますね」

夕影が座敷から出て行ってしまつと、途端にしんと静まり返る。のろのろと起き上がると、全身が汗ばんで気持ちが悪かった。湯を使いたい。

空の真上まで来た日の光で、まだ閉め切っている障子が真っ白に光って目に染み込んだ。

「……ゆめ」

とてもじゃないけれど夢とは思えないほど現実味を帯びていて、体の穴から龍が滑り込んできた感触に身震いした。

自分は人の姿をしているだろうか。心配になって鏡台まで這って行くと鏡を覗き込む。

疲れ果てて目の下にくまができているが、ひどい顔ということ以外はいつもどおりだった。

だいぶぼんやりとしていたらしく、白湯の湯呑みを手にした夕影がやってくるまで鏡台の前から動けなかった。

「いかがでしたか」

「うん……」

湯呑みを受け取って喉を湿らせた。いい塩梅に温かい白湯が喉を通っていったことでほっと安堵した。

「わたし……、ううん、……ねえ、ゆう」

ためらいがちに口を開いた由良は、湯呑みに落としていた視線を上げた。

「ゆう、昨日の夜に、わたしのところへ来た？」

「いいえ？由良様が床に入られてからしばらくたったあたりに呼ばれた気がして、お声はかけましたが」

では、あの気配は彼ではなかったのだろうか。

由良は湯呑みを置くと、夕影の方へ体ごと向き直ってはっしとその手を掴んだ。ぎよっとした彼は素早く身を引いたが、引っ張って頬まで持つてくる。

「ちよつと撫でてみて」

「えっ…？」

唇を尖らせた由良は手を離す様子がなかったもので、仕方なく夕影はふつくらとしたまろい頬を撫でることになった。

夜中、<sup>よじゆう</sup>ずつと汗をかいていたせいか、その頬は冷たかった。ほの暗い中に浮かんだ白い頬を撫でたときとはうって変わって。

苦しみを訴える声が聞くに堪え切れず、様子を見に寢所へ入った。相当暴れたのか上掛けははがれ、黒々とした長い髪は乱れて真っ白な敷布の上に散らばっていた。夜着から伸びた四肢は妙に青白く浮いて見えて、奇妙に思ったことを覚えている。

苦しさで、敷布を掴んでいる手が真っ白だった。

見ないでくれと悲鳴のように声を上げた彼女が痛ましかった。そして思わず「すみません」と口をついて出た。

由良には早く九龍になってほしかった。九龍にさえなれば、霧矢の喜ぶ顔が見られると思ったから。でも、いざ八龍の力を継承する段階になって、こんなに苦しみが伴うものだとは思っていなかったのだ。

痛い、熱いとうなされる彼女は何度も助けを求めたが、少女に手を差し伸べる者は誰一人としていなかった。

彼女は幼い身で、たった一人で辛酸を嘗めたのだ。

早く九龍になってほしいと思った自分を恥じた。だから、懺悔が

つい口をついた。

懺悔に意味はないというのに。

「うーん……」

目を細めた夕影は、由良の思案声を聞いてはたと我に返った。

「もうよろしいですか」

「うん、よくわからなかった。ゆう、温かい手をしているのね」

手を引つ込ませた夕影は、己の手をさすった。

「そうでしょうか」

「うん……そうだ、湯の準備をしてほしいの」

「では、ただいま用意して参りますね」

夕影が下がる時女中が布団を上げにやってきたので、由良は追いつ出されるように隣の座敷に移った。

家人たちの風呂は公衆浴場のように広いものだが、安斎の大殿と由良の風呂だけは別であった。厨の側にある専用の湯殿には、湯浴みをするときには湯沸かし役が必ず外で窯に張り付いていた。

由良が湯浴みをするときは、必ず手伝いで女中が湯殿に入った。

昨晚、苦しくて夕影を呼んだときに自分の体に鱗が生えて見えたので、誰かに素肌を見られることが恐ろしかったが、女中が着物を脱がせると鱗など一つも生えてはいなかった。

(なんだったんだらう……)

本当に夢だったのだろうか、とぼんやりと思いつつ大人しく湯浴みを終えた。

湯浴みと遅い昼餉を済ませた由良は、寝不足からついついぼうつとしてしまい、縁側からなにげなく庭を見ていた。

今日は暖かく、日差しが柔らかく降り注ぐので居眠りにはもってこいだった。

「昨夜は早く床に入りましたが、お加減はいかがですか？」

うつらうつらとしていた由良に夕影は声を掛けた。昨夜、あんなにも苦しんでいたのに嘘のようにけろりとしているので、九龍を宿すことに成功したのか不審だったからだ。目に見えて変化がないだ

けに余計に観察しておかなければならない。

由良は梅の木に飛んできた雀をとろりとした視線で追いながら答えた。

「うん。眠いけど……」

苦しくもなければ痛くもない。鱗も生えていないからきつと何でもなかったのだ。

チュン、チュン、と小さく鳴きながら数羽で戯れている雀たちは、せわしなく飛び交った。それを視線で追っていた由良は、次第に眉根をひそめ始める。

夕影が異変に気づいたとき、由良はすでに怒鳴っていた。

「やかましいのよ!!」

癩癧を起こすことのなかった由良が、ただ雀が飛んでいたというだけで怒鳴ったことに夕影は目を見開いた。由良自身もはたと我に返り、そして顔色を失った。

「あ……」

由良が怯えた視線を外へ向けていたことから、夕影はそちらを弾かれたように振り返る。

ぼとりと枝になった実が落ちるのと同じに、枝にとまっていた雀が次々に地面へ落下した。

(敵襲?!)

九龍の力はなにも加賀衆だけが狙っているものではない。他国も喉から手が出るほど欲しいものだ。九龍が完成した今、他国が間者を送り込んできているもなんら不思議はなかった。

敵襲かと思い、由良をかばって構えた夕影は、しかし何者の気配もないことで二番目の可能性が頭をよぎった。恐る恐る由良を振り返る。

由良は青ざめた顔で梅の木を見ていた。

(まさか、由良様がやったというのか?!)

疑念の視線を向けると、由良は青ざめた頬に手を当てて、がくがくと震え始めた。色を失った唇が、薄く開かれた。

「いやっ……！」

「由良様！」

由良はまるぶように駆け出して行ってしまった。取り乱した由良は座敷に飛び込むと控えていた女中のお梅にしがみつく。

尋常ではない様子にお梅はとにかく驚いて短い悲鳴を上げた。

「一体どうされたのです？」

由良は震えながらお梅にしがみついていて答えられなかったのだから、これには夕影が答えた。

「雀が……」

「雀？」

「庭の木にとまっていた雀が急に落下して、死んでしまったのです。突然だったので由良様はきつと驚いたのでしょうか。……片付けてきます」

お梅と一緒にいた女中が、不吉な、と呟いたのを夕影は背中であらわした。

戻って庭に降り立った夕影は、梅の木の根元にしゃがみ込む。地面に力なく横たわっている雀をすくい上げた。

確かに、毒の痕跡や外傷は見当たらない。

口の中に苦いものが広がった。あんな由良を見たのは初めてだった。普段は癩癩など起こす様子も見せない明るい子だ。

幼すぎる身で九龍という強大な力を入れてしまったため、制御がうまくできないのだろう。

（だけど、一瞬にして命を奪えるなんて）

世界を制する力と言われる九龍の力に恐怖を覚え、また否応なしに生贄となった由良が哀れでならなかった。

土に返してやるために掘っていると、ふと後ろに人影が立った。振り返ってみればそこに立っていたのは由良で、口をぎゅっと引き結んで何かを我慢しているような怖い顔をしていた。

「由良様」

隣にしゃがみ込んだ彼女は、夕影の掘った穴に小さな手を突っ込

み、自らも掘り始めた。夕影は慌ててその手を掴み上げる。

「由良様、汚れます」

「いいの、わたしも手伝う」

怖い顔をしたまま地面をにらみつけ、土に爪を立てる由良は引く様子がなかった。夕影はそれ以上止めなかった。

由良は小さな手でぐいぐいと土をかいたが、野犬に掘り起こされない程度の深さを掘るのは幼い二人では骨が折れた。

そのあいだ、由良はひとことも口を開かなかった。

（気丈だな……）

普通だったら、命あるものを 不意の出来事だったとしても

己が殺してしまったとなれば取り乱すだろう。確かに最初は取り乱した。しかし、戻ってきた由良は己の犯してしまった罪を真っ直ぐに受け止めようとしている。

己が持つ力に対する恐怖や、犠牲になった雀への懺悔すら口に出さずにいる由良をちらりと横目で見た。

爪の間に土が入っても必死に掘り進める由良が嗚咽を上げていることにずいぶん前から気づいていたが、夕影は見なかったことにした。穴の中にそつと雀たちを寝かせた由良は、丁寧に土をかけてやる。

吊ってやるあいだ、由良はずっと涙を流し続けていた。

夕影が報せを送ると、一度報告に戻って来いという内容の文が返ってきたため、一年ぶりに里の土を踏むこととなった。

霧矢の屋敷を訪ねた夕影は、里を出る前と同じに霧矢の真向かいに座った。霧矢は相変わらず触れれば切れそうな鋭さを纏っており、一年前と違うことはその場に夕影しかいないということだけであった。

「九龍は宿ったようですが……やはり、まだ力は安定していないようです」

今まで見てきたことを順繰りに説明すると、霧矢は顎を撫でて考える仕草をした。夕影はつい先日起こった雀の話をする。

「先日も九龍の力で庭の雀が突然死しました。姫様本人にその気がなくとも、感情が高ぶると力が暴発するようです」

「さて、九龍姫はいくつだったか」

「今年六つにおなりです」

「ふむ。まあ、幼子ゆえの暴走ということはあるだろうな。年を経ればうまく制御することが可能になってくるだろう。今はまだ力が安定していなくとも問題ない。今はな」

含みを持った言葉に、夕影は小首をかしげた。

「霸王となるには九龍姫を手に入れることもそうだが、まず姫が女になっていることが前提条件なのだ」

「おんな？」

「そうだ。お前も母から生まれただろう。人は皆、ある年齢になると体が子を産む準備を始める。九龍姫もそうならなければ、いくら我らが手に入れようと我らに九龍の力は操れない」

「はあ…」

霧矢の言っていることは、いまいち理解できなかった。「女になる」というのは一体どういうことなのだろう。由良は誰がどう見ても女の子だ。それ以上どうやって「女になる」というのだろうか。

気の抜けた返事に霧矢は笑う。

「夕影には少々早かったな。お前がもう少し大きくなったら詳しく話すとしよう。今は九龍姫の様子を観察しておくことが第一だな」

霧矢の屋敷を後にした夕影は、一人で歩きながら霧矢の言った言葉を思い返していた。

準備って、なんだろう。いつか自分もその準備をすることになるのだろうか。

何が必要なのかな、とトンビが舞う空を見上げながらぼんやりと思った。

## ほのかな恋心(1)

「面を上げよ……楽にせい」  
「は」

女中頭のお初は顔を上げて姿勢を正した。

背後に勇猛に牙をむく虎の絵の屏風を置いた上座には、壮年の偉丈夫が座していた。？ 峨郷国主、安 斎康持は見事な螺鈿細工の脇息にもたれ、口元に蓄えたひげを撫でて静かに問うた。

「姫はいくつになったのだったか」

「はい。今年十におなりです」

「十か……いまだ兆候は見えぬか」

「まだにございます。体の成長が止まりましたら、おいおいその時期もやってくるかと。なにより女人の体というものは難しいものゆえ、待っていたたくしか……」

お初が許しを乞うようにこつべを垂れる。

康持は険しい顔をして片手に持った扇子をゆっくりと開いて閉じるを繰り返す。縦に長い座敷に、パラ、パラと扇子の音がかすかに響いた。

しばらく沈黙がおりる。そのあいだ、控えている家臣は身じろぎもせずに視線を落としていた。

「よい、仕方があるまい。しかしよくよく見逃さぬように。もしそのときがくることあれば、何を差し置いてもまずわしに報告せよ」

「は」

「女にならなければ、ことは進まぬ……」

一人呟いた声をお初は頭を深く下げて聞かなかったことにして、静かにその場を下がった。

季節は巡り、同じ春を四度繰り返すと、夕影は十三、由良は十に

なつた。

「おや、ゆう?」

夕影が厨の裏を通りかかると、聞き覚えのある声が呼び止めた。裏手の井戸から水をくみ上げていたのは加賀忍のおたつで、彼女は前かけて手を拭うとどこかたまげたような顔をして何度かまたいたあとに破顔した。

「ああ、やつぱり。しばらく見ないあいだにおつきくなったねえ」

側へ寄れば、おたつと視線が同じ高さであった。確かに城へともに来たときは夕影の頭の先はおたつの肩までも届かなかったのだ。

久方ぶりに面と向かって言葉を交わしたおたつは、お姉さんという印象は変わらずであったが、そこにいくらか艶めかしさが加わっていた。町娘ならば嫁いでいてもなんらおかしくはない年頃だ。

化粧つ気のない顔だったが快活に笑う顔が印象的で、そのままでも十分に美しい。

おたつをまじまじと見た夕影ははてと小首をかしげた。

「おたつさんが縮んだんじゃ」

「馬鹿言うんじゃないよ。わたしはまだ縮むような年じゃない」

怒られた夕影は脳天を掴まれてぐりぐりと手荒く撫でられる。

「男だからね、これからもっと伸びるよゆうは」

「そ、それは困ります」

家人たちの着物は一年に一度、年があげた頃に安斎の大殿から支給される。下働きの者は特に摩耗が激しいため、下男下女らは繕いながら新しい着物が支給される日を今か今かと待った。

夕影の場合は着物が破れたりするということとは滅多にないが、日々成長しているのでやはり一年経つと寸足らずになるのだった。

「これ以上背が伸びると、着物がつんつるてんになります」

「そんなの、好きなおなごに袖でも裾でも仕立て直してもらえばいいじゃないか。一人や二人いるだろう?」

夕影の周りは女中だらけだが、彼より年若い女中から一回りと言わず三回りも四回りもお年を召した女中までいるにもかかわらず、

色恋には程遠かった。

「……いませんよ、そんな人。おたつさんは、好きな人にそういうことしてあげているんですか？」

ようやく解放された夕影は乱れた髪を撫でつけながらおたつを見た。彼女はきよんとして、それから腕を組むと感心して何度か頷く。

「いやあ、しばらく見ないうちに言うようになったねえ。可愛げがなくなるってこういうことかね」

「どういう意味ですか」

軽くねめつけると、おたつはおおこわと呟いて首をすくめた。井戸水を汲んだ手桶を持ち上げると、じゃあねと手を振って厨に戻って行った。

(恋い慕う相手なんかいやしない……)

第一、そんなことにうつつを抜かしている状況ではない。自分は敵の手のうちから九龍姫を奪いに密偵としてやってきているのだ。惚れた腫れたなどというのはもってのほかである。

(女の人って、そういう浮いた話好きだなあ)

密命を受けているただなかでも女は女の性分が出る。ある意味でおたつだけではなく全ての女性はすごいものだ。夕影は密かに感心した。

由良の座敷に戻ると、なぜか彼女は開け放たれた障子から庭を見るでもなくうつむいていた。陽気はいいというのに一体どうしたとこのだろうか。

「由良様？気分でも悪いのですか？」

鬱々とした様子の由良は、夕影の姿を見てぱっと顔を上げたが、表情は曇ったままだった。視線は再び畳の上に落ちてしまい、膝の上で己の指をいじくった。

「具合が悪いわけじゃ、ないの」

「では、なにか心配ごとでも？ゆうでよければ聞きましょう。もし由良様が誰にも話したくないというのでしたら別ですが」

傍に控えた夕影を由良は見上げ、そうしてしばらく視線を落とす  
て躊躇した。答えが返ってくるまで待つているのは夕影にとって苦  
痛ではない。むしろ、由良に信頼されている数少ない側仕えの一人  
と思えば、それ以上幸運なことはなかった。

女中の中には由良の持つ九龍の力を恐れ、ありもしないことを噂  
する者もいた。それらは巡り巡って由良の耳に入るので、彼女がそ  
れを聞いて傷ついていることは想像に難くない。

信頼を得るために夕影はそういった類のことは口にしない。口に  
したくないというのが本音だ。里では神童と呼ばれた出来のいい兄  
と表でも陰でも比べられていた夕影は、陰口の陰湿さをなによりよ  
く理解していた。

自分を悪く言わず、むしろこうして気にかけてくれる夕影を、彼  
女は特に信頼しているようであった。

彼女はおずおずと口を開いた。

「ねえ、ゆう。わたし、顔も知らない殿方のところへ嫁ぐの？」  
「え？」

ここ数日、城内では「大殿は由良様の輿入れ先を考えているらし  
い」という噂がまことしやかにささやかれていた。とうとう由良本  
人の耳にも入ったようだ。

だが、長年夢見てきた九龍の力を宿した少女を手に入れた安斎が、  
彼女をむざむざ手放すことはありえない。加賀忍の調べたところに  
よれば、そのような動きは一切見せていないという。

もとより、安斎一族は九龍といい白波衆といい、他国に比類なき  
ほどの強大な力を持っている。わざわざ他国に娘を嫁がせて固い絆  
を作らずとも、侵略すれば一気にかたがつく。

しかし、それを知らずにいる由良は不安げな表情を浮かべ、体ご  
と夕影の方を向いた。

「だって、みんながそう言ってるわ。お父様はわたしの旦那様とな  
るお方を探しているんだって。……わたし、いつ嫁がなければなら  
ないのかしら。いつまでここにいられるの？」

なにも 己が安齋の本当の娘ではないということすら 知らない由良は、家人たちの間で飛び交っている根も葉もない噂をも信じてしまう。

真実を知っている夕影は慎重に答える。

「由良様、それは、家人らの間で出回っているただの噂でしょう。真実であるとは言えませんよ。もし真実であれば、大殿も由良様にひとこと申しましょう」

「でも、わたしはいつかここを出て、お嫁に行くのよね？」

「それは…、大殿が決めることです」

夕影もはつきりと違うとは言えない。たしなめに近い言葉しかかけない夕影に、由良は距離を詰めた。

「ねえ、じゃあ…わたしの嫁ぎ先に、ゆうはついて来てくれる？ たぶん行けない。」

ふと口ごもった彼を見て、由良は泣きそうに顔をゆがめると、次の瞬間にはひしつと抱きついた。振り払おうと思えば、簡単にできた。

ただ、それをしなかったのは、咄嗟に掴んだ肩が思ったより華奢で頼りなかったからだ。力任せに振り払えば呆気なく壊れてしまいそうな気がした。

(細い…)

ふと、水底から泡が浮いてくるように、体のどこかから唐突にぷくりと何かが浮きあがった。突然湧き上がる様が怒りや悲しみといった感情に似ていたが、夕影の知り得るどれとも異なっていた。

センブリを嘗めたときみたいにながくて苦しいのに、胸のあたりは妙に温かい。

奇妙な感覚に襲われた夕影は、壊れそうなほど頼りない体ですがみついてくる由良に視線を落とした。

「ゆら、さま……」

戸惑っている、由良はさらに抱きつく腕に力を込めた。

「いやっ…いやよ、そんなのいや！！わたし、どこにも嫁ぎたくない」

い……！！」

そう言って夕影の胸に顔をうずめると、嗚咽を上げて小さく泣き始めた。大声を上げて泣きわめいてしまうと、聞きつけた女中が駆けつけると思ったのだろう。ひっそりと誰にも知られずに悲しみや不安を抱えているところがいじらしかった。

声を殺してすがりつく由良の温かい体にそつと腕を回し、包み込んだ。

刹那、無意識に動いてしまった己の腕を叱咤する。

(なにをしている)

由良を油断させることは必要だ。だが、ここまでしてやることは必要か？

(……わからない)

己の中ではじき出された答えが曖昧なことで、きつく目を閉じた。この行動が必要かどうか、不要かどうか、考える前に勝手に体が動いていた。

そう、たぶん、

(俺は、今の由良様を突き放すことはできない)

夕凧だったならどう対処しただろうと頭の片隅で思いながら、すっぽりと胸の中に収まる華奢な体をさらに抱き込んだ。

しばらくしてひとしきり泣いて泣きやんだあと、落ちついた由良は気恥かしそうに身じろいだ。夕影が腕の力を緩めると彼女は濡れた目元を袂で強引に拭った。

ただでさえ泣き腫らした顔をしているというのに、それ以上刺激を加えれば肌が赤くなってしまふ。咄嗟に夕影は由良の腕を掴んでやめさせた。

「そのようにこすっては、あとあと痛くなりますよ。綺麗な御顔が台無しです」

と、涙でぐちゃぐちゃの顔を優しく拭ってやる。目を閉じて大人しくされるがままになっていた由良はくすぐったそうに笑った。

「ゆづは優しいのね。本当のお兄様なら良かった」

由良の心からの言葉に夕影は唇を噛んだ。

悲しくなるようなことを言われたわけでもないのに、胸がぐつと苦しくなった。

優しいわけじゃない。

いつか信頼を裏切ることがわかっている、偽りの優しさだ。

疑う余地もないほど信用させて、この城から連れ出し、霧矢に献上する。優しく見えるのは霧矢の長年の夢が叶うようにするための布石だ。

信頼されていた方が後々うまくことが運ぶからだ。

でも……、

(本当に、それだけか……?)

今まで頭によぎったことすらない疑問がふと胸を突く。一拍置いて、湧きあがった愚かな疑問を振り払った。

(馬鹿な、何をくだらないことを考えている。俺の感情など些細なことにすぎない。それより、霧矢様の長年の望みが叶う、それだけを考える)

「ねえ、ゆづ」

はつとして、こちらを見上げてくる由良を見る。彼女は頬を桃色に染めほんの少し照れた様子で、しかし真っ直ぐな瞳をこちらへ向けて、言った。

「いつかここから、わたしを連れ出してね」

信用しきっているその真っ直ぐな瞳が、夕影にはまぶしかった。

いつか安斎の手からは奪い取る。真実、ここではないどこかへと連れて行くことになる。しかし、だからといって由良の望んでいる自由な世界へ連れて行くわけではない。

彼女を 九龍の力を 求めている、安斎ではない者のところへ連れていくのだから、現状とたいして変わりはないのかもしれない。

返事をじっと待つ由良を見下ろした。

この子に、心安らげる日々は来ないのではないかと思いつながら。

「由良様が、望むなら」

「ほんとう？約束よ！」

ぱっと顔色を明るくした由良に後ろめたい気持ちがあふくと膨れ上がる。

心の底から「はい」とは言えなかった。

## ほのかな恋心(2)

報告のため、夕影は里に戻った。夏を迎えた里では菱の白い花がため池を覆い尽くしていた。菱の実は火を通すと食料にもなり、乾燥させれば固く尖ったとげを持つ実は撒菱として利用できた。

逃走時、追手がかかったときに竹筒に入れた菱の実をばら撒けば、多少なりとも追手の足を止めることができる。

平地の池などに自生するが、この辺りでは自生していないため里のほずれに池を作り育てていた。実をつける時期になると、採種に子供たちもかり出される。採った実は翌年に花をつけ実をつける分を残して、天日で干して乾燥させる。この段階になると子供たちはだいぶ飽きてくる頃なので、あとは女たちの仕事となった。

懐かしさとともに菱の池を後にして、夕影は霧矢の屋敷に向かう。門をくぐり、あがりかまちから声をかけると、常と同じようにして霧矢の答える声が座敷からあった。座敷へ上がると、相も変わらず刃のような鋭さを身にまとった霧矢が円座に座していた。

霧矢はそこに座っているだけで威圧感を放つ。幼い頃は彼と対面していると獣に狙われているような恐怖と緊張で冷や汗をかいたものだが、今では己の体が大きくなったぶん、落ち着いて正面に座っ  
ていられることができた。

ただ、時折隻眼が背筋をひやりとさせる光りを含んでいることは確かだった。

「おお、夕影か」

「はい。ご報告に参りました」

夕影は深く頭を下げると、由良が現在の状況に対して不安や不満がつのっているように見えると霧矢に報告した。

「現在の状態に満足していれば、そのようなことは口にしないはず」  
今が連れ出す最良の時期なのではないかと夕影は思ったが、霧矢は難しい顔をしたまましばらく黙り込んだ。

「遊びで言ったのかもしれぬ。試しに、外へ連れ出すことをにおわせてみる。そこで否と言うのなら、本気ではなかったということだ。なにより、九龍姫を迎えるとなるとこちらもそれ相応の準備が必要になってくるからな。こちらの準備が整わなければ動けぬ。」

そう、それよりも…だ。九龍姫は女となつたか？」

「は……？」

夕影は何度かまたたいた。そういえば、何年か前に報告へ来たときにそういった話を聞いた気がする。

きよとんとしていた夕影を見て、霧矢は軽く笑う。

「いや済まぬ、夕影にはまだ教えていなかったか。そう、九龍はおなごに宿る。男を知らぬおなごにな」

昔と違い、その意味を理解した夕影は、かあつと頬を朱に染めた。なにより、十三を迎えた夕影の体は、すでに大人のものへと変わりつつあった。

体がどうなると男の子は男となるのか、おなごは女となるのかを理解していた。

ただ、年若い夕影にはまだ気恥かしさを伴う話題であつたので、居心地の悪さを感じて肩を縮めた。霧矢はその様子を気に留めずに話を続ける。

「九龍の力を操れるのは九龍に選ばれたおなごと、おなごの体を手に入れた者だけだ。この意味がわかるか？ゆえに九龍姫の持つ力を我らが自由に操るためには、まず九龍姫が女となっていることが必要なのだ。」

して、その様子はあるか？」

「ええと……」

思案して瞳をくりりと巡らせた。

由良が月のものを迎えたという話は耳にしていないうし、もし仮に迎えたとすればおめでたいことなので赤飯が炊かれるはずだ。だが、今まで赤飯が出たことはない。

逆に、由良が女になるということは九龍を狙う者たちが手を出す

きっかけにもなり得る。安斎は隠し通したいはずだ。隠すつもりであるならばおおっぴらに祝福はしないだろう。

しかし、そういった話題であれば耳の早い女中らのあいだで話題に上がるはず。

「いいえ、そのような様子はまだございません」

「九龍姫はいくつになったのだ」

「今年で十におなりです」

「十か」

霧矢は切れ長の目を伏せて顎を撫でた。しばし考えを巡らせた後、身じろぎもせずに正座していた夕影を見る。

「十なれば、いつそのような時期が来てもおかしくはないな。夕影、今しばらく様子を見よ」

「は」

軽く頭を下げた夕影は、その瞬間、背筋がひやりとして思わず顔を上げた。見れば霧矢は隻眼を細めて、まるで射殺すかのように夕影を見ていた。

ぞつとして血の気が引いた。同時に、チリチリと焦げるような恐怖が頭をもたげた。霧矢は地を這うような低い声で言った。

「わずかでもその様子を見つけ次第、報告せよ。安斎の小僧に先を越されてはならぬ、絶対にだ」

昔から、霧矢に見られているだけで、背後に虎でも飼っているのかと思うほど命の危機を感じた。

少しでも気を抜けば食い殺される。

「……は」

背筋を伸ばした夕影はそれだけ答えるのが精一杯だった。

霧矢の屋敷を辞したあと、夕影は里のはずれにある梵爺の小屋へ向かった。任務を受けて安斎の居城へ赴く前に、里に帰ってきたら顔を出せと嬉しい言葉をもらっていたので、里に戻ったときは顔を

見せるようにしている。

水田にはまぶしいほど青々とした稲が風に吹かれてそよいでいた。  
「よう、夕凧」

まぶしさに目を細めていた夕影は、頭上からかかった声に足を止めた。あぜ道に根を下ろしている立派な木から、軽い身のこなしで降りてきたのは半蔵だった。

里を後にしてから顔を合わせるのは久方ぶりであった。口の端を吊り上げてニヤニヤと笑う顔は昔から変わっていない。幼い頃から体の大きかった半蔵は、夕影とそう変わらない年齢でありながら、上背も大人と負けないほどになっていた。

自分を兄の夕凧と間違えている半蔵を見上げた。

この里で夕凧と夕影を見分けられる人物は母親ぐらいのものである。しかし、数年も顔を合わせていない今となっては母親も見分けることができるかどうか謎だ。

二人ともようやくと幼さの抜けてきた顔立ちをしており、成長して個性が出てくるかと思いきや、やはり鏡に映したようにそっくりなのだった。

一応、半蔵にひとこと断わっておく。

「夕影だ」

一瞬面食らった顔をした半蔵だったが、嘲笑うようにしてくつと喉で笑うと、再びニヤニヤと奇妙な笑みを浮かべた。

「ああ、そりゃあ失敬失敬。九龍の一件に抜擢された夕影様か」

嫌味を込めて半蔵は言った。なぜ俺が選ばれなかったのかとでも言いたいのか。

もともと体格の立派だった半蔵は天賦の才もあり、武芸に精を出していた。今では並の大人でもかなうまいとされるほどの腕前であった。ただし、細かい芸は苦手のようで、いまだに忍術はさっぱりらしい。

半蔵は獲物を見定める蛇よろしく、舐めまわすような視線で夕影のあちらこちらを見やると、正面に立って夕影の頬を平手で軽く叩

いた。

「随分と偉くなつたもんじゃねえか、ええ？夕影様よお。いけすかねえ臭いがぶんぶんすらあ」

顔を近づけてきた半蔵に目をすがめた。黙っている夕影が気に食わないのか、半蔵は一度離れると、腰に佩いていた忍刀をちらつかせた。

「どうだ？久しぶりに会つたいい機会に、手合わせでもするか？」  
体格からして夕影の遙か上をいく半蔵とでは、力でも敵うはずがない。結果は目に見えている。

斜に構えていた夕影は、悪ガキの時代からなんら変わらない半蔵に苛立ち、薄く唇を開いた。

「いいよ」

是と答えたことが信じられなかったのか、半蔵は眉根をひそめた。すでに鯉口を切っていた彼はいぶかしんで手を止める。

夕影は袖に仕込んでいる棒手裏剣を音も立てずに引き抜いた。

「ただし、気をつけた方がいい。かすりでもしたら命を落とすかもしれないぞ……？」

「……っ」

一瞬、頭の後ろをさつと冷たい風が撫でていったような寒気を覚えて半蔵は言葉を失う。

棒手裏剣は飛び道具だ。半蔵の間合いの外から放つことが可能な武器であり、飛んでくる全てを防ぎきれないこともある。

そして万が一にでもかすった場合、死ぬかもしれないと予告している。

（はったりだ。だが…）

腰を落としていた半蔵が刀を鞘に収めた。

「ちっ」

舌打ちだけ残して、半蔵はその場から立ち去った。

面白くなさそうに背中を丸めてあせ道をずんずん歩いて行く彼の後ろ姿を視界の端で見る。

(即死するような毒を塗つてあるわけないじゃないか)

棒手裏剣は肌に近い箇所には仕込んでおくこともできるものだ。間違つても皮膚から染み込んでしまうような危険な毒など塗布しない。せいぜい痺れ薬程度だろう。

半蔵は己より強い者には従うが、弱い者は見下す男だ。幼い時分からそうだった。

図体だけでかくなつて中身は変わらないな、と呆れて溜息をつくと、今度こそ梵爺の小屋へ向かう。

昼餉の時刻だったので寝起きをする水車小屋を覗いたが、人影は見当たらなかつた。また夢中になつて飯抜きで薬でも作つているのかと思ひ、今度は隣の薬小屋の戸を叩く。

「おお」

上の空な返事が返つてきたので遠慮なく戸を開けると、やはり薬の調査に夢中だったようだ。調査中の梵爺はこちらを見もしなかつた。梵爺は作業に没頭すると一息つくまで飯さえ忘れていたような男だった。ひどいときには夕影が声をかけても薬小屋から出てこないこともあった。

霧矢は相変わらずの年齢を感じさせない健在ぶりであつたし、半蔵も梵爺も夕影が知っている昔の彼らとどこも変わらない。

そう思つたところで、ふと何かが頭に引っかかった。

(霧矢様は、いったいおいくつなのだろう)

外見こそ三十そこそこといったところだ。昔でさえ若頭目と感じていた夕影だったが、無駄な肉のそげた頬も、黒々とした髪も、眼光鋭い瞳も、記憶にある昔の霧矢となんら変わりは見られない。

いくばくかの年月が経っているはずであるのに目に見えた変化がないということに、どこか薄気味悪さを覚えた。

(そうだ、昔から霧矢様は変わらぬままだ……)

今まで疑問に思わなかつたことが不思議だった。うすら寒さを感じて夕影は身震いすると、いまだに戸口に立っているのが夕影だと気づいていない梵爺に声をかけた。

「ただいま戻りました」

梵爺はようやくと顔を上げて夕影を見とめた。

「お、夕影か。久方ぶりだな……どうした、奇妙な顔をして」

言い淀んだ夕影は、ぼつりと声を落とす。

「梵爺、霧矢様はいつたいおいくなんでしょうか……俺が小さい頃から全くお変わりないあの姿、もしかして」

「夕影！！」

珍しく梵爺は声を荒げた。話の内容が薄気味悪さを含んでいたことだけに、夕影はひどく驚いて身をすくめた。梵爺は寝不足気味の充血した瞳で真っ直ぐに夕影を見つめた。

「それ以上は言うてはならん。詮索してもならん。あのお方は恐ろしいお方だ……逆らってもいかん。霧矢様は加賀の頭目、それ以外の何者でもない」

梵爺はひどく怯えた様子を見せた。見れば、震えた手をぐつと握り締めていた。手が震えるほど梵爺が恐怖する様を見たことがなかった夕影は、口にははいけないことを言ってしまったことに気付いた。

梵爺は一つ息を吐いてしばし肩を落とす。異様なほど恐怖している様子を見て、やはり霧矢は徒人ではないのかもしれないと頭の隅で思った。

しばらく沈黙していた梵爺だったが、すすすと鼻を鳴らして夕影の匂いを嗅いだ後、どこか関心した風情で不精髭の生えた顎を撫でた。

「夕影、おめえ……懸想しとるな？」

「はいっ？」

夕影は度肝を抜かれてまじろいだ。思わず声が裏返ってしまうほどに突然だった。

「なん、……」

「わかるさ。おめえの様子をちよいと見りゃあ、すぐわかる。梵爺はなんでもお見通しだ。ええ匂いぶんぶんさせとるしなあ」

どんな匂いだろうと思ひ、夕影は袂を鼻に近づけて着物の匂いを嗅いだ。しかし、いい匂いとやらがしているとは思えなかった。

梵爺は仕事柄、鼻が利いた。薬の中には臭いで嗅ぎ分けなければならぬものもある。よつて夕影も鼻はいい方だが、それでも梵爺には及ばない。

「お偉いさんから匂つてくるみてえな匂いがすらあ」

そこまで言われてようやく合点がいった。由良の香だ。どうやら由良が着物に焚きしめている気に入りの香の匂いが、常に側にいるからか移っているようである。

夕影自身は香に詳しくないが、由良が気に入っている香だけは知っていた。香りのきつい麝香と、その他に数種類の香を合わせたものだ。

（そうか、鼻が慣れてしまっているのか）

常に側にいれば、匂いに鼻が慣れてしまつていても不思議ではない。

さつき半蔵がいけすかない臭いと言つたのはこれだろうか。個人的には好きな匂いのだが、どうやら半蔵の鼻はお気に召さなかつたらしい……などと思当違いなことを考える。

「懸想をすると、いい匂いがするんですか」

これには梵爺も声を上げて笑つた。

「おめえらしい疑問だな。違つ違つ、別に懸想するといいい匂いがしてくるとかそういう意味じゃねえ。好きになつた女の匂いが移るつつか、女が側にいるようになる匂いが変わるんだよ。相手が香をつかつてりや余計にな。今のおめえも、好きな女が側にいるからその女の匂いが移つたんじゃねえのか？」

好きな女、と言われて夕影はドキツとした。

（違つ、由良様のことを好きなわけじゃない。必要だから側にいて、必要だから優しくしているだけだ）

梵爺は押し黙つてしまつた弟子を怪訝そつな顔で覗き込んだ。

「どつしたよ」

「好きで優しいのか、必要だから優しいふりをしているのか、わからないんです」

ぼつりとこぼした言葉に、梵爺は溜息をついて腕を組んだ。

「おいおい、そんなこともわからねえのか。うぶなんだか鈍いんだか……。」

体が自然と動いて、もつと優しくしてやりてえとか、無条件で喜ばせたいと思えばそりゃあ懸想しとるに違いねえ。まあ、おめえはもとも優しいいつちゃ優しいが、器用な方でもなし。好きでもねえおなごに親切まではしてやっても、それ以上はしてやらねえだろうな」

「そうでしょうか」

「そうさな。それよか、新しい薬でも試していくか？ 解毒も用意してあつからよ」

新しい薬と聞いて今度は別の意味で心臓が跳ねた。梵爺は「自分の体で薬を経験しねえと立派な毒飼いにはなれん」という考えの持ち主で、弟子入りしてからすぐに薬という薬を試させられた。

それは薬も毒も関係なく、特に毒薬は死なない程度に薄めてあつたが解毒剤なしに耐えきれるものではない。何度か死ぬ思いもしたが、そのお蔭で今や夕影はほとんどの毒に耐性ができていた。

が、新作となるといくら夕影でも身の危険を感じる。

「いいえ、結構です」

「なんじゃい」

つまらん奴だとぶつくさと文句を言う梵爺を置いて、夕影は逃げるように小屋を出た。

城に在るであろう夕風と交代する時刻まで森の中で過ごした。深い森の中はなぜかほっとする。由良の側仕えは嫌な仕事ではないが、やはり敵地に在るということで肩肘に力が入る。

たまの里帰りのついでに、いにしえの森の神々がひっそりとどこかに潜んでいるとも言われる緑の深い森に入ると、巨木が外界から己を守ってくれている気分がして落ち着いた。

夜が更けるまで待つて、夕影は夜陰に乗じて居城へ戻った。夜は

日の光りが無い分警備が厳しいが、何人が何時頃にどこを回るかという細かいところまでわかっていて。その、針ほどの細い隙をついて戻る方法が一番危険が少なく済んだ。

石造りの城壁を超え、植え込みに姿を隠す。と、そのときふと近くで人の気配がしたことで、咄嗟に夕影は構えた。

誰かに見とがめられたとあれば、なぜこんな夜更けに出歩いているのか不審に思われてしまう。相手が白波衆であればなおさら危険だ。

一瞬体を固くした夕影は、しかし、朔の夜の闇に佇む人影が知ったものだど気づいて警戒を解いた。

「……夕風？」

闇に紛れていたのは双子の兄、夕風だった。もうとっくに城を出ている時刻のはずだ。入れ違いで密偵を務めるように言われている上に、夕影と同じ顔をした人物がもう一人いるなどと露見しては非常にまずい。

危険を冒してまでなぜここで待っていたのか、夕影には理解できなかった。

怪訝そうな顔をした夕影に対して、夕風は険しい表情で詰め寄った。

「夕影、お前、必要以上に九龍姫にかまっているんじゃないだろうな」

「なに」

言わんとしていることの意味を理解し損ねて、夕影は眉をひそめた。

夕風は全く同じ表情を浮かべて、瓜二つの相手の顔を真っ直ぐに見た。月のない夜あたりは墨のような闇に包まれているというのに、漆黒の瞳がきらりと光った。

「九龍姫と馴れ合っているんじゃないかと聞いているんだ。確かになつかれた方が疑念は持たれづらいが、それは計算のうちか？」

口ごもり、すぐには返答しない夕影の様子から馴れ合いを是とみ

なしたのか、夕凧はたたみかけた。

「己に課せられた使命を忘れているんじゃないだろうな？霧矢様は馴れ合わせるために夕影を任命したわけじゃない。……霧矢様をがっかりさせるなよ」

最後に、背筋がふっと冷たくなるような視線を寄越し、夕凧はその場を去った。気配が城壁を乗り越え、遠のいてから、ようやくと夕影は振り返った。

闇に包まれた城壁には夕凧の気配すら残っていなかった。濃い陰の中に沈む城壁を見つめていると、早く戻れとでも言うように、生ぬるい風がさあつと吹いてきて夕影の背を押した。

### ほのかな恋心(3)

空が白み始めたころ、夕風は里に辿り着いた。山肌から降りてきた薄靄に包まれた里はわずかに朝日の橙色に染まって見えて、まるで陽炎のようであった。

里の朝は早いと言っても、まだこの時刻では誰も目を覚ましてはいないようだ。森のなかで軽く仮眠を取っていたおかげで夕風は眠気を感じていなかった。

(しかし、この時刻では霧矢様は目覚めておられないかもしれない) 里の中をゆつくりと歩いて行くと、霧矢の屋敷に近くなつたところで人の気配がした。こんな朝方から人の出入りがあるとは珍しい。霧矢は使用人を雇っておらず、里の女たちが順繰りで掃除をしに訪ねるぐらいであった。

戸口をくぐって声をかけると、意外なところから返事は返ってきた。

「こちらだ」

夕風は小ぢんまりとした庭へ足を向けると、木刀を手にした霧矢がひと汗流し終えたところであった。井戸の側でもろ肌脱いで行水をしていた霧矢はさつと袖を入れた。

「戻つたな夕風、御苦労だった。今、茶でも淹れよう」

「そのようなことはわたしがやります」

ぎよつとした夕風に霧矢は快活に笑った。

「良いのだ。いつもひと汗かいたあとに茶を飲むのは決まっています。なに、ちょうどそこへお前がやってきただけのこと。一人分でも二人分でも変わらぬ。先に上がって待っている」

霧矢は大股で厨へ入っていく。夕風は後を追つたが、追い払われってしまったので仕方なく言われたとおりに座敷へ上がって待っていた。

しばらくすると茶器を手にした霧矢がやってきて、夕風の前に香

ばしい香りの茶が出された。霧矢は座るなりぐいつと湯呑みをあおる。

「此度はどうであった」

「は。わたしが見る限り、九龍姫に変化は見られませんでした。ただ、夕影との関係については、憂慮するところがあります。任務だからではなく、私情で夕影が九龍姫に慣れすぎているような気がするのです」

うむ、と唸って霧矢は顎を撫でた。

夕影は甘いところがあるので、九龍姫に情が湧いて、いつか霧矢の妨げになる行為をしでかすかもしれない。

「わたしは夕影が、いつか霧矢様に背を向けるのではないかと心配です」

「まあそう案ずるな」

「ですが……やはりもっときつく言っておくべきでした」

夕凧は慣れ合っているんじゃないかと聞いたときの夕影の顔の思い出した。

(あの様子では、案じるなという方が無理な話だ)

「夕凧」

呼ばれて我に返ると、夕凧は視線を上げた。霧矢は円座の上に胡坐をかいて微動だにせずに、切れ長の隻眼でこちらを見ていた。

「誰がそのように命じた」

「は……」

「誰が危険を冒してまで夕影と接触し、言い聞かせよと命じたのかと聞いている」

静かな声だったが怒りを含んでいる声音と、夕凧に向けている漆黒の瞳の中に底知れぬ闇を見た。気を抜くと引きずり込まれて食われてしまいそんな危うさがある。

鳥肌が立って思わずひくりと息を詰めた。膝の上で握った拳が知らず震えた。怒鳴られたわけではないが霧矢の怒りが矢となって胸を貫いたので、息苦しさと同時に冷や汗が出る。

「白波に見つかればお前たち二人だけでなく、我ら加賀忍ら全てが危険にさらされるのだ」

「はっ、申し訳ございません!!」

夕凧は勢いよく座敷にひれ伏した。すると霧矢は短く息を吐き、良いと言った。

「夕凧のことだ、わたしを思ってたことだろう。だが、以後気を付ける」

「はい」

深々と頭を下げ、畳に額を押し付けた。

霧矢の屋敷を出ると、起き出した人々が朝餉の用意をしているのか、どこからともなく煮炊きの匂いが漂ってきた。

誰よりも尊敬する頭目である霧矢の怒りに触れたことでがっくりと肩を落とした夕凧は、雑念を振り払おうと首を振った。

（霧矢様に許していただけだ。それだけで十分じゃないか。確かに霧矢様を思ってたことだったが、いささか軽率だった）

命ぜられた仕事以外はしてはいけないのだと頭に叩き込む。己は霧矢の駒だ。うまく動いて、いつか霧矢の夢が叶えばそれでいい。そこに私情など入れる余地はない。

霧矢に必要としてもらえれば、己は何だってできる。百年に一人の神童よと言われて妬みや恨み、嫉妬も多く受けた。一度でも失敗をしようものなら、この程度のことでもできないのか、神童などと言われているが底が知れると真正面から言われた。失敗をして何が悪い、望んで忍びの才を持って生まれたわけではないと何度も思った。だが、今ならばはつきりとわかる。この才は、きつと霧矢のためにあるのだ。

（あの方の望みが叶うなら、俺はなんだってしよう）

決意も新たにきゅっと拳を握りしめた。

「よう、夕凧。暗い顔してんなあ」

背後からかかった声に夕凧は気だるげに振り返る。はは、と大口を開けて笑い飛ばしたのは半蔵だった。珍しく早起きだ。おおかた

母親に叩き起こされたのか、黒々とした髪は常にも増してぼさぼさだ。

夕凧はなにかと絡んでくる半蔵をやかましそうに斜に見やった。

「今日は早起きだな半蔵。槍が降るかもしれない」

「おおつ？失敬な。俺だつて早起きぐらいするぜ。なあ、それよかさ」

大股に、しかし足音もさせずに獲物を狙う肉食獣のように近寄ってきた半蔵は、斜に構える夕凧を視線で舐めまわした。

「昨日、夕影様に会ったぜ。神童の夕凧じゃなくて、なんであいつが九龍の間者選ばれたのか俺あわつかんねえな。絶対夕凧は選ばれると思っただけだなあ。天才でもどつか足りないところであつたか？いつもすましてるけど本当のとこどうだ。悔しくねえの？」

「いましがた霧矢に注意を受けた夕凧は常よりも敏感になっていた。普段なら聞き流すところを、つい正面から受け止めてしまふ。袖ぐりから苦無を抜き放つと横薙ぎに振り払った。

「やかましいぞ」

大柄な体格に似合わず軽々とよけた半蔵は、面白がってひゅうと口笛を吹いた。

「きつげんワル！なんだ、なにかあつたか？好きなおなごにでも振られたか！？」

「お前と一緒にするな」

吐き出すように言った。半蔵は昨今、火薬使いの忍びの娘の尻を熱心に追いかけていて、あまりのしつこさに文字通り火傷を負わされた、などという噂が流れていた。常におなごとの噂が絶えない半蔵だ。惚れた振られたという話はしょっちゅうである。

女の尻を追いかけているような情けない男と一緒にされたくない。体を沈めて急所めがけて切りかかると、目標物は視界から消えた。「まあまあ、そんな怒るな天才様！」

夕凧の背後を取った半蔵は、数歩離れたところで首をすくめた。「自分が落ちこぼれの影武者になっちまったからって気い落とすな

つて。じゃな」

言うことだけ言って姿をくらませてしまった半蔵を追いかける気には到底なれなかった。夕凧は苦無をおさめると舌打ちをした。

ああして半蔵はことあるごとに「神童は選ばれて当たり前」「選ばれないとおかしい」と皮肉って言うので、そのたびに心の奥深くにしまつてある感情を逆撫でした。

悔しくないはずがない。

なぜ飛び抜けて才華を持っているわけでもない夕影が選ばれて、なぜ免許皆伝を受けた己が選ばれなかったのか、聞けるものなら聞きたかった。ただ、尊敬する霧矢に聞けるはずもなく、また矜持が許さなかった。

霧矢は生来の気質と言った。夕影にあつて己にはないものだと言った。それが夕凧はなによりも悔しくてたまらなかった。

(夕影にあつて俺にないものなどあるのか)

あつたとしてもたいしたものではあるまい。

どうせなら忍びの才ではなく、そちらを持って生まれれば良かったとも思ったこともあるが、考えても詮無いことであつた。

(俺はこの才で霧矢様の手伝いができればそれでいい)

忍びの才などあつたとしても、誰かに必要とされなければ意味がない。

孤独を噛みしめながら、朝もやの晴れた里を家路に向かって歩み出した。

「由良様、郭に行つてみたいと思いませんか？」

そう夕影が問うたのは、霧矢に「本当に外へ行く気があるかどうか聞いてみる」と言われた翌日だった。

由良は、記憶もないほど幼い頃に城へ連れてこられてから一度も外へは出ていない。側仕えを始めてすぐに、郭とは一体どのようなものだろうかと聞かれたことがあるので、興味が全くないというこ

とはないはずだ。

だが、由良は顔を輝かせるどころか怪訝そうな顔をした。

「ゆう、やっぱり昨日から変よ。熱でもあるんじゃないかしら」

予想と反した返事が返ってきたことと、手が額に向かって伸びてきたことで夕影は首をすくめる。柔らかな指先が前髪をかき分ける感触がくすぐったくて目を閉じた。

「んん…、でも熱はないわね」

「熱なんかありませんよ」

「でも昨日から様子がおかしかったでしょう」

昨日というと一日夕凧と交代していた日だ。里の誰もが 母親  
でさえ 見分けることが難しい自分たちを、まさか見分けている  
とでもいうのかと一瞬疑惑の念が湧く。

しかし、どこか違う気がするといった程度で、はっきりと「ゆう  
ではない」と言っているわけではない。完全に見切っているわけ  
もないようだ。

もしかしたら、疑念を持たれたことで夕凧は釘をさして帰ったの  
かもしれない。

（俺が由良様に深入りしすぎているとでも言うのか）

ゆうべの夕凧の言葉を思い返していると、特に具合の悪いわけ  
もないことを確認した由良は彼から離れた。背を向けて座敷からこ  
ぢんまりした庭を見やる。

「いいのよ、気を使わないで。第一、お父様が許さないわ。わたし  
はきつと、ここから出してもらえないもの」

そうして肩を落とした由良を、どうして気に留めずにいられるだ  
ろう。

（この子を、もっと自由にしておあげられれば良かった）

九龍でもない、加賀忍でもない、敵だということも関係ない立場  
だったならどんなに良かったらう。そうしたら誰にも縛られずに  
その手を引っ張って、どこへだって連れて行ける。小さな庭から見  
える景色だけでなく、郭だって他の国だって、なんでも見せてあげ

ることができる。

だが、そう思っても自由になれるはずもなく、むなしくなるだけだった。

(もつと、自由だったなら…)

そこまで考え、ふと懸想しているだろうと指摘した梵爺の言葉を思い出してまたいた。

彼女が哀れだから気にとめているわけではない。彼女も自分も徒人であったなら、ただの町娘と、ただの男であったならどんなに自由だっただろう。

どこか遠くへ連れて行ってあげたいと、喜ばせてあげたいと思っている自分に気がついた。

笑顔で心が柔らかくなるのも、寂しげな横顔に思わず抱きしめなくなるのも、腕が勝手に動いて抱き締めたことも、梵爺が言ったとおりだったとしたら得心がいく。

由良のことが好きなのだ。

(でも、どうしようもない)

気付いたところで何かが変わるわけではない。彼女は九龍姫で自分には忍びだ。

華奢な肩を丸ごと抱き寄せたくなる気持ちを、硬く閉じたこぶしの中で握りつぶした。

## すれ違い(1)

花のつぼみが膨らむように、由良は美しい娘に育った。幼さを残してはいるが、白く抜けるような肌や艶やかな黒髪は、どの深窓の佳人と比べても引けを取らないだろう。

文机に向かって歌を写している由良の隣に控えていた夕凧は、その後ろ姿をじっと見つめた。弟の夕影は里に報告に戻っており、今日一日は夕凧が弟のふりを務める日であった。

由良が背を向けているのをいいことに、夕凧は剣呑に顔をしかめた。

夕凧が憂慮しているのは、この九龍姫と夕影の関係が思ったよりも親密なことについてだった。確かに強敵である？峨郷国主・安斎康持から至宝の九龍姫を奪うとなると、姫に取り入っていたほうが成功の確率は上がる。

(だが、夕影は甘すぎるのではないだろうか)

優しくすればただけ信頼は得られる。だがしかし、忍びとて人の子。情が芽生えないという保証はない。

夕影は甘い。甘いがゆえに過ちを犯しても不思議ではない。

(夕影は加賀忍としての自覚が足りない)

我らはただ霧矢様のために動き、霧矢様のために命をかけるのだ。その覚悟が夕影には足りぬ、と夕凧は苦い顔つきをした。

「ゆっ」

そのとき由良が文机に向いたまま側仕えの少年を呼んだ。人を油断させるという弟に少しでも近づくよう、常よりも表情を和らげて夕凧は答えた。

「いかがいたしました」

「ずっとついていなくともいいのよ。わたしも少しは一人になりたいわ。用があつたら呼ぶから」

「しかし」

小さな異変でも頭目に報告しなければならぬ夕凧としては、側で監視していたところである。言い淀んだ夕凧に、由良は嫌気がさしたとでも言うように溜息をこぼした。

「いいから、出て行ってちょうだい」

そのきつい言葉に、夕凧は「承知いたしました」と答えて下がる。静かにふすまを閉めたその先で、夕凧は目を細めて思案した。

（なつについて見えたのは気のせいだったか…？）

以前よりは距離を置いているように見える由良にいくらか疑問を持ちながらも、夕凧は衣擦れの音だけ残してその場を立ち去った。

一方、夕凧を追い出し、座敷に一人になった由良はほっと息をつく。額に滲んだ汗は夏の暑さからだけでは無い。

筆を置いて文机に肘をつき、じっとりとした額に手を当てる。

（監視されているようで、気が気じゃないわ）

「ゆう」とそっくりの顔をしているが、彼は「ゆう」ではない。

そのことに気付いたのは数年前だった。今まで何度か指折り数えるほどだが、違和感を覚えたことはある。しかし翌日になれば違和感は嘘のように消え失せるので、たまたま熱でもあったか、機嫌が悪かったのかと思っていた。

だが、最近でははっきりと彼はゆうではないと確信していた。

時折ふと見せる表情やしぐさが、ゆうと彼とでは明らかに違う。

ゆうはとかく自分に優しいので、たとえばゆうが真綿のようであるとすれば、彼はまるで千年氷が研がれた刃だ。

半ば強引に追い出してしまつて悪いとは思つたが、触れれば切れてしまいそうなあの鋭い視線で見られていると落ち着かないのだ。

（なぜおんなじ顔をしているのかしら）

筆を取り、広げてあつた紙に何気なく双子、と書いた。可能性としてはそれが一番高いだろう。

だが、確かゆうは土豪の酋長の三男坊か四男坊で、側仕えとは名ばかりの人質としてここへ連れてこられたのだと女中が噂していたはずだ。

仮に双子だったとして、なぜわざわざ人の目を盗むようにして一人ずつ側仕えとして置いておくのか、由良にはそこまではわからなかった。

一度筆を硯に戻し、墨をたっぷり吸わせると、双子という文字の上にはたばたと垂らして汚す。失敗したことにして紙を丸めた。

(ゆうは、どこへ行っているのかしら)

彼を想うと、胸のあたりがほんのりと温かくなって、不思議な気持ちになる。寂しさから空いた心の隙間を柔らかく埋めてくれる。満たされているのに、どこか泣きそうなくらい切ない。

(なぜかしら。こんな気持ち初めて)

胸に手を当てて、開け放たれた障子から外に目をやった。眩しいほどの夏の日差しがさんさんと照りつけて、茂った緑の葉は全身で光りを受けて輝いていた。

腰を上げると座敷の入口に立って障子にもたれる。日陰では風が通り抜けていくらか涼しかった。木々が作り出す影が強い日差しで濃く黒々としており、蚊取り線香の匂いがどこからか漂ってくるなかで、ぼんやりと庭を眺めた。

(側にいてくれるだけでいい)

ゆうさえ側にいてくれれば、他にはなにも望まない。

由良は、たくさんの人に囲まれているのに一人きりだという感覚が、昔から拭えなかった。

それは父親の愛情欲しさから生まれる寂しさでもあったし、周囲の誰からも愛されていない寂しさからでもあった。

父親は由良の座敷には滅多に姿を見せず、また由良も座敷から出てはいけなさと女中頭にきつく言われていたため、父親に会いにくいことはできなかった。なにより自分に気持ちを割いてくれないのではないかと思うと泣き出しそうなほど悲しかった。

幼い頃は寂しさのあまり側に控えていた女中に甘えていたこともあったが、成長した今ではそれもはばかられた。

物心ついて、奇妙で恐ろしい力を持つていることに気付いた。そ

してそんな自分を女中たちが怖がり、かわりを持ちたくないと避けられていることも感じ取っていた。

そんな中、いつも側にいてくれたのはゆうだけだった。

彼はお日様の温かい光に包まれているような気持ちにしてくれる。側にいてくれるだけでほっとして、自分なんて誰にも愛されなくていいのではないのではないだろうか、そんな風に軋んでいく心をほぐしてくれる。

奇妙な力を持つ己を拒絶しないで受け入れてくれている。

たったそれだけで、由良は救われた気持ちになるのだった。

（他の誰にも愛されなくてもいい。ゆうが変わらずに側にいてくれれば……触れ合えなくともいい、撫でてくれなくてもいいから）  
ただ、と顔を曇らせた。いまだはつきりしない不穏さが、陰る日の光のようにじわじわと背後から迫ってきている気がしていた。なぜゆうは時折入れ替わるのかという謎も解けないままで。

由良は涼風が髪を撫でてさらっていくのを手で押さえ、うつむいた。

今はまだ聞くまい。真実を知ってしまったと、なぜかゆうが己の側からいなくなってしまうような気がした。

一人きりになると考えただけでも、心が壊れてしまいそうなほど怖かった。

ふっと息をついて開け放たれた障子から空を見上げると、早く明日にならないだろうかと願った。

巨木に光りを遮られた薄暗い山野を歩いていた夕影は、ふと足を止めた。少しばかり先に行ったところが、まるでキラキラと光る粉でもまぶしているかのように天上から光りの帯ができていたからだ。数千年と昔からあるこの森は、獣道すら見当たらず、大人が三人手を繋いでもまだ足りないほどの太さの幹を持つ木々が多かった。高さも、見上げて先が見えないほどあるので、昼でも森の中までは日

の光が届かない。

木々の足下には日陰でもたくましく生きる苔やシダが地面を覆っていた。

光りが射すなんて珍しいこともあるものだと思い、夕影は緑の苔やシダが覆っている地面を滑らないように慎重に歩く。

淡く光射す場所は広くくぼんでおり、膝の高さほどの青々とした草まで生えていた。森の中では芽を出すこともない夏草が、日の光を浴び、小さな花をつけて目一杯に背を伸ばしている。

傾斜を降りた夕影は、ひらけた場所にたたずむ一本のむくげの木を見つけた。筭を逆さにしたような広がりを見せるむくげは、周りに成長を邪魔する木々がないからか立派な枝ぶりをしている。

桃色の大輪をいくつも咲かせているむくげを見上げ、夕影は目を細めた。

「すごいな。由良様が喜びそうだ」

外へ自由に出ることがかなわない由良は、夕影がいずこからか持つてくる花を楽しみにしていた。喜ぶ顔見たさに、夕影はいっとう綺麗な花をわけてもらおうと、木の周りをゆっくり一周した。

目星をつけた枝に手を伸ばすと、苦無で切り込みを入れて手折った。爪先立って二本目にも手を伸ばし、手折ったが、無茶な体勢で枝の中に身をねじ込ませたためか、着物の袖が枝に引っかかった。

あっと思ったがもう遅く、袖を破いた小枝がピンと音を立てて弾かれ、しなっていた。

「ああ…」

溜息に似た声を上げて、夕影は袖を見下ろした。幸いにも布地を痛めたわけではなく、糸が切れただけのようだ。このままでも問題はないがみすぼらしいことこの上ない。繕ってくれる親しいおなごもいるわけでなし、夕影は肩を落とした。

「仕様がな、か」

中央にいくにしたがって色が赤く濃くなっている花卉を見てちらつと微笑んだ。

花を手にした由良が微笑む姿が目には浮かんだ。成長し、ますます美しくなった彼女こそ可憐な花のようだった。微笑む顔を見るだけで、敵地に潜入しているのだということも忘れられた。

温かな気持ち胸に浮かんだ夕影だったが、一拍置いて急激に沈んでいくのも感じ取っていた。

（由良様は、いつか霧矢様の妻となる。俺ではない人に娶られる）  
どんなに恋焦がれても、自分が彼女を手に入れることはまずないだろう。たとえば今回の任務が成功し、由良を安斎から奪い去り、連れ出して霧矢にめあわせる。しかし由良が己の妻になるわけではない。

逆に任務が万が一でも失敗した場合、それは死を意味する。由良は予定通りに安斎に娶られ、加賀忍らは白波衆に皆殺しにされるだろう。

生きて別の男に嫁いだ由良の側にいるか、死して側を離れるか。

どちらにせよ夕影にとつては酷なことであった。

（いつか必ず離れてしまうのに、こんなので辛すぎる）

好きにならなければよかったのに、と思いながら柔らかい日差しをそそぐ斜面を登りきった。蔓草の這う太い幹に手をつくすと、再び日の光の遮られた薄闇になり、さらに気持ち沈んだ。

一度、名残惜しそうにむくげのくぼみを振り返った夕影は、前を向くとむくげの枝を邪魔にならないように体の後ろ側の帯に差し込んだ。

しばらく歩くと、ほんの十歩ほど先の木の根元に白い塊が生えているのが目に入った。巨木の根は夕影の腰の高さあたりから大きく膨らみ、地面に根を張っている。洞のようにくぼんでいる中にちらと白いものがのぞいていた。

きのこにしては大きすぎた。

不思議に思い、苔むす地面をそつと踏み締めて近づいた。

足音を拾ったらしい白いものが身動きをして顔を上げたことで、夕影と視線が合った。

(山犬だ)

白いふわふわの毛に包まれた山犬の子供は、警戒して唸るまではいかないにしても背中の中を逆立てた。

夕影はこれ以上刺激しないようにあと一步というところで足を止めてしゃがむと、優しい声でささやいた。

「どうした、何もしやしないよ」

夕影が話しかけると大抵の動物たちは言うことを聞いた。夕影には彼らの言葉はわからないが、不思議と彼らは人間の言葉がわかっているのかもしれないと夕影は思っている。

山犬の子供は黒い瞳を真っ直ぐに向けて夕影を見ていたが、敵ではないと判断したのかクンクンと小さく鳴き始めた。甘える声を出し始めたことで夕影は近寄って様子を見る。

「おまえ、怪我をしているのか」

他の山犬にやられたか、不意の事故で怪我をしたのか、前足の真っ白な毛が血で赤黒く汚れていた。しかし、傷が深いわけでもない。黒々とした瞳は気を失ってはおらず、滋養のあるものを食べさせてやれば十分に治るであろうことがわかる。

夕影は袂から小袋を取り出し、傷に塗布すると良い黄檗おうはくを選ぶ。

キハダの樹皮は苦味があるが、硬い外皮を取り除いた黄色い部分は健胃剤やちよつとした外傷にも用いられる。

乾燥させた黄檗はすぐに使用できるように小分けにし、なめした竹の皮に包んであった。手のひらに乗るほどの小さな包みを開き、黄色い粉を指先に取る。

「嫌かもしれないけど辛抱するんだよ」

怪我をした前足をすくって、傷口にそつと黄檗を塗った。手当をしているあいだ、山犬は耳をそっくり返らせて怖い顔をしていたが、舐めないように布を巻き終えると再び甘え声を出した。

このまま放っておくわけにもいかず、夕影は山犬を抱き上げる。

「親はいないのか？仕様がな、ひとりじゃどうにもできないものな。しばらく面倒を見てやるから安心しろ」

山犬は安心して夕影の指を温かい舌でぺろぺろと舐めた。甘える山犬を目を細めて見やり、親が近くにどうか見回すが、茶色の毛並みが見えるわけもなく、やはり何者の気配も感じられなかった。

（捨てられたのか？）

毛色が普通の山犬と異なることから、親が見捨てたという可能性も大いにある。山犬というのは多くが茶色か灰色の毛色をしており、霜のように真っ白な毛色は非常に珍しい。

白い毛並みが逆に美しいが、それだけ目立つため自然の中では生き残るのが難しい。親に捨てられたと思うと、わけもなく己の境遇と重ね合わせてしまつて情が移つた。夕影は両親に捨てられたわけではなかったが、見限られていたことは確かだった。

こんな小さな体でかわいそうに、と額を撫でてやると、白い山犬は気持ち良さそうに目を細めた。

（おたつさんに言つて、鶏卵とはいかなくとも、どうにか滋養のあるものを食べさせてやらないと）

同じ加賀忍で厨に入っているおたつを思い浮かべながら夕影は歩き始めた。

山の中は夏とは思えないほどひんやりと湿気を含んだ空気が満ちていた。蝉の鳴き声すらも聞こえない音の沈んだ森に、吸い込まれるようにして夕影は姿を消した。

## すれ違い(2)

食べ物を調達するといつても城へ戻ったのは夜半よわだったので、当然厨には人っ子一人いない。日が昇るまで待つしかなかったが、かといって家人たちが床を取っている広い座敷に獣を連れ込むことはばかられ、夕影は廊下で立ち止まった。

(さてどうしたものか)

思案していると、大人しく抱かれていた山犬が廊下の先に鼻を向けて、耳をそばだてた。獣は人より耳が良い。

(見回りか)

夕影の知りうる限りではこの時刻に見回りはいないはずだった。慌てることもなく猫のように音も立てずに近くの空き座敷へ体を滑り込ませた。しばらくすると何者かが廊下をすするとかすかな衣擦れの音を立ててやってきた。

朔の夜であったので障子に映る影が薄い。

体を硬くして人影が通り過ぎるのを待ったが、人影は夕影が身を潜めている座敷の前で立ち止まった。

(白波か)

背筋にひやりと氷を押しつけられたかのように寒気が走る。障子に映った薄い影を確認するが、背丈からしてそう大きくはない。自分よりは年若いだろう。身軽さでは子供に負けるが、力であれば負けはない。

胸に押しつけられた山犬の鼓動が着物越しに伝わってきた。どくどくと早足で打つ鼓動が、もはや山犬のものなのか自分のものなのかわからない。

袴の裾に手を滑り込ませて、仕込んであった苦無をすりと抜き放つ。指先で回して逆手に持ったが、ふと嗅ぎなれた麝香の香りが鼻先をくすぐった。

(まさか由良様?)

よくよく見ようとしたときには、人影はもと来た廊下を戻って行ってしまった。気配が完全に遠のいてから夕影はそつと座敷から出て、由良らしき人物が消えていった方向を見やる。

由良だったとして、こんな夜半に一体どうしたというのか。

なにかあつたのだろうかと無性に心配になり、夕影は人影を追いかけた。由良の寝所は外廊下の角を曲がったずつと先にあつた。もし由良でなかった場合、姿を見止められてしまつてはまずいことになるが、由良のことで頭がいっぱいの夕影にはそれ以上は考えられなかつた。

角を曲がると、すぐ真正面に由良の姿があつた。

夜着姿で立ち尽くしていた彼女は、人の気配で振り返つて夕影の姿を見止めた。灯りのささない仄暗い中で、夕影は由良に駆け寄る。

「由良様、こんな夜半に一体どうされたのですか」

駆け寄つてきた夕影を覗き込んでしばらく探るような顔つきをしていた由良は、次の瞬間にはなぜかほつと安堵した。

「ゆうっ？」

「はい」

小首をかしげた彼女に呼ばれたため律儀に答えると、由良はくすぐつたそうに笑つた。

「うっん、なんでもない。わたしは眠れなかつただけ。ゆうこそ、

この子はなあに？一体どこから連れてきたの？」

「え、あ……」

今更ながら己の行動が軽率だつたことに内心で反省した。そのせいでこつそり面倒をみるつもりであつた山犬が早々に見つつかつてしまい、戸惑つて夕影は山犬を見下ろした。

「たまたま迷い込んでいたところを見つけたところですよ」

「白くてかわいいわ。ねえ、わたしも抱っこしたい」

手を伸ばしてきた由良から取り上げるようにしてひょいと山犬を引き離した。

「噛まれたら大変なことになります」

「あら、じゃあどうしてゆうは抱っこできるの？ゆうが平気ならわたしたって平気よ。お利口そうな顔をしているわ。噛んだりなんかしないわよ、ねえ？」

「それはわかりません」

渋い顔をした夕影に由良は唇を尖らせた。

「そうね、やってみなければわからないわ」

一歩前へ出て距離を詰めると、山犬を抱いている夕影の腕の隙間に手を滑り込ませた。白い小さな体をすくって胸に抱く。山犬は大人しくしていたが由良の匂いをしきりに嗅いだ。

「ほら、大人しくしているわ。いい子ね」

うふふと笑うと鼻先を近づけてきた山犬に頬ずりした。

「この子、わたしが預かるわ。いいでしょ？」

「え……」

「ゆうのことだから、拾ったもののどこへ連れて行こうか迷っていたんでしよう。外へ置いておくのも心配だし、かといってゆうの寝所には連れて行けないものね。わたしは一人で寝ているから誰にも迷惑かけないわ。だから、ね」

行動を読まれていたことで呆気に取られ、最後は由良に押し切られた。

由良は山犬を抱きながら夕影を見上げると、おやすみなさいと言いつつ寝所へ戻った。静かに障子を閉めた由良は座布団の上に山犬をそつと下ろす。

ふと、前足に丁寧に巻かれた布が目に入った。

「怪我をしていたのね」

夕影が見るに見かねて拾ってくる様子が目に浮かんで、由良はくすつと笑った。

「今日はここで寝なさい」

言い置いて自分も布団に潜り込んだが、跳ねるようにやってきた山犬は白い体を由良の布団に潜り込ませた。由良は何度かまたいたが、苦笑いを浮かべるとびったりと体を寄せて甘え声を出す山犬

を抱き寄せた。

「おまえ、あつたかいね」

子犬独特の柔らかな毛を撫でながらひとりごち、ほっと安堵の息をついた。

(ゆうも、元のゆうだった)

もしかしたらゆうは帰ってこないかもしれないと思うと不安で眠れず、今の今まで起きていたのだった。顔を見たことでようやく安心すると、徐々に眠気が由良の意識を支配し始めた。

どこへ行っていたのかしらと思うまもなく、意識は闇に落ちた。

一方、一人残された夕影は何かあつたらどうしようかと思つたが、いまさら山犬を取り上げるわけにもいかなかった。ゆっくりと踵を返すと帯に差していたむくげが揺れた。軽く引つ張られたような感覚で帯に差していたことを思い出した。

「ああ、忘れていた」

明日渡そう、とむくげを抜いて手に持ち、夕影は座敷へ向かった。

小丸と名付けられた山犬はその愛らしさからあつというまに女中の人気を集めた。

女中頭のお初は最初こそ渋い顔をしていたが、まだ小さいうちは座敷に上げていいという許可を出した。座敷で面倒を見るといつこで、夕影が体を綺麗に洗ってやると、その白い毛はまるで綿毛のようにふわふわになった。

ころころと転がったり弾んだりする毬のような動きを見せる小丸が新鮮なのか、由良は日がな一日飽きもせず小丸を側においた。小丸の世話の一切を引き受けていた夕影の手伝いもするほどだった。夕影が持ち帰ったむくげの花を喜んで水盆に生けていた由良は、小丸が夕影の袖にじゃれついて遊んでいることで袖のほつれに気がついた。

「ゆう、どこかで引っかけたの？貸してみて。繕ってあげるわ」

「え」

「なあに、その顔。わたしだって縫物ぐらいできるわ！ほら、こちらだけ袖を抜いて」

「どんなにか抜けた顔をしていたのか、心外だとも言いそうな勢いで由良は無理矢理に袖を引張った。

「針と糸を持ってきてちょうだい」

女中に裁縫道具を持ってきてもらった由良は、片袖だけ腕を抜いた夕影の側へ座った。

「小丸はあっちへ行っておいで。針があるから危ないわ」

部屋を下がるうとした女中が一度連れ出したが、それでも小丸は座敷へ戻ってきてしまった。どこかへ行く様子を見せなかったので興味深げにちよろちよろとうろつく小丸を夕影に任せた。夕影は獣を馴らすのが得意で、小丸も彼といるときは言うことを良く聞いた。「不思議ね。ゆうの言うことは良く聞くのよ。いつもはあんなにやんちゃなのにね」

小丸を膝の上に乗せてじゃらしていた夕影は、照れ臭い表情を隠そうとして唇を引き結んだので、半ば拗ねた顔つきになった。

「そうでしょうか」

肩越しに見えたその横顔が初めて見たものだったので、由良は嬉しいようなくすぐったいような気持ちになってうふふと笑った。漏れ聞こえてきた笑い声に夕影は一層拗ねた顔つきになる。

「わたしは、なにかおかしいことでも申し上げましたか？」

「ううん、なんでもない」

年上の男性にかわいらしく見えたなどと言えようはずもない。今まで知らなかった夕影の一面を垣間見て嬉しくなった由良だったが、針から気がそれていたために指を刺してしまった。

「いたっ!？」

短く上がった悲鳴にぎよっとして振り向いた夕影は慌てて手を差し出した。

「だ、大丈夫ですか?……やっぱり自分でやります」

「いやよ！もう、なんでもないから前を向いて！」

そう言って針を手放さなかったので、渋々由良に任せ、夕影だったが、その後も何度か振り返るはめになった。縫物ぐらいできると胸を張って言っていた割には指を刺す回数が多い気がする。

なにより綺麗な手に傷が増えることを心配して、夕影は振り返るたびに自分でやりますと言った。が、仕舞いには、

「そんなにわたしにやって欲しくないの？！」

と泣きそうな声で言われてしまったので、夕影は引き下がるしかなくなってしまった。

「……由良様、意固地です」

ぼつりと呟くと、由良の動きが止まった。気が配がした。振り返ってみれば針を止めてしまった由良はしゅんとうなだれている。何気なく口をついて出たひとことだったが、由良はぐつと唇を噛みしめた。「ゆうが迷惑だっというのなら、わたしもうやらない」

夕影にしてみればなんてことはない言葉だったのだ。由良が針を離さないのは、てっきり言い出した手前引っ込みがつかなくなっているからだと思っていた。

だから、うつむいてしまった由良がなぜこんなにも落ち込んだのかわからなかった。

戸惑い焦った夕影は、体ごと振り返った。

「え、いや、迷惑だなんて……そんなこと」

うつむいた由良がぐすつと鼻をすすったことで、泣かせてしまったことに気がついた。

どうしようと思う間もなく、不意に体が動いた。

伸ばした手で髪を撫でた。己のものよりも細い髪は、まるで柔らかい絹のような手触りだった。

驚いて顔を上げた由良の頬を指でなぞると、目が合った気まずさとくすぐったさで由良はまぶたを閉じた。きゅつと桃色の唇を引き締めると、肩にも力が入って華奢な体を縮める。

まろい頬に触れた瞬間、痺れるような愛しさが指先から体にまで

走ったが、恥じらって縮こまる様子を見て愛しさはさらに増した。

頭ではいけないと思っっているのに、体が言うことを聞かない。止めようと思っても止められない。湧き上がってくる感情はまるで毒薬みたいだ。

思わずもう一方の手も伸ばし、頬にあてがってふつくらとした唇を親指でなぞったが、由良がビクリとひどくすくんだことで夢から覚めた。

「すみません」

慌てて離れると、由良はそつと目を開けた。水盆に生けてあるむくげの花のように頬を赤らめた由良は、うるんだ視線をしばらく泳がせてからようやく夕影を上目づかいに見た。

「他の人だったら、わたしこんなことしてあげないわ」

そうして熱っぽい瞳を伏せると、針を袖とを持ち直した。

暗に特別と言われているようで、無意識に取ってしまった行動に増して夕影は気恥ずかしくなり、もぞもぞと由良に背を向けて居住まいを正した。

（こんな様ではいけない。俺は安斎の敵で、由良様を奪おうとしている忍びだ。由良様はいつか霧矢様の奥方となる方で、好きになつてはいけない人だ）

お互いしばらく無言でいるうちに、夕影は己に言い聞かせた。それでもして何か別のことを考えないと、由良への気持ち溢れて気が狂ってしまいそうだった。

途中でどこかへ行っていた小丸の相手をし、気持ち落ち着いてきたところでようやく由良が繕い終えた。繕った部分の出来を確認している由良を肩越しに見る。

「ほら、ちゃんと出来たわ。ちょっと見た目は悪いけれど許してくれる？」

目の前にかざされた袖を夕影自身も確認する。お針子に比べるとだいぶ目が粗いが、毎日針を持っている人と比べては酷というものだろう。少々時間はかかったものの十分に丁寧だった。

「ありがとうございます。あのままではどうもみすばらしくて困っていたところです。助かりました」

片袖に肌を入れながら微笑んだ夕影に由良も控えめに笑った。が、ふと視線を落としたことでおやとまたたく。また機嫌を損ねることを言ってしまうただらうかと考えたが、次に顔を上げた由良と目が合った。

あっと思うが、下がる間もなく由良は背中に体を押し付けてきた。背中から抱き締められた恰好になった夕影は、今まで大人しかった心臓が突然暴れ馬のように打ち始めたのを感じた。

(由良様に聞こえてしまう)

おさまれ、と念じるがそうそう大人しくなるものではない。とても恥ずかしいものを聞かれてしまっている気がして、余計に心臓は激しく打った。

「……心の臓がとても速いわ」

背後からささやき声で指摘されて思わずひくつと息が止まった。押し付けられた小さな体はひどく柔らかくて、胸に回っている腕も簡単に折れてしまいそうだった。意識してしまうと振り返って抱き締めたい衝動に駆られるので、耳の奥にまで響く心臓の鼓動に集中した。

由良は広い背中に顔を押し付けると、目一杯息を吸った。

夕影の背中からはお日様の匂いがした。

温かくて、いつだって自分を包んでくれる優しい匂いだ。

(触れ合えなくてもいいなんて、嘘……)

こんなにも愛しくて、触れ合いたくて、求めている。

愛しさが溢れて止まらない。

少年だったあの頃よりも広くなった背中に頬をすりよせた。いくら由良が年を重ねようと年の差が縮まることはない。出会ったときから年上の彼を、いつかは本当の兄なら良かったと思ったこともあった。

(うっん、違う。お兄様でなくて良かった。今ならそう思う)

兄でもなく、側仕えでもなく、ゆうでいてほしい。  
ゆうに側にいてほしい。

「由良様」

呼ばれたことと、抱き締める手をやんわりと引きはがされたことで由良ははたと我に返った。振り返った夕影は、どこか苦しそうな顔をしていた。

「おやめください」

口を引き結んで、何かを我慢しているような苦しそうな表情だったことで由良は悲しくなった。掴まれている手を引つ込めたくなくつたけれど、あんなに恋焦がれて熱を帯びていたのが嘘のようにふつと冷めてしまったこととおずおずと引つ込める。

心が触れ合えるところまで縮まった距離は、唐突にすれ違った。

急に、二人の間に？峨郷のそこかしこに点在する深い谷底のような隔たりが生じた気がした。衣の乱れを直した夕影は、ややあつて肩越しに見たまま低い声で言った。

「女人に抱きつかれて嬉しくない男はおりません。仮にも由良様は？峨郷国主の姫君、ご自分のお立場をご理解ください。万が一にも間違いがあつては困ります」

「まちがい…？」

「大殿にお叱りを受けるのはわたしです」

茫然としていると、夕影は振り切るように立ち上がって座敷を後にした。小丸がころころと跳ねながら後を追ったが、白い体がふすまの隙間を通り抜ける前にぴしりとふすまは閉められた。

心を閉ざされてしまったようで愕然とした。

（間違いなんて）

困らせるつもりではなかった。ただ愛しさが込み上げて止められなくて、求めてしまっただけだ。

それとも、ゆうを求めたことが間違いだったのだろうか。お父様ならば応えてくれただろうか。否、お父様はきつと応えてくれまいでは、自分は一体誰にぬくもりを求めればいいのか。

いつか顔も知らない殿方に嫁ぐという意識が急に心に湧き上がった。

(でも、わたしの旦那様となる方はまだ決まっていない)

生涯を共にする殿方にぬくもりを求めようにも、目の前に存在していないのならばどうしようもない。

悲しげな声で鳴く小丸の後ろ姿がなぜか自分と重なった。

### すれ違い(3)

小丸は厨女たちの心も掴み、大殿や姫君しか食せない鶏卵や肉なども与えられた。そのおかげか前足の怪我は目を見張るほどの早さで治り、食べ盛りで育ち盛りだった小丸は日に日に大きくなった。

もともと骨格のしつかりしていたこともあり、まだ大人とまではいかないながらもたくましい体つきになり、精悍な顔立ちになりつつあった。由良の細腕で抱きあげることはいささか難しくなり、小丸はとうとう庭に放すことになった。

「でも、どこかへ行ってしまつたらどうするの？」

女中頭のお初に噛みつく勢いで由良は声を荒げた。

「しかし、山犬ですからさらに大きくなりましょう。これ以上は座敷に上げて飼えませぬ」

お初の言うことは道理であつた。もともと犬は外で飼うものであるし、山犬といえれば町で見かける犬よりも大型だ。これからさらに成長することを考えると、これ以上は小丸を座敷に上げておくことはできなかつた。

しかし、こんな大きな山犬が座敷や廊下を好き勝手にうろつくと仕事に支障が出る、というのがお初の本音のようだ。

由良は不機嫌そうにむつと唇を尖らせた。夕影は、我関せずという風情で側に寝そべっている小丸を撫でながら言つた。

「由良様、小丸はよくなつております。どこかへ行ってしまつてという心配はあまりせずとも良いのでは」

「そうかしら」

不服そうな由良だったが、その後はお初に押し切られて小丸は庭へ出されることになった。夕影に拾われてから久方ぶりに地面に足をつけた小丸は、最初は様子をうかがってしきりに匂いを嗅いでいたものの、しばらくすると嬉しそうに跳ね回つた。

その様子を見たお梅が笑つた。

「姫様、やっぱり動物は外で生き生きとしていた方がいいというものですわ。見てください、あの嬉しそうな顔」

目をキラキラと輝かせて走り回り、たまに立ち止まって空の匂いを嗅いだり、今年初めてのトンボを追いかけてまわしたりと小丸は大忙しだった。

仕舞いには庭の土を掘り始めたので、さすがに夕影が止めに入っただ。一番になついている夕影がやってきたことで遊んでもらえるのだと勘違いをした小丸は彼に飛びついた。

微笑ましい様子に、小丸を外へ出すことは正解だったと納得してお初やお梅は下がったが、由良はしばらく夕影と小丸を見つめていた。

庭にさえ出ることを許されない由良は、じゃれてきた小丸に対して仕方ないといった様子ながらも嬉しそうな夕影を縁側から見守った。

じゃれて尻尾を振れば撫でてもらえる小丸がうらやましかった。

あのと時 由良の気持ちを振り払った夕影が出て行ってしまったあと、戻ってきた彼は一定の距離を取るようになった。つかず離れず、必要以上に近づかない。

由良は元通りになれないことが悲しくて仕方がなかった。ただの一度だけ抱き締めただけでぎくしゃくしてしまう関係を思うと、胸を締め付けられるようだった。

(ゆうにとつて……わたしは一体なんなのかしら)

彼に拒絶されたら、もう自分の存在意義を見いだせない。谷底に突き落とされるような思いでいると、唐突に名前を呼ばれた。

「由良様！」

「え……？」

顔を上げると、目前に小丸の鼻面があった。跳躍した小丸は縁側に座っていた由良に跳びかかり、前足で押し倒すとのしつとのしかかる。はふはふと獣の息遣いが近くに聞こえ、熱い息が顔にかかる。

「由良様?!」

血相を変えて駆け寄ってきた夕影は、まず小丸を抱き上げて地面に下ろすと、驚きと衝撃で目を回している由良を覗き込んだ。

「由良様！ご無事ですか?!」

「んん……」

縁側に上がった夕影は目を閉じて苦しげに眉根を寄せた由良を抱き起こした。

「由良様、お気を確かに。……小丸、はしゃぎすぎだ!」

叱咤され、ちぎれんばかりに尻尾を振っていた小丸は急に縮こまった。背中を打ちつけたことで起きためまいがようやくとおさまってきた由良は、吐息交じりの声で夕影を制する。

「……いいのよ、小丸を叱らないで。なにも非はないもの。かわいそうだわ。わたしは大丈夫だから」

「ですが」

「いいのよ。ほら、小丸。怒っていないからこちらへおいで」

夕影に体を預けたまま手を差し出すと、小丸はつぶらな瞳で由良と夕影とを交互に見やり、そっと近づいて由良の手を舐めた。

「そう、いい子ね。ちょっとはしゃぎすぎただけよね」

くすつと笑って自力で座りなおすと、もう心配ないとみなした夕影は素早く由良から離れようとした。

「待って……」

思わず引き留めた由良を夕影は怪訝そうに見返してきた。距離を取りたがる夕影に、心地よくて離れてほしくないとは言えない。嘘を口にするかわかっているときこちない声が出た。

「ま、だ……まだ、めまいがするの。だから、まだ支えていて」

主にそう頼まれれば、夕影は断れない。一瞬刺されたような顔をした彼の肩に額を押し付けると、やんわりと肩に手が添えられた。前だったら背中に回ってきた腕が肩に添えられるだけになったことで、由良は泣きそうになった。

命令でしか触れ合うことができない関係が由良は恨めしかった。

「由良様、ご気分はいかがですか」

また何か過ちに繋がる行動を起こさないうちに離れたいと思う夕影に対して、見えないことをいいことに唇を尖らせた。

「……今、小丸がうらやましいと思っていたところよ」

正直に夕影の問いには答えずに脈絡もないことを言い放った由良に、夕影は身じろぎもしなかった。ただ、庭を見回っている小丸をふと見やった。

「そうですね。小丸は、行こうと思えば、どこへだって行けますからね」

小丸は自由だ。由良が城壁の外へ放してやるうと思えば、いつだって山へ帰れる。しかし由良が言いたかったのはそうではなく、身分というしがらみもなく夕影にかまってもらえる小丸がうらやましかったのだ。

でも、由良はそれ以上なにも言わなかった。

安斎康持が由良の座敷にやってきたのは、それから少し後のことだった。

今の今まで全くと言っていいほど由良の離れに顔を出すことがなかった大殿の突然の来訪に、女中たちは大騒ぎとなったが、由良は大喜びだった。

夕影ははしゃぐ由良の側で不穏な空気を感じていた。

（こんなにも放っておいて、いまさら一体なんの用だというんだ）  
座敷の一段高くなったところに座った安斎の考えを探ろうと、夕影は常より意識を集中させた。

「堅苦しいな。みな面を上げよ」

その声に、そろって平伏していた由良や女中らは顔を上げた。

上座に座しているのは髭を蓄えた初老の男だった。白髪混じりの髪をしてはいるものの眼光は鋭く、狩りが趣味というだけあって体つきはすこぶる良い。破顔すれば人好きのする顔にも見えるが、ふとした表情に気の抜けない刃のような鋭さも秘めている。

体に染みついた血の臭いと、瞳の奥に見え隠れする冷酷さを敏感に感じ取り、背筋に初秋のようなそぞろ寒さを感じた。

「此度は全く突然で済まぬことをした。今までなにかと忙しくてな。母もおらぬというのに片親であるわしが顔も出さず、姫には寂しい思いをさせた」

「いいえ、お父様。こうして訪ねてきてくださらずとも、お気持ち割いてくれたのだと思うだけでも由良は嬉しゅうございます」

長年放っておかれた寂しさが癒されたとても言うように、由良は頬を紅潮させながら答えた。夕影は心から嬉しそうなその顔を横目で見、安斎はいつまで家族ごっこを続ける気なのかとうつつすら思った。

もう由良が女となるまで時間は長く残されてはいまい。明日にでも運命の時がおとずれてもおかしくはない状態のこの中で、安斎が由良を訪ねた理由は何なのか。

じっと見つめていては無礼になるので、夕影は神経だけ安斎に向けた。当の安斎は満足そうに頷いた。

「そのように言うてくれると父は有難い。なんと良い娘に育ったことか」

「まあ、お父様。由良は本当のことを申し上げただけでございます」  
うふふ、と嬉しそうに由良は笑った。

「姫よ、それにしても良い庭だな。こぢんまりとしているが、花の盛りにはさぞ美しかろう」

ふと立ちあがって座敷から庭を見下ろした。閉じた扇で葉を落とす梅の木をさした。

「見よ、あの立派な枝ぶり……」

と、そのときぴょんと視界に飛び込んできたのは小丸だった。あつと言つて由良が腰を浮かせたが、それより先に振り返った安斎は女中を怒鳴りつけた。

「なんだあの獣は?! 姫の庭に放してあるとはなんと剣呑な。我が姫に何かあつたらどうしてくれる?!」

「ははあつ、申し訳ございませぬ……!!」

怒鳴られてぶるぶると震えながら深く頭を下げ、平伏した女中らだったが、由良は血相を変えて安斎にすがった。

「いいえっ!!いいえ、お父様。あの山犬はよくなつておりますゆえ、危のうございませぬ!!」なにより、怪我をしていたところを側仕えの少年が助けたのです。恩を仇で返すような所業をしましよるか」

「ええい、何かあつては遅い!射て!!今すぐ射て!!」

由良は女中に安斎から無理矢理引きはがされて、今にも泣きそうに顔をゆがめた。さつと夕影を振り返ると、この事態で取り乱すことのない冷静な顔をしていた彼に助けを求め。

「ゆづ……っ」

すると安斎は夕影の姿を見とめた。

「そちが姫の側仕えのゆうと申す者か」

「は」

今この状況で安斎が己に注目した時点で、嫌な予感が脳裏をかすめる。

(狙いは俺か ?!)

俺の何を暴こうとしている、とじりじり焼けつくような焦りを感じて内心で唇を噛んだ。

安斎は有無を言わせない絶対的な瞳で夕影を真っ直ぐに見下ろしながら、矢をつがえて小丸を射る用意をしていた近衛を手で制した。「そちが獣を連れ込んだのか。……そちが射よ。罰として、自ら獣を射よ。弓術ぐらいはたしなんでおろう」

「恐れ多くも、あの山犬は姫様が誰よりも可愛がっております」

「では、姫が山犬に咬まれたときは獣の代わりにそちが罪をかぶるか。それもよからう。それとも、わしの言うことが聞けぬか」

安斎は手近にいた近衛から弓矢を奪い取ると、夕影の目の前に突き付けた。

どうあつても己に射かけさせるつもりだ。一介の家人である夕影

には断る理由も権限もなかった。大殿に射よと命ぜられれば射かけないわけにはいかない。

(そうか)

安斎が何故に山犬一匹でこうまで騒ぎ立て、己に注目し、名指したのか合点がいった。由良の可愛がつている山犬を射かけさせ、仲違いをさせようとしているとしか思えなかった。

(俺が、由良様を直接傷つけることができないとわかっているのか) 安斎としては、男である夕影が姫とこれ以上親しくなっては困るといったところだろう。

今回、由良のもとへ訪れたことは唐突だと思つたが、逆に現在まで夕影という存在に目をつむっていたのが不思議なほどだったのだ。

知らぬうちに白波に探られており、泳がされていただけなのか、それとも敵だということは全く気付かれておらずに邪魔者を排除しようと思っただけなのか、今の段階では区別はつかなかった。

もとより、九龍姫の世話をするものたちは女中と決まっている。男子禁制とまではいかないがそれに近いものはある。九龍の力を姫以外で操れるのは男のみだ。密かに事情を知り、九龍を求める男が世話役として何人もいれば、いつ奪われるかわからない。

『男』は安斎一族が長年追い求めてきた夢を脅かす存在となる。

夕影は 表向きは土豪の酋長の息子ということで 異例で側仕えになっただけのことだ。それも、毒が効かぬ体という特異体質を買われて、おもに鬼役としてであった。

毒は効かぬが毒の味がわからないわけではない。人質として預かっている子供がたとえ死のうが生きようが、安斎にとってはさして興味のないことである。

それゆえに目をつむっていたのか、今まで由良に取り入ろうとして邪魔をされた覚えはない。しかし、ここへきて予想よりも夕影と由良の関係が悪くないことで焦りを覚えたのか、安斎は一計を巡らせた。

正面切つて嫌だと断れない歯がゆさからぐつと奥歯を噛みしめる。

女中に押さえられた由良が背後で己の名前を呼ぶ中で、夕影は弓矢を手に取った。

「ゆう？やめて……お願い」

安斎の言うとおりに射かけるつもりだと気付いた由良は、顔色を白くさせた。

矢をつがえ、弓弦を思い切り引いた。小丸は大騒ぎする人間たちにきよとんとしていたが、矢じりが己の方を向いていることで剣呑な雰囲気を感じ取り、姿勢を低くすると背中の中を逆立てて低く唸った。

あんなに己になついてくれていた山犬が歯をむいていることで、口の中に苦いものが広がった。が、怒りをあらわにされるようなことを先に仕掛けたのは他でもない己だった。

それを思うと、悲しみが泉のように湧き上がった。

(よけてくれ……よけて、どうか逃げてくれ)

逃げてそのまま城壁を越え、再び戻ってこないでくれ、と夕影は祈った。

「ゆうお願い、やめて……。お父様、どうかやめさせてください！」

背を向ける安斎はちらりとも振り返らない。由良は「いやっ」と小さく悲鳴を上げたが、弦を引いている夕影も矢を下ろしはしななかった。

嗚咽が喉のすぐそこまで上がってきていた。嫌だと叫んで暴れたために長い髪が乱れた。女中を振り払ってでも駆け寄って止めたかったが、数人がかりで羽交締めにされていて身動きが取れない。

「やめて、いやっ！！ゆう……！！小丸！！」

悲鳴の合間にタアンと小気味よい音とともに放たれた矢は、風を切って飛んで小丸に襲いかかった。

「ギャンッ」

脇腹に矢が刺さった小丸は弓なりに飛び跳ねて、まろびながらいずこかへと姿を消した。

「追つてとどめをさせ」

大殿に命ぜられた数人の家臣たちは我先にと小丸の後を追った。茫然と膝からくずおれた由良の側へ歩み寄ってきた安斎は、華奢な肩に手を添える。

「姫を思つてのことだ……」

衣擦れの音だけ残して去ってゆくと、座敷は急に静まり返った気がした。やにわに立ち上がった由良は、いまだに弓を離せずにとらりと腕を下げた夕影の後ろ姿に駆け寄る。己よりも位置の高い肩を掴んで振り向かせると、白い頬を平手で思い切り叩いた。

甲高い音が響き、痛々しい音に首をすくめたのは女中たちの方だった。

「……どうして射たの」

震える声で由良は聞いた。一拍置いて、夕影は常よりは低い、気力のない声で答えた。

「大殿に、ご命令を受けたからです」

「お父様の命令なら、何も悪いことをしていないものも殺すのね？！あの子は、なにも悪さをするような山犬ではなかったわ！！ゆうだつてそれを知っていたでしょう？！ゆうが拾ってきて、ゆうが世話をしていたのだから、小丸のことは誰よりもゆうが一番わかっていたのではないの？！」

どうして……、どうして嫌と言わなかったのよおっ！見損なつたわ、ゆう！！もう顔も見たくないっ！！」

身をひるがえすと、由良は座敷を飛び出した。女中の数人は由良を追いかけたが、その中から一人、お梅がうなだれる夕影の側へやってきた。

「ゆう」

そつと髪を撫でたが、彼が顔を上げることはなかった。

「ゆう、姫様はあんなことをおっしゃっていたけれど、今は混乱しているだけよ。後で、きっとどうしようもなかったんだつてことをわかってくださるわ。あなたは、悪くない」

ややあつて、夕影はのろのろと答える。

「いいんです。俺は咎められるようなことをしました。当然の、報いです……少し、一人にさせてください」

案じて優しい手を差し伸べたお梅を振り切ると、夕影は足袋のまま縁側から外へ飛び出した。草履を履いている余裕はなかった。足袋が汚れることなど今は関係なかった。

とにかくどこかへ逃げたくてわけもわからず走っていると、走馬灯のように拾ったばかりの頃の小丸が脳裏に浮かんだ。前足に怪我を負ったあの子を拾ったときから、大きくなるまでの今まで全てが感情の波とともに押し寄せてくる。

おもに面倒をみていたのは他でもない己だった。一日一度の飯も、たまのお風呂も、遊び相手になってやるのも。

(俺が先に裏切った)

それでも、最後にまぶたの裏に残っている光景が敵意をむき出しにする小丸だということに泣き出してしまっただった。

当たり前のことをした。信頼していた小丸に矢を向けた。

(どうか、許さないでほしい)

頬を叩かれて、顔も見たくないと言われるのは当たり前だ。こんなのは痛いうちに入らない。小丸は、きつともっと痛くて、苦しかった。

だからこんな痛くない。

しゃにむに走っているうちに陰り始めた空は、曇天となってとうとう雨粒を降らせた。ぽつりと一つ落ちるうちに、次から次へと厚い雲からこぼれ始める。あつというまに辺りは夕闇に包まれたかのように薄暗くなり、見上げても鈍色に厚く重なった雨雲さえ見えぬほど、勢いよく白雨が降り出した。

視界が真っ白に染まり、霞がかって見えた。

頭から足元までずぶ濡れになり、ようやく足を止めた。体も気持ちもひどく重い。首を振って額に張り付いた前髪を払うと、ぱっと水しぶきが散ったがそれも一瞬だった。

一体どこへ行きついたのでわからずに、目の前に見えた松の幹にもたれた。空から降りしきる雨のように、姿形もなくなって、どこかへ消えてしまいたかった。

「う……」

呻いたが、地面を叩く雨音が大きすぎて己の耳にさえ届かない。

「う、あああああああああああつ！！」

喉が割れるほど大声で叫び、松の木に殴りかかった。ささくれ立った幹で拳がじんと痺れ、雨も染みだが、何度も何度も殴るうち痛みが麻痺してきた。

目頭が熱い。頬を流れる水が、全部雨だと思いたかった。

#### すれ違い(4)

奥座敷に閉じこもり、伏せって体を丸め、泣きわめいていた由良は、ふすま越しに慰める女中の言葉にも耳を貸さなかった。

「姫様、わかっただけてください。大殿にあのように言われてしまつては、断ることなどできませんようか」

「そうです。あるとき射かけなければ、逆にゆうの首が刎ねられておりました」

家人が主に逆らうことなどできないとわかつていた。わかっていたけれど、それでもひどいと思わずにいらなかった。

嗚咽の合間に「放っておいて」とだけ言い放つ。仕方なしに女中たちが下がっていくと、喧騒と人氣が一気に遠のいた。奥座敷は由良の泣き声を吸い込んでこだませ、自分の泣き声を聞いているうちに余計に悲しみが増した。

（だってひどいわ。あの子になんの罪もない。だのに射かけたりするなんて）

山犬といつても人を噛んだこともない優しい子だったのに。

（どんな悪さをしたというの。わたしに噛みつくような子では決してなかったわ！）

小丸を射かけた夕影の頬を叩いた感触が消えなかった。誰かに暴力を振るつたのは初めてで震えが止まらなかった。ぎゅっときつく握りしめて目元を強引に拭くと、いつか優しく涙を拭ってくれた夕影の手を思い出した。

いつ頃からか降り出した夕立は雷雲も呼び寄せ、稲光が何度も轟いた。雷が苦手な由良は、何度目かで女中を呼ぼうかという気持ちに駆られたが、今は一人になりたい気持ち勝ち勝った。

（そうよ。怖くなんかない、怖くなんかないもの…）

昔、夜半に鳴り響いた雷に震えていた由良の様子を見に来た夕影が、雷鳴が遠のき、由良が眠りにつくまで側にいてくれたことを思

い出した。

彼は優しい人だ。それゆえに、どうして射かけたのかと問うた。

『大殿に、ご命令を受けたからです』

そう答えた夕影は紙のように真っ白な顔をしていた。

彼とて心から射殺そうと思ってやったわけではない。命令だったから否応なく射かけたのだ。頭ではそう理解しているが、なぜこんなことをしなくてはならなかったのだろうというやり切れない思いの方が強かった。

さんざ泣き、雷雨が遠のいたころにようやくと由良の涙も枯れ果てた。

雨上がりの空は燃え上がるように美しかった。空だけでなく遠くに見える千切れ雲さえもくつきりと夕闇色に染め上げられている。露を受けた葉が光りを弾いて、障子に切り取られた庭は常よりも一層見惚れる美しさだった。

重い頭でようよう立ち上がり、風が通るようにと開け放してある座敷を抜けて、由良は縁側の際までやってきた。ぬるい空気が頬を撫で、髪をさらっていく。ふと、数人の男性の声が聞こえてきていぶかしげにそちらを見やった。

「誰なの」

誰何すると、庭の端からやってきたのは近衛たちだった。みな一様に敵めしい顔つきをしていた。

「これは姫様、許しも得ずに庭に入りましたことを平にご容赦ください。あの山犬がこちらに逃げ込んだ気配があつたのですが、存じておりませぬか」

「見ていないわ」

勝手に庭に入ってきたことで不愉快さを面に出す。近衛は隠し立てしているとも思っているのか由良の答えに不審そうな顔をした。本当に知らないというのに疑われ、由良は余計に神経を逆撫でされて声高に言う。

「隠し立てなどしていないわ！ なにもいないとわかったら、さっさ

と出ておゆきなさい！」

羽虫でも払うようにして腕で大きく空を薙ぐと、近衛たちは渋々といった様子で踵を返して去って行った。

完全に姿が見えなくなるまでしばらく彼らをにらみつけ、由良はようやく短く息を吐いた。

「まだ誰かいるの？」

植え込みのあたりに何者かの気配を感じてきつく言い放つと、足袋が汚れることもいとわずに庭に下り立った。雨でぬかるむ土を踏みしめると、植え込みまであと数歩というところで陰から白いものが飛び出した。

なんと、それは追われていた小丸だった。驚いてたたらを踏んだ由良は我が目を疑ったが、同時に無事だったことに安堵した。

「小丸……！」

手を伸ばしたが、小丸は由良の予想に反して低く唸った。顔を引きつらせて牙を剥き、今まで見せたことのないような小丸の様子に愕然とした。

小丸の体には夕影が射た矢はもちろんのこと、無数の引っかき傷があった。矢は拳一つ分の長さを残して途中で折れていたが、刺さったままなので深手には違いなかった。白い毛皮は雨でびっしょりと濡れてしまっており、脇腹からはいまだ鮮血が滴り落ちている。

「こ、まる……」

傷はもとより、牙を向けられたことで言いようのない絶望感に襲われた。ぬかるむ地面に膝から崩れると、小丸はさらに姿勢を低くして唸った。ぐうつと唸ると口の端からこぼれた血が、湿った地面に吸い込まれていった。

由良の出方を警戒して、気力だけで踏ん張っているが、今にも事切れそうに喉がひゅうひゅうと鳴っていた。

絶望しているのは己じゃない。小丸の方だ。そう気づいて、顔をくしゃっとゆがめた。

「い、めんね」

わたしが力づくでも止めていれば、こんなことにはならなかった。  
「ごめんなさい」

どうして射たのかとゆうを責めた。だけど、小丸を殺めようとしたのはゆうじゃない。

（お父様だ）

再び泣き崩れそうになった。

そのとき、立っているのもやっとという様子の小丸は、その鼻先に差し伸べていた由良の手に牙を立てた。鋭い痛みが腕を駆け抜けて叫び出しそうになったが、息を呑み込んだことで堪えた。

（傷を癒してあげるには今しかない）

己の持つ奇妙な力は、枯れた草木を蘇らせ、時として傷を癒すことができるものだ。と由良は誰に教えられなくとも気づいていた。生物に対しては体に直接触れた方がより簡単に力を発揮できる。

直接触れることのできるこの瞬間を逃さないために、由良は食い干切られそうな痛みを我慢して、震えるもう一方の手で小丸の体に触れた。

小丸の体は冷え切ってしまったのと筋肉が収縮しているのとでひどく硬くなっていた。いつだったか抱き締めたときの柔らかい体を思い出すと、同じ命が目の前で今にも事切れそうなのが信じられず、切なくてたまらなかった。

「小丸……ごめんね。許してなんて言えない。けど、お前はどこへだっけていける。今助けてあげるから、ここを出てもといたところへ帰って、幸せにおなり」

それこそ小丸に射かける気持ちで半ば強引に矢を引き抜き、傷口を手のひらで撫でた。すると一瞬後には嘘のように傷口は消えていた。

狂ったように噛みついてきた小丸の瞳に徐々に正気が戻り、由良の様子を窺いながら戸惑ってゆっくりと離れた。

「……………」

下手に手を動かすと脳髄にまで痛みが走り、吐き気がするほどで

脂汗が滲んだ。真つ赤に染まった手を強く押さえ込んで深く息をすると、九龍の力で傷は塞がった。

力が抜けて尻もちをつく。汗を拭うのも忘れて震える手が動くかどうか試してみる。指先はぎこちなく動き、ようやくほつとした。安堵した由良の側に小丸がおずおずと近寄ってきて、血まみれの由良の手を温かい舌で舐め始めた。

「……いい子ね。ごめんね、小丸」

舌の温かさで凝り固まった気持ちが少し緩んだ。由良も小丸の白い体を撫でてやると、あちこちにこさえていた擦り傷が消えていった。気持ち良さそうに目を細めた小丸は顔を上げると鼻先を由良の顔に近づけ、頬をぺろりと舐めた。

由良は自分が泣いていることに、今になって気付いた。

あんなに泣き続けて涙はとうに枯れ果てたと思っていたのに、頬を伝う涙は止まる気配はなかった。小丸は心配そうな様子を見せたが、由良は子犬のときには想像もできないほどたくましくなった小丸の首に抱きつくと、最後に手荒く撫でてやった。

「さあ、もうお行き。お前は賢いから、人に見つからずに外まで行けるわね？本当はわたしが連れて行ってあげたいけれど、それは無理だから」

小丸は黒い瞳を真つ直ぐに向けて、くうんと小さく鳴いた。

「行くのよ、さあ早く」

別れがたいというように尻尾を何度か振った小丸を、由良は座ったままぐいぐい押した。ようやく由良に背を向けて歩き出した小丸は、途中で何度か振り返り、そしてとうとう庭の陰へ消えていった。（どうか幸せになって）

後ろ姿を見送ってなお、由良はその場から動けなかった。

由良は、この狭い庭から出てどこへでも好きなところへ行ける小丸の幸せを願わずにはいられなかった。

一歩外へ出れば危険なことも多かるうが、魅力的なことも同じくraithたくさんあるはずだ。いつか雌の山犬と出会って、子をもうけ

ることもあるかもしれない。

(わたしも、小丸のように自由になれば……)

由良を気遣って何度も振り返った小丸がうらやましかった。いつそのこと背中に羽が生えてどこかへ飛んでいけたらいいのにも思う。

茫然としていた由良は人の気配に気づいて顔を上げた。

「姫様？話し声が聞こえましたが、いかがなされました？」

話し声を聞きつけて様子を見にやってきた女中が泥だらけの由良を見て慌てふためき、女中頭のお初の命令で急いで湯を沸かして湯浴みをする事となった。

お付きの女中に体の隅々まで洗ってもらうあいだ、特に会話をするわけでもなく双方だんまりだったので湯殿は静かだった。時折水の滴る音と、外からは薪のはぜる音がかすかに聞こえてくる。

小丸は無事に逃げおおせたかしらと頭の隅で思っ、小丸の傷を治した己の手を見下ろした。

(わたしのこの力は、気味悪いだけなんかじゃない)

物心ついたときからすであつた力は、人々の間で奇妙で恐ろしいと噂された。こんなものさえ持っていなければ徒人と同じであったのと思うといとわしくて、何度も消えてなくなればいいと思つた。

しかし、先ほどのように致命傷にもなる傷を治すことができるという事を己の中で再確認し、それはきつと素晴らしいことだと由良は自分を慰めた。

ふと、奇妙だと言われる力を持つ己を気味悪がることもなく側にいてくれる側仕えの少年を思い出し、由良の気持ちは後ろめたさで沈んでいった。勢い余って叩いてしまうなんて、なんてひどいことをしてしまったのだろう。

(どうしたら許してくれるかしら)

素直に謝るのが一番だが、なにしろ顔を合わせづらい。顔も見たくないと言ひ捨てたのは由良の方だ。怒るかあきれるかしてまとも

に取り合ってもらえないかもしれない。

鬱々と考えていると、表の方がわかき騒がしくなった。湯殿から出た後に長い髪を櫛で丁寧梳いてもらって、椿油で仕上げを施している頃であった。

由良は腰を浮かせた。

「なにかあったのかしら」

女中も湯殿に入っていたので、はてと小首をかしげるばかりだ。どこか胸騒ぎがした由良は座敷を出て騒がしい方へと向かう。が、途中でこちらへやってきた女中頭のお初に引き留められた。

「姫様はお戻りください」

「なぜ？どうしたの、一体何が……」

恰幅のいいお初の横から顔を覗かせるが、喧騒はさらに先なので窺うことができない。お初はがんとして由良の前からどかなかつたので、由良は横をするりとすりぬけて強行突破した。

女中頭といえど姫である己を無理矢理に引き留めることはできない。そうとわかっていた由良は女中らを振り切って駆け出した。

女中たちで人だかりができているのをすぐに見つけ、輪の中に入り込む。

「姫様?!なぜこのようなところに!お戻りください」

勝手口にも近い裏の方まで姿を現した由良に驚いた女中は慌てて言った。しかし由良は女中の体をぐいと押し分けると、輪の中心を見て息をつめた。

全身びしょぬれの夕影が廊下に倒れ込んでいた。頭から衣まで水が滴るほど濡れていて、足袋まで泥で汚れている。あの夕立ちに打たれたであろうことは明白だったが、なぜ気を失っているのかまではわからなかった。

仰向けにされた夕影の面が紙のように白くなっていたため、なにか尋常でない事態が起きていることだけは感じた。

「ゆ……」

「姫様いけませぬ。お下がりください」

追いついたお初が由良の肩を掴んでぐいぐいと引っ張り下がらせた。体格がだいぶ違う上に、大根ほどの立派な太さのお初の腕は存外力が強く、肩を抱く腕に抗えなかった。肩越しに見やるがどんどん夕影から離されていく。

由良はお初に噛みつくように言った。

「なぜいけないの？ゆうはどうしたの！？あんなに顔色が悪いなんて、一体何があったの!？」

あまりに夕影の顔に血の気がなかったので胸騒ぎは増した。息をしているのかどうか遠目ではわからなかった。もしかしたらという最悪の事態を考えた己の頭が恨めしかった。

「行かせて!」

とうとう奥座敷に放られた由良は、立ちふさがるお初にすがりついた。

「ゆうに会わせて!」

「なりません。あの子は魔に魅入られております。忌み忌みしいことです、邪気がうつつたらどうされます。ともかく、会うことはなりません」

「そんなのひどいわっ！邪気がなんだというの？だからってみんなでああして見ているだけなんて…!!」

「姫様はこちらで大人しくしてください」

一方的にお初は言い放つとふすまは小気味よい音を立てて閉められた。茫然と立ちすくんだ由良だったが、いてもたってもいられずに別のふすまを両手で開ける。

しかし、そこにはお初が手配した女人の近衛らが、物騒にも長刀を持って立っていた。

「お戻りください、姫」

今までになかった扱いに、由良は愕然として座り込んでしまった。なぜ急に軟禁に近い状態にされたのかもわからず、夕影に会わせてもらえないのはもっと合点がいかなかった。

(ゆうが、ゆうが死んでしまう……)

そんなのは嫌だと思っても、今の由良にはどうすることもできなかった。無理矢理に出て行こうとすれば、容赦なく長刀で止められるだろう。

閉じられたふすまの前で、泣くこともできずに力なく座っていることしかできなかった。

軟禁は小夜更けても解かれることはなく、近衛は交代で由良のいる奥座敷を見張っていた。

夕影の様子が気になって眠ることすらできなかった由良には、ふすまの向こうに立っている気配が気に障った。

(なんにも教えてくれないなんて……なにより、こんなのもってひどすぎる)

女中らは、側仕えである夕影の様子を由良に一つも伝えることがなかった。しつこく聞いても存じませんのひとことで終わり、由良の不安は聞かたび増した。

脳裏に夕影の白い顔が浮かび、まさか事切れてしまっていたらと考えるだけで、血の気がさっと引く思いがした。矢も楯もたまらず、由良はふすまをそっと開けた。

「姫、いかがいたしました」

硬い声で問うてきたのは近衛だった。女中と同じ衣に身を包んでいるが、真っ白なたすきを掛け、額にも鉢巻をしている様を見ると、女中よりもたくましく映る。

近衛を上目づかいに見上げて、不安そうに言った。

「ねえ、眠れないの……」

「座敷にいてください」

さあ、と近衛は促して由良の肩を掴んだ。その手に由良はそっと指先で触れた。刹那、近衛は膝から廊下に倒れ込んだ。もう一人は呆気にとられ、何が起こったのかもわからないまま由良に触れられると、同じように長刀さえ構える暇もなく昏倒した。

すつすつと健やかな寝息を立てる近衛を見下ろして、由良は胸の前で手を握りしめた。

「ごめんなさい。でも、不安でたまらないの……だから少しのあいだ眠っていて」

由良は座敷に背を向けると小走りに暗がりになんて消えていった。

## すれ違い(5)

由良に頬を叩かれ飛び出した夕影は夕立ちに降られ、雨雲が去ったあともしばらく立ちすくんでいた。気分がひどく落ち込み、戻りたくはなかったが、そういうわけにもいかなかった。すっかり冷え切った体でのろのろと戻ったが、そこから先の記憶がぼっかりと抜けていた。

重いまぶたを開くと、狭い視界が揺すられたときのように回った。参った、と溜息に似た吐息を吐く。熱をもったそれが乾いた唇から吐き出された。

(熱い…)

辺りが闇に包まれていたことでひどく不安を掻き立てられた。明けぬ夜はないというのに、物音一つしない静まり返った暗闇は、永遠に光りが射さぬのではないかと思った。そのうちに夜半だと気付いたのは、？鳥が悲しげな声で鳴いているのが耳に入ったからだ。

どこかに寝かされていることだけはわかった。体が熱くてひどくだるかった。上掛けを腕ではいで肩を出すと、じつとりと汗で湿った額に手の甲を当てた。

衣が湿って気持ちが悪い。

熱と気持ちの悪さとであえいでいた夕影は、枕元に落ちた気配で薄くまぶたを開けた。と、ずしつと体に何かのしかかり、短く呻いた。人だ。重さと骨の太さから男だとわかる。しかし、わかっただけで馬乗りになっている男を振り払うことができなかった。

押さえ込まれて口の中に液体を流し込まれる。熱で虚ろな状態でも口腔に広がった液体が毒だと気付いたのは、馬銭子まぢんしの苦味があったからだ。吐き出そうとしたが、それより先に息ができないように鼻をつままれ、口の中に手をつ突っ込まれた。

舌で喉を塞いで呑みこむまいとしていたが、息苦しいのと突っ込まれたのとで唾液と一緒に嚥下した。ごくりと喉が上下したのを確

認し、男は素早く夕影の上からどくと音も立てずに暗闇に紛れてしまふ。

「……ぐっ、……」

腕で上体を支えて身を起こす。びろうな話だが、一瞬、吐き出すと考えた。しかし、水とたらいがなければ無理だった。畳にまき散らすわけにもいかない。夕影は家人で、雇われているだけの身分だ。寝床とおまんまは与えられているが銭を貰っているわけではない。汚した畳一畳とて買い直す銭はなかった。

そここう逡巡しているうちに熱も手伝って息苦しくなってきた。

馬銭子は敵の館に忍びこむ際に、番犬に対して使用する毒だ。少量でも呼吸困難に陥る。

確実に息の根を止める配合をしてあるはずだ。いくら夕影が毒に慣らされているからといっても、致死量を盛られれば話は別だ。

ここまですると躊躇している暇はなかった。布団から這いだすと、薄く開いた口の中に指を突っ込む。と、奥まで差し入れる直前に悲鳴のような声が聞こえた。

「ゆっー!!」

膜でもかかったようにぼんやりと聞こえたが、聞きなれた声に夕影は手を止めた。

「……ゆ、ら……さま……?」

口腔の半ばまで指を突っ込んでいたので乾いた咳を一つすると、倒れ伏した夕影の傍らに腰を下ろした由良はその背をさすった。

「気分が悪いの? ああ、とても熱いわ、熱があるのね……」

「ちが……毒を……」

「毒?」

思いもよらない言葉に背中をさすっていた手が止まった。

失言をしてしまったことにも気付かないほど、夕影は毒薬による息苦しさを前後不覚になっていた。どんなに呼吸を繰り返しても、ひゅっひゅっとうと喉が細く鳴るだけで苦しさは変わらない。

「ゆっ……?」

由良はあえいでいる夕影の頭を膝に乗せて覗き込んだ。月明かりは薄ぼんやりと頼りなく、顔色すらよくわからなかった。が、額と首筋にも伝って流れるほどの脂汗をかいていたことで、尋常ではない事態が夕影の体に起きているのを知った。

「苦しいの？苦しいのね？」

苦しげに顔をゆがめて畳に爪を立てる夕影は、耳鳴りがして満足に由良の声を拾えていなかった。何か声をかけられているということだけは感じていたが、応える余裕がとうに失われていた。

一歩先に死という暗闇が横たわっているのを感じた。

柔らかな由良の膝に頬を押し付けることが無礼になると理性では理解していても、今はとにかく誰かに救いを求めたかった。

由良は躊躇しながらも乱れた衿からそっと手を差し入れる。汗で湿った肌が存外熱を持っていて驚いた。心の臓が打ち鳴らされた太鼓のように暴れ回っているのが手のひらを通して伝わってくる。このまま打ち続けたら体がどうにかなってしまうのではないかと思っ

た。

(どうかゆうを助けて…)  
思わしく思っていた力に初めて祈りを込めた。どのくらい心の臓の真上に手を置いていたのか、夕影の熱で手が熱くなってきた頃にようやく彼はみじろいだ。

「ゆらさま…？」

ゆっくり何度かまたいだ。瞳がさ迷って左右に振れる。しかし、正気を取り戻したことで由良は一先ずほっとした。

「気がついたのね、良かった」

「ここ、は」

起き上がるうとした夕影の肩に手をやり、由良は自分の膝に押しつけた。

「駄目よ。まだ横になっていて」

夕影は唇を薄く開いて何かを言いかけたが、結局言葉にならずに終わった。意識を取り戻したといっても、なにより体力を消耗した

ので頭が回らないようだった。由良はしばらく素肌を撫でながらささやくような声で言った。

「ここは女中たちの部屋のもっと奥よ。きつと熱があつたから離されたのね」

暗い部屋を見渡せば長持や調度品が所狭しと並んでいるのが目に入るが、物置として使っている座敷だということまでは由良の考えは及ばなかった。

「おかげで探すのに苦労したわ」

「さがす…?」

呼吸の落ち着いてきた夕影は一度唇を濡らすと、かすれる声で問うた。由良は理由も曖昧なまま軟禁されたことで不満げに唇を尖らせた。

「だって、邪気がうつる、忌み忌みしいからと言って、ゆうに会わせてもらえなかつたんだもの。座敷に閉じ込められて、近衛もいたのよ。会わせてほしいと頼んだって聞き入れてもくれなかつたんだから。そんなのひどいっ」

徐々にだが確実に思考の回り始めた夕影は、それが安斎康持の謀だと頭の隅で感じ取った。

安斎は証拠もなしに小丸を剣呑だと決めつけ騒ぎ立て、夕影に射かけさせた。だがそれは、夕影と由良との仲を警戒してのことだけではなかつたのだ。今回の安斎の突然の訪問は、最初から夕影の命を狙つてのことだ。

もしあのまま毒で事切れていたら、由良の気に入りの小丸を射た夕影が、その後悔の念から自ら命を絶つたというようなことになつていたはずだ。毒をどこから調達したのかという瑣末な疑問など、後からどうとでも付け足すことができる。自殺と思わせるには十分だった。

(助かつた……)

と心の底から安堵したところで、「なぜ」という疑念が湧き上がった。毒を吐き出したわけでもない。解毒薬を飲んだわけでもない。

毒薬は致死量だっただけに命があることが信じられなかった。

「ゆう？気分はどう？もう大丈夫かしら」

もうだいぶ、と答えようとしたそのとき、心の臓の真上に置かれた手にはたと気付く。

「きゃっ?!」

跳び起きた夕影に驚いて、由良は短い悲鳴とともに手を引っ込ませた。一步分の距離を取った夕影は、はだけた夜着をそのままに己の胸に手を当てた。今度は全く違う意味で心臓が跳ねる。

「いま、俺はなにを…っ?!」

仮にも仕えている主に膝枕をさせていたことで気が動転した。対して由良はいまさらになって衿から手を差し入れてしまったことに気まずさを感じたのか、取り乱した様子の夕影を見てまじろいだ。恥ずかしそうに身を小さくすると手のひらを膝にこすりつける。

しばらく沈黙が降りていたが、おずおずと由良が話の口火を切った。

「ねえ、ゆう」

湿った夜着の乱れを直していた夕影は、真面目な声音に顔を上げた。月明かりのか細い中で白い夜着をまとった由良はぼんやりと浮いて見えた。硬い表情をしていただけに置物の人形のようにも見える。

「毒って、なに？ゆうは誰かに狙われているの？」

口にすることは躊躇われた。本当のことを聞くのが怖かった。己の知らない「ゆう」を知ってしまうと、「ゆう」が消えてしまう気がした。

だが、今聞かなければこの先真実を知る機会を失う気もした。

夕影はわずかに目を見張ってこちらを見つめていた。由良は一度ごくりと喉を鳴らして唾を呑み込むと静かに問うた。

「ゆうは、一体何者なの…?」

夕影の視線は揺らいだ。

?鳥がひいい、と物悲しげに鳴く声が沈黙をさらに深くさせた。

由良は小揺るぎもせず、背筋を伸ばして真っ直ぐに夕影を見た。その眼差しが耐えられなかったのか、夕影はしばし視線を落とすと、ふと漆黒の瞳を由良へ向けた。

「今は、申し上げることはいけません」

死罪となってもおかしくはない返答だった。しかし、由良は悲しげな表情を浮かべただけで、「そう」と短く答える。

夕影はその場に平伏した。

「お許しください、由良様。今はまだ、申し上げることはいけません」

「それなら、いいわ……無理に聞かない。けど、わたし、毒と聞いて心穏やかじゃないわ。今日はここで寝る。ゆづの側にいるわ」

夕影は思ってもみなかった言葉に思わず顔を上げた。

「由良様……！ いけません、寝所へお戻りください」

「どうして?! だって、また毒とやらを盛られたらどうするの? さつきだって、わたしがいなくなったらゆづは事切れていたわ!! そうでしょ?」

真っ白な障子を通してか細い月明かりが仄明るく座敷を照らしているせいか、夕影の顔は紙に負けず白く見えた。己の力のおかげとはいえ命があることが夢のように思えた。

「い、や……よ……」

我が儘と思われてもいい。身勝手と罵られてもいい。ここで目を離してしまうのがとても不安だった。

煙のように、揺き消えてしまいそうで。

「絶対に、嫌っ」

由良は膝の上で硬く拳を握りしめた。

由良の九龍の力がなければ、己は白波に確実に殺められていたと夕影は思った。由良の言うとおり、夕影が生きていると分かれば白波は再び暗殺を仕掛けてくる可能性もあった。白波衆の存在を由良は知らない。由良が側にいれば容易に手出しはできないだろう。

だが、と夕影は目を細めた。

「由良様、寢所へお戻りください。お忘れですか、わたしは鬼役です。毒の類には慣れております。それに、わたしが危なくなったら由良様が助けてくださるのでしょうか？でしたら、ゆうは百人力ではありませんか。御心配には及びません」

微笑んで見せたが笑えていたかどうかはわからなかった。ぎこちない顔をしていたのか、由良は硬い表情のまま夕影を見つめていた。心の底を窺っている顔だ。

表ではいい顔をしている女中も、裏では由良を気味悪がった。長くそうした環境にいたためか、彼女が静かにこちらを見ているときは大抵心の内を窺っているときだった。しかし今は疑惑のためではなく、本当に夕影は一人で大丈夫なのだろうかと案じているようだった。

(どうか寢所へ戻ってください……)

女中も滅多に入らない物置なぞに姫君が床を取るなどもつてのほかだ。翌朝に女中に見つかれば、なにを言われるかわかったものではない。なにより、これ以上己の側にいれば危険な目に遭うかもしれないと思うと、一刻も早く安全な場所へいてほしかった。

由良は溜息をつくと肩を落とした。

「わかったわ。ゆうがそう言うのなら……わたし戻る。おやすみなさい」

立ち上がり、後ろ髪を引かれる様子を見せながらも由良は物置を去った。障子に映った薄い影を見送った後、夕影は上掛けを手にすると座敷の隅に腰を下ろした。そつと足に手を這わすと苦無があることを確認する。

(みんなに正体を掴まれてはいないだろうか)

どうやら衣をはがれて単の下衣で寝かされていたようだ。この濡れ具合からして衣が湿っているのは汗のせいだけではあるまい。女手では着替えさせるのは無理だったのだろう。真つ裸にされなかったのが幸いした。

(さあどうするか)

白波衆はさっきの毒で殺せたと思ったはずだ。夜半のうちに死体の確認に来るか、もしくは翌朝に死体があると女中が騒ぎ出すまで待っているか。どちらにせよ近々ぶつかることになるというのは目に見えていた。

暗器を隠している箇所を探つて、全てきちんとあるかどうか手で確認する。

不思議と体が軽く、眠気も襲つてはこなかった。高熱と毒に侵されていた体とは到底思えない。

九龍の力と由良に感謝しながら、夜が明けるのを待った。

寢所へ向かつてひたひたと廊下を歩いていた由良は、どこことなく気分が悪いことで立ち止まった。

(なにかしら。お腹が痛い)

下腹部がズンと鈍く痛んだ。今まで感じたことのない痛みにうつむくと、足下にぼたりと鮮やかな血がこぼれた。

「あ……」

思わず吐息が漏れて、数歩下がる。女中頭のお初の声が耳の奥に蘇った。

『よいですか姫様。？峨郷を治める大殿の娘とはいえ、ゆくゆくは嫁すさだめ。嫁ぎ先でなにより大事なことは子を成すことです』

『コヲナス？』

『おなごは子を宿す準備ができると女となるのです』

月のものがその証拠。

(わたし……)

茫然と滴を見下ろして、ぬるい風がそよそよと吹く中でしばし立ち尽くした。

もう、今までの無邪気な自分ではいられない予感がした。

## 契り籠む（1）

夜が明け、厨女たちが朝餉の煮炊きを始める頃になっても白波衆は姿を見せなかった。夕影はほつとしたと同時に、これから様子を見に来るであろう女中らになんと言おうか悩んでいた。

そうしているうちに起き出した女中でにわか騒がしくなり、廊下をするすると歩いてくる影が見えた。

「あれまあ」

障子を開けた女中は、昨日にあんなにも高熱で苦しんでいた夕影が、早くも頭を起こして鎮座しているのを見て目を見張った。

「ゆう、あんた、もう起きて大丈夫なのかい？」

「ええと、おはようございます……わたしはどうしたんでしょうか。記憶がすっかり抜けていて」

「ははあ。やつぱり若いと治りが早いねえ。ゆうはね、昨日熱出して外から戻ってくるなり倒れたんだよ。他にうつつてもいけないってんで一人だけこんなところで寝かせてたってわけ」

ずいぶん扱いを悪びれる様子もなく口にした女中に、すつきりとした顔つきの夕影は今日の天気の場合でも聞くようにふうんと答えた。女中は腕を組む。

「まあまあ、治って良かったね。お初さんと呼んでくるからちよつと待ってな」

しばらくして女中頭のお初がやってきたが、彼女は常にも増して苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。

体格が立派なお初は座って苦い顔つきをしているだけで圧迫感を醸し出す。今はそれに加えて腕を組んでいたので余計に気迫は増した。

夕影が倒れたから機嫌が悪い、というのは理由として考えられなかった。一体どうかしたのかと不審に思っていると、真向かいに座っていたお初は低い声で問うてきた。

「お前の邪気が姫様にうつつたんじゃないだろうね」

「え？」

「姫様はお前の具合を大層気にかけていらした」

「恐れながら、だからといってわたしの熱が姫様にうつるわけではありますまい。姫様はいかなされたのですか」

由良になにかあつたという口ぶりだ。そのせいで機嫌が悪いのだと合点がいっただが、どうして、熱でも出たのだろうか。昨夜、由良が様子を見に来たときにうつつたのだらうかと考えた。

夕影の言うことも道理と思つたお初は鼻でふんと嘲笑気味に笑う。「お体の具合が悪いそうだよ。だからてつきり、お前の邪気がうつたのではないかと思つてね。それ御覧、その代わりお前はピンシヤンしてるじゃないか」

「怪しげな術者ならいざ知らず、わたしのよ様な徒人に己の邪気を飛ばすような術は使えませんよ、お初殿」

八つ当たりするほど苛立っているお初と冷静な夕影の間に火花が散つた。お初は猪のように鼻から息を吐き出すとやにわに立ち上がる。

「兎も角、治つたのなら支度を済ませて、いつもどおりにお勤めするんだね」

お初はそう吐き捨て、力強く障子は閉められた。夕影は首をすくめるとあたり散らされたことで顔をしかめた。

(しかし、具合が悪いというのは心配だ)

物置を出ていつもどおりに着替えを済ませ、由良の朝餉の膳を取りに厨へ向かった。毒味を済ませたものを持っていくと、由良は横になってこそいなかったが脇息にもたれて目を閉じていた。

「由良様、朝餉をお持ち致しました」

「ああ、ゆづ」

とろんと重そうにまぶたを開けた由良は、それでも夕影が姿を見せたことで安堵した表情を浮かべた。居住まいを正すと膳には目もくねずに、側に座した夕影を見る。

「もう大丈夫なの？無理はしていない？」

「わたしはもうご心配いりませんよ。わたしのことよりも由良様が心配です。聞いたところ具合が悪いとか。起きていて辛くはありませんか」

身を乗り出して聞いてきた夕影に対して、由良は少し照れくさそうに身じろいだ。

「平気よ。ねえ、ゆう。もうすこし側へ行ってもいい？」

一瞬きよとんとしたあと、夕影はどうぞと短く答えた。

由良は嬉しそうに微笑むと、夕影の胸の中に飛び込んだ。背中に腕を回された夕影は、考えてもみなかった事態に思わずひくつと息を詰めた。

早鐘のように脈打ち始めた心臓の真上に耳を押しあてた由良は、安堵の吐息を吐く。

「……よかった。ちゃんと動いてる」

「う、……動いていなかったら死んでいます」

なにを言っているのだろうと戸惑う頭の片隅で疑問に思ったが、危篤の状態のときに駆け付けた由良はどうしても確認したかったのだろう。昨夜のことを思い出し、夕影はそっと由良の体を抱き返した。

「由良様、昨晚は助けをいただきましたありがとうございます。不思議な力ですね、まさかそのようなことができるなど、思いも……」

「……っ……っ……」  
思いもよりませんでした、という言葉は半ばで途切れた。腕の中の由良が勢いよく夕影を突き放したからだ。彼女は何かに怯えたような顔で夕影を見上げた。

「ちがう」

薄く開いた唇から洩れた言葉に、夕影は何度かまたたいた。由良はさっと顔色を変えると、震え出した手を強く握りしめた。

「嫌よ……ちがう、違うっ、わたし化け物なんかじゃない……!!  
化け物じゃないっ、お願い、嫌いにならないで!!……!!」

「なにをおっしやって」

「いやあっ!! 違うの!! 怖くなんかない、殺したりなんか絶対にしない……化け物なんかじゃないっ!!」

取り乱した由良に困惑していると、由良のまなじりからぽろっと涙がこぼれた。すると堰を切ったように、まるい頬に次々と涙が伝った。

夕影が虚を衝かれて動けないでいると、ふすまがすらりと開く。

「なんの騒ぎです」

何かに取り憑かれたように由良が悲鳴を上げたのを聞いて、女中がやってきた。しかし、由良が落ち着きを取り戻すことはなく、夕影からも離れると「違う」とひとこと叫んだ。

刹那、近くにあった花瓶が音を立てて砕け、破片が飛び散った。

「ひいっ!!」

女中も悲鳴を上げ、腰が抜けてその場に座り込んでしまった。ガタガタと震える体でなんとか後ろに下がろうとするが、四肢はむなしく空を掻くだけだ。

女中が短く叫んだことで、由良の視線は彼女を捕らえた。奇妙な力を持っている姫に見つめられたことで女中は顔が恐怖で引きつり、真っ青になる。

「ば……化け物っ!!」

思わず口を衝いて出た言葉は、由良の神経を逆撫でした。立ちすくんだまま大きく目を見開くと、座敷へ吹き込んできた生ぬるい突風が由良の長い髪をさらった。

「いや……あ、あああああああちがうちがうちがうっ!! 化け物じゃない化け物なんかじゃない!!」

喉を裂いて飛び出た悲鳴とともに、突然吹き荒れた生ぬるい風がふすまを激しく叩いた。由良は髪を振り乱し、頭を抱えて今にもくずおれそうだった。

(九龍の力が……)

唯一冷静な夕影は、由良が取り乱したことで九龍の力が暴走して

いるのだと気付き、目を細めた。

由良との距離を詰めると、怯えた瞳でこちらを見やった由良の腕を掴み上げた。

「いやああっ!!」

しゃにむに振り払おうとした由良の力は存外強く、あの華奢な腕からどうやって男である夕影に対抗する腕力が出るのか謎だった。素早く押さえ込むと夕影は腰を抜かして座り込んでいる女中を振り返る。

「出ていてください!!」

「あ、あ……そんなだから大殿にも捨てられるのよおっ」

鋭い声にすみあがった女中は硬直が解けたのか、由良をさらに傷つける言葉を吐いて脱兎のごとく座敷を飛び出していった。

余計なことを、と舌打ちでもしてやりたい気持ちになったが、それより由良を落ち着かせる方が先だった。

「由良様、落ち着いてください。誰もあなたを恐怖したりしない」

細い体が折れてしまうのではないだろうかというぐらい抱き込んで、身動きの取れなくなった由良の耳元でささやいた。腕の中で由良は嗚咽の合間にうわごとのように繰り返した。

「すて、ないで……すてないでよおっ、ひとり、やだよ……」

乱れた息遣いを繰り返していた由良は、唐突にふっと気を失った。由良を運び出すと廊下の離れた所から女中らが様子を窺っており、夕影が布団を敷いてくれるように頼むとようやく人の波は散って行った。己が様子を見ているからしばらく誰も近付くなど言い置くと、女中たちはあからさまに安堵した様子だった。

後ろ手にふすまを閉める。夕影が傷つけられたわけでもないのに心が引つかかれたような息苦しさを覚えて、真っ白な顔をして横たわる由良を見下ろした。額に張り付く髪を指でのけると、ゆう、と由良の唇が動いた。

震えたまぶたを薄く開いた由良は、しばらく視線をさまよわせ、ようやく夕影を見とめた。

「ゆう……」

呼ぶなり、その瞳に涙がじわつと溢れた。寂しさを抱えた幼子のように、頼りなげに伸ばしてきた手を取ってやる。

震えていた。

「わ、たし……化け物じゃない。こんな力いらさない。なのになんでこんな……こんな力がなければ、みんなわたしのこと好きでいてくれるでしょお?! 誰もいないの、こわい。ゆう、ゆうに嫌われたら、わたし、生きていられない……」

(ああ、そうか……)

由良は他人に「化け物」と呼ばれて恐れられていることを知っている。由良が望んで手に入れたわけではない九龍の力のせいで、人々に拒絶されていることを知っている。

たぶんきつと、由良の側に控えている人の中で恐れていないのはただ一人 己だけだ。

「お願い、嫌いにならないで」

誰よりも傍にいて、誰よりもこの人を見てきた。

誰よりも愛している、心が 弾けた。

「ゆう?」

きつく抱きすくめると、吐息交じりの声が耳元で聞こえた。

華奢な体だ。これで、どんなにか辛い思いに耐えてきたのだろうと思うと、もう離したくなかった。

離せない。

「誰が嫌いになったと言いました。俺が、嫌いになんかなるはずがない。

昨夜、答えることのできなかつた問いに答えます。俺は忍びです。頭目があなたの力を求めている、安斎からあなたを奪い去るために姿を偽って忍び込んだ間者です。信用させてうまく外へ連れ出すために優しいふりをしていました。始めはただ、それだけでした」

けれどいつしか、淡い気持ちは芽生えて。

「あなただけを、喜ばせてあげたいと思うようになって」

あなたの笑顔を見たいと思うようになって。

自由になれない己にも気付いて。

「忍びでなければよかった……！ただの男と女なら、誰にも縛られることなく、こんなに苦しむこともなかったのに……！」

心の中で渦巻く気持ちを一気に吐露すると、どこかすつきりしたが、どこか悲しかった。吐き出してどうにかなっていれば、もっと早くに言葉にしていた。ただ、どうにもならない現実をありありと感じてむなしさが増した。

「ゆう」

呼ばれたことでゆるゆると体を離すと、滑らかな手が頬を包んだ。今までで一番近い距離で見つめ合う。互いの鼓動の音まで聞こえてきそうだった。

由良は怒るでも悲しむでもなく、凧いだ水面のような顔をしていった。

「どんな理由があろうと関係ないわ。ゆうが敵でも味方でも。わたし、ゆうに側にいてほしいの。ゆうが側にいてくれれば、それでいいの」

「由良様……」

「由良よ。由良って、呼んで」

吐息の交じりそうだった距離はあっという間に縮まった。夕影は、桃色の唇に己のそれを押し付けた。

たとえ結ばれないとわかっていても、たとえ決して手に入らない人だったとしてもいい。今、この瞬間だけ自分のものになれば、心さえ繋がっていればそれでいい。

「由良、傍にいます。この先何があろうと、心はいつでも傍にいます」

決して結ばれることはないと残酷な現実を突き付けられてなお、夕影は神掛けて誓った。

勢いのままに二人は互いを求め、そして、しばらく手を離すことはなかった。

## 契り籠む（2）

声がかかったのは、二人が乱れた着物を直し終え、由良が鏡台の前で髪を梳かしているときだった。

滑るように開いたふすまの向こうには、やけにかしこまった女中頭のお初と数人の女中がいた。

「姫様、大殿がお呼びです」

「今いくわ」

由良はお初の後ろをついていくが、安斎の屋敷と由良の屋敷とを繋ぐ回廊に向かつていないことに途中で気付いた。

「どこへ行くの？お父様の屋敷は、そちらじゃないわ」

「まず、湯浴みをしていただきます」

お初は振り返らずに答える。それがなにを意味しているのか、由良には理解できなかった。

常より時間をかけて湯浴みを済ませた由良は、女中の用意した着物に袖を通した。それも、染み一つない真っ白な衣で、帯こそ金糸で刺繍を施してあるが、同じ白だった。

（今すぐ、逃げてしまいたい）

なぜ、安斎の元へ行くというだけでこんなにも入念な準備をするのかわからず、由良はお尻がむずむずするような居心地の悪さを感じた。女中らもやけに静かで不思議だった。

肃々と準備が整い、安斎の控えている間のふすまの前でお初も由良も平伏した。

「姫様を連れて参りましたでございます」

入れ、と中から短く答えがあると、二人の女中は由良を挟むようにふすまの前へ膝をつけると、静かに開けた。顔を上げた由良は真正面の、歩幅にして十歩ほど離れた奥で待っている安斎を見た。

急かすような言葉はひとつもなかったが、視線を外すことなく由良を見つめているその瞳の奥に、刃の鋭さを感じて目を伏せた。

切っ先を喉に突き付けられているようだった。

(怖い)

女中が動かないことで、ここから先は一人で入らなければならぬのだと気付いた。身震いしてしまいそうな体を抑えて、一步、また一步と安斎に歩み寄る。背後で音も立てずにふすまが閉まったのを気配で感じた。

「どうした。もっと近う寄れ」

手前で立ち止まった由良に安斎は手を伸ばす。言うことを聞かなければ斬り伏せられてしまいそうな恐怖に駆られ、由良は震える手を添えた。ごつごつとして乾いた手が己の手を掴んだ、と思った瞬間にはすでに引き寄せられており、由良は安斎の腕の中にいた。

「なぜ震える。父に会えて嬉しくはないか」

「あ、う……まさか呼んでいただけなど思いもよらず、どうしたらよいのかわからないのでございます」

言い訳じみたことを口にしてしまう。しかし真実、呼び立てられた理由がわからなかった。みじろぐと、硬い体に背後から抱き寄せられる。温かいはずなのに背中に氷でも放られたように寒気がした。「この世は素晴らしいと思わないか。わしはこの世の全てが欲しい。我が姫は『神と呼ばれる九匹の龍』の話を知っておるか？」

耳元でささやかれたかすれた声に、由良はひくつと息を詰まらせた。

「この世を創った神だ。その力を手に入れた者は、霸王となれると言われておる。わしの父も、祖父も、曾祖父も、みなその力を求めてきた……」

そして、やっとわしの代で手に入れた」

安斎はゆるりと由良を撫でていた腕に力を込めると華奢な体を押し倒した。強引に押し倒され、畳にしたたか押し付けられる。わけもわからず肩越しに振り返ったが、後ろからのしかかってきた男の体の下から抜け出すことができなかった。

「お、お父様、何を、おっしやっていますか……？」

「姫よ、そちが持つ力は我が安斎一族が千年ものあいだ夢見た九龍の力ぞ。ようやく手に入れし霸王の力…、さあ、契りを籠もつぞ、我が姫よ」

金糸の刺繍の帯がはらりと解かれる。

父の言った意味が理解できない由良ではなかった。なるほどそれで花嫁衣装に似た白無垢を身につけさせられたことを今更ながら悟った。

真っ白な打掛が押しやられ、帯を解かれた小袖の衿元から滑り込んできた手が体をまさぐった。硬い手は優しさを一片も感じさせない仕草で乳房を撫でた。

背後から漏れ聞こえる荒い吐息が恐ろしく、なにより覆いかぶさっているのが他の誰でもない、父親という男であるというのが信じられなかった。

「い、いやあつ！！嫌ですお父様！！お、お父様とわたしは親と子ではないですか?!」

「わしに子はおらぬ。そちは九龍をその身に降ろすためにわしに捧げられた平民の子だ。そちは誰の子とも知れぬおなごよ。良いではないか、親孝行をしたな。顔も知らぬ二親も喜んでおるのではないか？捧げた娘がその身に神を宿し、わしの伴侶となるのだから」

由良は頭を殴られたような衝撃に襲われた。

ずっと、この人が父親だと思ってきた。母親は産後の肥立ちが悪く、由良を産んですぐに亡くなったのだと聞いていた。

『お父様は、お母様の話を全然してくれないわ』

幼い頃、寂しさから女中にそう漏らしたこともあった。我が儘をおっしゃいますな、大殿も奥方を亡くされ大層悲しんでおいです、と女中は言った。

(違つ……)

悲しいわけではなかったのだ。もとより、安斎に妻はいない。己は本当の子供ではない。

最初から、この男の掌で踊らされていただけなのだ。

「我が愛しの九龍姫よ」

安斎は由良の両腕を押さえつけた。身動きの取れなくなったしなやかな肢体に押し付けられた体に悪寒が走った。

父親と信じていた男に迫られたからではない。愛していると口では言いながら、優しさの欠片も見られない扱いに吐き気がした。

本当に愛おしそうに名を呼んで、触れてくれる手を知っているから。

「いつ、いやあっ!」

きつく目をつぶると、一拍置いてぐうとうめく声が出た。足を掴んでいた安斎がそれ以上行動を進めなかったことでそつと目を開けると、広い肩が横倒しになったのが視界の端に映った。

由良は何が起こったのかわからずに、倒れた安斎を見下ろす。瞳孔は開き、薄く開いた口の端からは唾液がこぼれている。息をしているかどうかを探るより前に、恐ろしくなつて逃げ出した。

衣をかき集めて無我夢中で走る。屋敷のどこを通り抜けたのかわからない。ただ、安斎の屋敷の中で家人に遭遇しなかったことは感謝した。由良の屋敷の中で数人の女中とすれ違ったが、取り乱した由良を引き留めるものはいなかった。

「ゆうっ」

座敷に飛び込むと側仕えの少年の姿を探した。見当たらないことで不安に駆られるが、しばらくすると呼び声気付いたのか、彼は庭から顔を覗かせた。

「由良様? いかがいいたしました、大殿に呼ばれていたはずでは」

「ゆう!」

汚れることもいとわずに縁側から飛び降りると、膝が崩れてその場に手をついた。慌てて駆け寄ってきた夕影が傍にしゃがむと、由良はその体にすがりつく。

「ゆう、わたし」

帯もせずに乱れた衣は見るからに下衣で薄いものだ。いくら掻き合わせても、抱けば肉の感触が手に取るようにわかる。尋常でなく

怯えた様子に何事があったのかすぐに合点がいき、夕影は震える体をきつく抱きしめた。

「……ゆっくり息をして、落ち着いて話してください」

嗚咽を上げて喉を詰まらせていた由良の緊張は、次第に解けてきた。

「お父様が、わたしを本当の子ではないと言って、わたしの力が欲しいと言ったわ。そのあと」

由良はぶるつと身震いした。

「覚えていない……！押し倒されて嫌だと思ったのは覚えてる。けどそのあと、急にあの人は倒れ込んで……！！」

ねえ、ゆう。これもわたしの持っている九龍の力なの？わたし、とうとう人を殺めてしまったの？怖い、どうしよう……、わたしどうすれば」

「落ち着いてください、由良様」

全てを最初から知っていた夕影は、今にも泣き出してしまいそうな由良の背を優しく撫でた。夕影にとってはさしたる事態ではなかった。由良が女となったことを知った先刻、すぐにも安斎は由良に契りを迫るであろうとわかっていたからだ。

由良は怯える瞳で夕影を見上げた。

「ゆう、わたしと一緒に、逃げてくれる？いつかここから連れ出してくれるって、約束したわ……！」

そのときふうと空が陰った。あつというまに空には厚い雲が垂れ込め、灯りを灯さなければ満足に見えぬほどになった。まだ夜には程遠い時刻だ。九龍は天候も操る。由良の気持ちがない交ぜになって、天候を動かしている。

（逃げるには今しかない）

その考えが脳裏を横切った。一瞬たりとも躊躇している暇はない。もし由良の言うとおり、安斎が倒れたとなると、一番に怪しまれるのは由良だ。九龍の力を持っている由良が殺されることはないと思うが、幽閉はあり得る。すぐにも手を打たなければ手出しできない

くなる。それに、暗闇に乗じて連れ出すのは簡単だ。

夕影は咫尺しせきを弁せぜぬ闇の中で、由良の顔を真まっ直ちぐに見下ろした。「全てを捨てる、覚悟はおありですか」

己は全てを捨てる覚悟をとうにしている。一本筋の通った何者にも曲げられない意思が滲み出ていたのか、由良はびくりとすくんだ。闇の中で一對の瞳がこちらを見つめている。崖の上に追いやられているような気分になり、由良は吐き出すように言った。

「あるわ!!!」

夕影はわずかに頷いたようだった。

「外にお連れいたします」

言つて、長持から濃い色の小袖を持つてくると、それで頭から由良を包んで抱え上げる。

(すぐにも追手がかかる)

駆け出した夕影が憂慮したように、虎口に辿り着く前に追手はかかった。

淡い光すら射さない中で頼りになるのは気配だけだ。だが、追手も素人ではない。巧妙に気配を押し隠していたため、目前に迫るまで殺気に気付けなかった。

真下から突然噴き上がった殺気にたたらを踏んで、夕影は頭で考える前に由良をかばった。

風を切る音が耳元で聞こえたのと、背中にちりつと熱いものがかすめたように感じたのは同時だった。

由良を抱え込んだまま倒れ、下敷きになった由良がぐうと妙な声を上げた。見えない追手に無防備にも背中を向けていた夕影は、咄嗟に懐に仕込んでいたあいくち匕首を引き抜いて飛び起きた。

吸い込まれそうな闇の中でも白々と光を弾いた真っ直ぐな忍刀を、逆手に持った匕首で受けた。かちあう刃の間で火花が飛ぶ。力むと背中が生温かく感じたが、不思議と痛みが少なかった。

生温かいということはそれなりに斬りつけられて出血しているということだ。だのに痛みが鈍いということは、鎮痛作用 多く使

用すれば麻痺作用のある毒が塗ってあったということになる。思い当たる薬草が脳裏によぎる。

(トリカブト……?)

だとすれば、次第に呼吸も苦しくなってくるはず。

双方ともに長く斬り合いをしている時間はない。先に相手が刃を滑らせて匕首を弾いた。相手は払った勢いを失わずに目を狙って衝いてきた。近距離からではよけきれない、と反射的に目をつぶる。「ゆう!!」

後ろから悲鳴が上がった。同時に、夕影を殺めようとしていた相手が見えない何かに弾かれて、後方へ吹き飛んだ。黒い影はずぎつと勢いよく土埃を上げて地面を滑り、弾かれた匕首もまた地面で弾んで転がった。

一瞬の出来事で一体何が起こったのかわからなかったが、とにかく助かったと思うと気が抜けた。前のめりにくずおれた体を咄嗟に由良が後ろから抱えたため、夕影は面をぶつけずに済んだ。

しかし踏ん張っていられなかったので、地面に手を付き半ば倒れ込むようにして崩れた。

「ひどい怪我よ」

背中から聞こえた声は今にも消えそうなほど頼りない。由良の方こそ気を失ってしまいそうだ。なんとかして立ち上がりたかったが、思うように力が入らない。背中が傷で温かいのか、由良がくっついていいるから温かいのか区別がつかなかった。

(駄目だ、一刻も早くここを抜けなければ)

身じろいだ夕影に、後ろから抱きついた由良は動かないでと言った。

「この怪我で立てるわけないわ。もうちょっとじっとしていて」

ぐっしょりと血濡れた背中にすがりつき、由良は意識を集中した。己らを囲っていた数人の追手は先ほど由良が残らず吹き飛ばしたの  
で襲ってくる心配はない。

「すぐに、治すわ」

由良が呟くと、夕影は己の体が芯から温かくなるのを感じた。体と言わず腕や足、指先といった一つ一つが 否、肉と骨のもっと奥にある一つ一つが熱でざわざわと激しく揺らいた。

肉が傷口を塞ぎ元通りになると、鈍い痛みは消え、熱もふと冷めた。

「立てる？」

脇に肩を滑り込ませようとした由良だったが、傷を負う前よりも体が軽く感じる夕影は手を借りずに立ち上がる。匕首を拾い上げると懐にしまった。

「平気です、ありがとうございます。由良様、お手を。はぐれてしまわぬように」

夜にも見紛うほどの暗闇では手を取っていてもはぐれる可能性がある。白く浮いて見える面が逡巡したようにも見えたが、由良はそっと手を差し出した。

夕影は由良を抱き上げると、ようやく虎口を抜けた。由良にとっては初めての外だったが、太陽の陰った郭はあちらこちらで大騒ぎだったことで不安を覚え、夕影にしがみついた。

「怖いですか？」

由良は窺ってきた夕影に何度かまたいた。

「この騒ぎに乗じて抜け出せば、うまく逃げられるかもしれませんが人に混ざってしまえばいかに手練の忍びと言えど探し出すことは困難でしょう。今しばらく御辛抱ください」

「うん……」

由良は抱えられたまま周囲を見回した。

露天商は店をたたんで逃げる準備をしており、店を構えた商人はそこここに灯りを灯していた。

逃げ惑う人々は一体どこへ行こうというのか、郭から飛び出した人波の騒ぎに乗じて郭を抜けると、二人は？ 峨郷に広がる深い森の中に逃げ込んだ。森の入り際こそ奥へ向かっているとわかったが、ひとたび中へ入ってしまうとどこをどう進んでいるのか、同じ風景

が広がって見える由良にはわからなかった。

夜目も利かない。姿の見えない夜鳥が、不気味な声で鳴いている。次第に言いようのない不安が込み上げてきて、歩みを止めない夕影を呼んだ。

「……………う、ゆう！」

「……………いかがいたしました」

「このあたりで一度休憩しましょう。わたしは大丈夫だけれどゆうが心配だわ。誰も追ってきていないし」

木の根元に由良を下ろした夕影は、地面に耳を押し付けた。

「いいえ。追手は来ていません、足音が聞こえる。ここで休んでいる暇はありません」

手を差し伸べたが、由良はその手を取らなかった。頭から被った小袖のせいで、うつむくと顔が見えない。夕影はいぶかしげに眉根を寄せた。

### 契り籠む(3)

「由良様？」

「逃げて。ゆう一人で逃げて」

「なにを…！」

「捕まっても、わたしは殺されなんでしょう？でも、ゆうはきつと殺されてしまう。だから逃げて。ゆうだけでも逃げて。……やっぱり、自由になるのは無理だったんだわ。」

ゆうが死んでしまうなんて嫌なの！わたしはきつと生かされるわ…だからいいの、行って！早く！！」

由良は立ち尽くす夕影の肩を押した。夕影は突いてきた小さな手を咄嗟に掴む。

「捨てて行けというのですか」

掴んだ手が暗闇に浮き上がって見えた。頭上で梢がさわさわと鳴る。いつのまにか夜鳥も声をひそめるほど沈黙の降りた森は光が差し込まず、夜半とは違った暗さがあたりを支配していた。

由良はそつと顔を上げる。

夜目が利く夕影は、由良の白い面を見つめた。

置いて一人で逃げることはいたたまれた。ここで離れれば、二度と会えないだろうことはお互いよくわかっていた。

けれど、由良は微笑んだ。

「わたしのために、行って」

側に仕えて最後の命令だ。夕影は唇を噛みしめると、引き寄せた由良をきつく抱き締めた。

「必ず、あなたの元へ参ります」

そうして、離れたかと思うと巨木の立ち並ぶ暗闇の中へ消えていった。追手が近づいている気配は由良でも読み取れるほどになっていた。ザザ、と梢が鳴り、またたき一つの間、由良の周囲を濃紺の衣に身を包んだ男たちが囲っていた。

「お迎えに上がりました」

由良の気持ちが不安定だからか、いつときうす曇りなつたかと思われた空は再び闇夜のように暗くなっていた。深い森の中はさらに明かりがない。男たちは顔を布で覆い、目元しか素肌をさらしていないので、瞳だけ光りを弾いて輝いた。

由良は幹から離れてぐるりと見渡すと、帰らないわと言いつつ。

「わたしは、あの人の元へは帰らない」

「誰が安斎の小僧の元へ届けてやると言った」

氷のような冷たい声で、正面に立った男は言った。隻眼の男は顔を覆う布を外すと、切れ長の瞳をこちらへ向けた。刃を突き付けられたように感じて背筋に寒気が走る。

「来い、九龍姫。その力、どれだけ待ちわびたと思う。安斎の小僧にみすみすやるものか」

「あなた、誰なの」

ふつと隻眼の男は口の端で笑った。

「この状況で誰何するか。俺の手を取れ、さすれば教えてやろう」

男は目の前まで歩み寄ってきた。由良はその分後ろへ下がる。が背中に巨木の幹がぶつかって、それ以上は下がれなかった。

この男、怖い。

なぜそう思うのかわからなかった。漠然とした恐怖だ。頭のどこかで近寄るな、と警告を発している。上背のある、肩のがっしりとした男だからというわけではない。男の瞳が触れれば切れそうだからというわけでもない。なぜか、

怖い　！！

「触らないで！」

男の指先が、恐怖で目を閉じた由良の頬に触れた。

と、そのとき、頭上から落ちてきた影が二人の間に割って入る。由良はふわりと抱き締められたことでまたたいた。顔を上げると、夕影の腕の中だった。

「……ゆづ？」

逃げたはずの彼が戻ってきたのはなぜか。考える間もなく、隻眼の男は口角を上げた。

「夕影、よく連れ出した。謀り上手だな。どうした、追手かと思うたか？それとも、報せを飛ばしてもいないのに、なぜ我々がここに現れたのか心底不思議か？」

由良はこちらを見ない夕影に不審げに顔をしかめた。

「ゆう？ゆうかげって……この男は、ゆうのことを知っているの？」

夕影はなおも苦々しい顔つきで押し黙る。沈黙したままの夕影に男はくつと喉で笑った。

「簡単だ。城へ放っていた間者はお前だけではない。ここのお前が不審な動きをしているという報告により、お前を見張らせていただけのこと。しかし、此度は首尾よく連れ出してくれたな。よくやった」

由良はしばらくしてから彼らが忍びの仲間だと頭の隅で理解した。しかし、なぜ仲間が仲間を見張る必要があったのか合点がいかない。眉根を寄せて夕影の端正な横顔を見上げていると、困っていた忍びのうち一人が歩み出た。

「夕影、霧矢様がご所望だ。九龍姫をこちらへ寄越せ」

布越しに漏れ聞こえた声は夕影のものと似ていた。夕影とそっくりのやや涼しげな目元を持つ男を由良はじつと見つめる。

「あなた、時折ゆうと入れ替わっていた子ね」

「なに？」

一方は怪訝そうな顔をし、もう一方の夕影は驚きで目を見開いた。「なぜそれを？由良様にそれを申し上げたことはないはず……!？」  
「言われずともわかるわ。同じ顔……やっぱり双子だったのね。同じ顔に同じ声。でも違うわ」

夕影とそっくりの双子の兄、夕凧はくすつと小さく嘲笑気味に笑うと、顔を隠す布を取り払った。その下から現れた顔は、由良の知り得る夕影を水鏡に写したようにそっくりだった。

「異なることを言う。同じだが違う？では、どこが違うのか言ってみ

る」

「温かみが違う。あなた、氷みたいに冷たいもの。ゆうは違う。ゆうはいつでもあったかいわ」

「ふん、よくなつかれたものだな夕影」

首をかしげて弟を斜に見やる。

「夕影、何度も言わせるな。九龍姫をこちらへ渡せ」

「できない」

「どういうことだ」

夕凧の瞳に剣呑な光りが宿った。己と瓜二つの顔を見つめ返しなから、夕影は由良を抱く腕に力を込めた。

「できない……！！由良様は俺を『夕凧の弟』としてではなく『夕影』として見てくれた！なにも持たない俺を好いてくれた！なんの才もない俺でも、『夕影』がいいと言ってくれた！

たとえ由良様と離れても、心さえ側にいればいい、そう思っていたけど、でも違う……！どんなに大事に思われているのか知ってしまったから、もう手放すことができない……！恵まれている夕凧にはわからないだろうけど」

「恵まれている？」

鸚鵡返しに夕凧は言った。その声音が彼の口から聞いたこともない冷酷な嘲笑を含んだものだったことで、夕影ははたと彼を見た。

夕凧はひとしきり乾いた笑いを浮かべると、ふと真顔になり、斜に夕影を見やった。

「そうだ。俺はお前みたいに落ちこぼれでも役立たずでもない。お前のようなのできの悪い弟なぞ、足手まとい以外の何者でもない。その存在を恥じよ」

彼はそうして、汚いものが地面に転がっているともいうような口調でそう吐き捨てた。冗談などではなく、心の底から蔑んでいる視線をその身に受けて、夕影は頭を殴られたような衝撃に襲われた。神童と呼ばれた兄を、ずっと尊敬していた。

幼心になんて素晴らしい兄なのだろうと思っていた。それは技術

に関してだけではなく、肉体や精神面における全てだ。神童と言われてもそれを鼻にかけることもなく、陰で努力を惜しまなかったことを知っている。常に穏やかで、物事を良く見ていて、判断が的確だ。

己が問者として選ばれたときだって、嫉妬心の一つも見せなかった。おめでとうと祝福の言葉さえかけてくれた。

今でも思う。あの瞬間、どんなに悔しかっただろう。頭目が決めたことはいえ、納得がいかなかったに違いない。それでも寿ぎをかけてくれた兄を誇りに思って、いつか夕凧のようになりたいと思つた。

ずっと尊敬していて、ずっと誇りに思っていて、少しうらやましくて、妬んでいた。

「夕凧……？」

鏡に映したように同じ姿形をしている夕凧は、小揺るぎもせず、冷え切つた視線をよこしていた。吸い込まれそうな漆黒の瞳は今様々な感情がない交ぜになっていて、見ているうちに言いようのない孤独感が胸を突いた。

「俺のこと、そんなふうに使ってたのか……？」

ぼつりと呟いた声は痛いほど静まり返つた森に沈んだ。

夕凧からの返答はなく、彼は変わらぬ視線で真っ直ぐに夕影を見つめた。

「もう一度言う。夕影、九龍姫を渡せ」

ややあつて、唇が「できない」と動いた。

霧矢は隻眼を一度閉じると、底冷えのする瞳を夕影に向けた。

「そうか、残念だ……今から此奴を抜け忍とみなす」

「霧矢様！」

そのときまろびでたのは梵爺だった。背中を丸めて転がり出ると、霧矢の足下にひれ伏した。

「お、お考え直しを！夕影にも何か考えのあつてのこと、どうか慈悲を」

「慈悲はない」

霧矢は佩刀していた忍刀を引き抜きざまに振り下ろす。

「やめろっ!!」

夕影の声がむなしく響き、一拍置いて濃い血の臭いが立ち上る。白髪に赤黒い斑点をつけた頭が、毬のように転がった。

両親にさえ疎まれた己を育ててくれた人だった。夢中になると飯さえ忘れる男だったが毒の知識には貪欲で、そんな彼を夕影は尊敬していた。

任務が決まって敵地に赴くことになった夕影に、帰ってきたらたまには顔を見せると用意してくれた夕餉は優しい味がしたことを、今でも覚えていいる。

めまいがした。しがみついた由良の感触さえわからない。

立ち尽くす夕影の周りで、いっとう大柄な半蔵が忍刀を引き抜いて我先にと動いた。

「霧矢様、俺が」

半蔵が忍刀を振りかざす前に、夕凧に手で制された。

「下がれ半蔵……俺がやる」

「夕凧」

「聞こえなかったか？俺がやる、下がれ」

地を這うほどの低い声に、半蔵は「いい子ぶりやがって」と言っ  
て舌打ちすると引き下がった。

相対して抜刀した夕凧を目の前に、夕影は由良をかばったまま一歩下がる。夕凧が手に提げた忍刀が、光を弾いて鍔から切っ先へ白く輝いた。

「女を置いて刀を抜け。かばいだてしながら俺に勝てると思うな」  
地を蹴り、迫ってきた白刃を半ばまで引き抜いたヒ首で受ける。

無腰よりはましたが、残念ながらある程度の長さのある刀を帯刀してはいなかった。

刃と刃が噛み合い、キン、と甲高い音が暗闇にこだました。忍刀は一般的な刀と比べて短く、刀身の反りが少ない直刀だ。より確実

により素早く敵の息の根を止めるため、刺突を重視している形だ。

夕凧が繰り出す一撃を紙一重でよけることも苦しい。ヒ首で受けるが、攻撃が重くて手が痺れた。じいんと震える手が、夕凧が己を本気で殺そうとしている事実を伝えた。

勝てるはずがなかった。

相手は血を分けた兄弟で、神童と呼ばれた天才で、己の技量は足下にも及ばない。

『その存在を恥じよ』

夕凧が吐き捨てるように言った言葉が胸に刺さった。

(そうだ、いつだって夕凧は本当のことを俺に言っただけはくれなかった……あのときだって、何の力もないお前が選ばれて俺は悔しいとも、憎いとも、なんにも言っただけはくれなかった……!!俺たちは双子なのに、夕凧は隠してばかりで、俺は羨ましがらるばかりで、互いを何一つとしてわかっていなかったんだ。

俺は、一体夕凧のどこを見ていたんだ……)

「夕凧……」

退がった夕凧に向かって刃が唸った。牙をむいて獲物を引き裂こうとする猛獣のごとく迫った夕凧は、夕凧の脇腹を忍刀で突き通した。押されて、夕凧は背を幹に押し付ける形になる。

口の中に鉄錆の味が広がって、鼻を突く臭いがむっと込み上げてきた。火であぶられているかのように脇腹が熱かった。痛みより先に息苦しさを覚えて幹にもたれる。

忍刀を引き抜いて距離を取った夕凧の姿が歪んで見えた。

「……、め……」

「どうした、命乞いでもするか」

夕凧は口をゆがめて笑った。そうして血に濡れた唇を薄く開いた夕凧を、刀の露を払いながら斜に見やった。夕凧は肩で息をしながら、呼吸の合間にぽつりと漏らす。

「ごめん……」

夕凧は虚を衝かれて目を見開いた。

気付かなくてごめん。

そんなふうにしてしまったことに、気付かなくてごめん。いつだつて己の上を軽々と飛び越えていく夕凧の孤独に、気付かなくてごめん。

(本当だったら、一番に側にいてやるべきだった)

一瞬動きを止めた夕凧だったが、キツと親の仇とばかりに夕影をにらみつけると忍刀を青眼に構えた。

「ふざけるな……その目、憐れみか。俺が憐れか?!俺の何を知ってその目で見ろ!!俺のことなど何一つわかっていないくせにわかつたような顔をするな!!何がわかる、落ちこぼれのお前に、俺の一体何がわかる!?!」

俺はお前の影じゃない。出来損ないで落ちこぼれ、お前こそ俺の影だ。地に這いつくばってその首を差し出し、命乞いをしろ!!

俺を、愚弄するなつ!!」

ダンッと力強く地を蹴って、夕凧は斬りかかった。

## 契り籠む（４）

戦いの渦中にいる夕影から引き離された由良は、暴れもがいたため大柄な男に押さえ込まれた。

「兄弟で殺し合うなんてやめてっ！やめさせて！！ゆうが何をしたというの？！わたしがあなたに嫁げばやめさせてくれるの」

「抜け忍は誅す。これは掟だ」

隻眼の霧矢は由良を押さえつけていた忍びから由良を受け取ると、か細い腕を力任せに引っ張った。

「いたっ」

「手間をかけさせないでいただきたい。さすがの我らも白波とやり合うには骨が折れるのでな。見つかる前に退散したいところだ。無駄な時間を費やしてはられない」

「あなたのものにはならないわ！」

由良は懐刀の鯉口を切った。力任せに霧矢の胸に突き立てる。肉に刺さった感触が手に伝わってきたが、霧矢が呻くでもなく、くつと喉で笑ったことで由良はぎこちなく彼を見上げた。

「行動を間違えたな。己の胸でも突き刺せば、この世と俺から逃れられたものを」

霧矢の胸からはどす黒い液体がとろとろと流れ出し、濃紺の着物を染めていた。血液ではない。

「……っ！！」

由良は後退ろうとしたが、腕を掴まれていたのでそれ以上は無理だった。粘ついた体液は鼻を突く腐臭を漂わせる。仄暗い井戸底を覗き込んだように、底知れぬ恐怖が由良の背筋を走った。

「これが不気味か、九龍姫。そう、我が体内をめぐる血はとうに腐っている」

霧矢は懐刀を強引に抜くと傷口を布越しに撫ぜた。一度己の胸に視線を落とした霧矢は、隻眼を由良へ向けた。一つしかない瞳の奥

には憎悪の炎がちろちろとくすぶっている。

「死ぬぬ体だ。気が遠くなるほど昔、目覚めた俺の周りであったのは切り刻まれた死体だった。その場で俺だけ生き残っていた。否、生き返ったのだ!!」

一体誰が俺を亡霊にしたかと思っている。安斎、そして奴が飼っている白波だ。この世に数多ある慰みをもってしても気は晴れぬ。復讐を果たさぬ限り、俺はいつまでも亡霊だ。俺は奴らに復讐する…!! そのためだけに存在してきた。

俺の妻となれ、九龍の姫。そして俺の望みを叶えよ!!」

懐刀を投げ捨てた霧矢は、その手で由良の顎を掴んだ。由良はぐつと唇を噛みしめて霧矢をにらみつける。

「嫌よ! 報復に手を貸すために嫁ぎたくなんかない!! あなたの過去なんか知らない。けど復讐なんか間違ってるわ!! わたしは誰かのものじゃない! 人を愛したいし、愛されたい」

「アイ?」

くつと霧矢は喉で笑った。

「くだらない、そんなものはまやかした。そのような感情はどうに失くした。……俺は復讐を果たす。さあ、俺の刃となれ!!」

霧矢は力任せに由良を押し倒した。背中をしたたか打つたため、地面が大きく揺れたのかと思うほどのめまいがした。

顎を掴む手に抗おうとしたとき、遠くで鋼の弾かれた音がした。

匕首がきりきりと回りながら大きく弧を描き、柔らかい地面に突き刺さる。

こめかみを柄で殴られて、夕影の体がかしいだところだった。よほど強く打たれたのか、均衡を失ってどうと倒れ込む。

夕凧は跳ね起きる暇も与えず馬乗りになった。

(俺の受けてきた苦しみが、お前なんかにはわかるものか:!!) 怒りで目の前がくらんだ。

(恵まれている?! この俺が?! ふざけるな、何の才も持たずに何もできない、そんなお前に何がわかる!! お前に俺の努力がわかる

のか。百年に一度の神童よと言われ、周囲の期待や圧力に耐えなければならなかった俺の苦辛がっ！俺がこの身に受けてきた妬みやそしりがお前に想像できるのか?!」

夕凧はたぐいまれな才華を持っている。だから「なんでもできて当たり前」だ。「できないことはないはず」だ。誰もかれもがそう言った。

(畜生、俺を何だと思っている。神か、仏か!?)

たったの五つで免許皆伝を受けた夕凧とて、初めて教わる物事をすぐに会得できるわけではなかった。だが、失敗するのは矜持が許さなかった。

些細な失敗でもそれを笑いの種にして、神童なのにとそしられるのは我慢できなかった。

(俺は夕影とは違う!!落ちこぼれなんかじゃない!!)

認められたい。誰かに認めてもらいたい。

必要とされたい!

きっとこの才華は霧矢のためにある、そう思わなければ己という存在が儚く消えてしまいそうな気がした。己は霧矢の願いを叶えるために才華を持って生まれてきたのだ。

霧矢にこの才を認めてもらって、必要とされたかった。

(そのためにはなんだってする!!)

たとえ、母の胎内にも宿った弟を手に掛けることになったとしても !!

「とどめだ、夕影……!!」

別れを告げるといふのにはあまりに短すぎる言葉が夕影の頭上から降った。

「……ゆ、なき」

夕影は苔の上に押し付けられてなお、か細く兄の名を呼んだ。

口の中に鉄錆の味がした。忍刀で突かれた脇腹が熱を持ってじくじく痛み、血を唾とともに吐き出すことさえ億劫だった。

(わかっていた)

こうして命が終わるであろうことは、由良を抱いたときから覚悟していた。安齋に捕らえられて白波衆に殺されるか、霧矢を裏切ったことで抜け忍として誅されるか、その二択しかなかった。

でも、後悔はない。

一体誰が、この気持ちを抑えられたらろう。

由良の体に手を出すことは霧矢に禁じられていた。だが、禁を犯すと頭の片隅でわかっていても止められなかった。

由良を胸に抱いていたとき、これ以上の幸せはなかった。愛している人が腕の中にいる、たったそれだけでこの世の至福と感じた。結ばれやしないと諦めて、恋焦がれた心がいつときでも満たされたのなら、それはとても幸せなことだと思っから。

(ああ、でも……もっと)

あなたと、生きたかった。

「由良様」

誰にも聞こえないほどの眩きを残して、唸った刃風が夕影の首筋を切り裂いた。一拍置いて、夕風は動かなくなった弟の背で血刀を拭った。

頬にかかった血飛沫をそのままに立ち上がる。由良の倒れている位置からは夕風の背中しか見ることが叶わなかったが、剣戟の音が聞こえなくなったことでどちらかの命が終わったのだと気付く。

そして、どちらの命が消えたのか、立ち上がった方を見れば明白だった。

ゆう、と唇が動いたが、吐息しか出ない。

「っや、あ……っ」

鼻を突く血の臭いが風のない森にこもった。胃がきりきりと引き絞られたように痛んで、吐き気が込み上げる。咳とともに吐き出すと胃液しか出なかった。息をするたびに焼かれた喉がしみた。

「ひ、あっ」



した。

仄暗い闇に包まれた死の森に、蛍のような淡い光が幾つも浮かび上がる。それらは差し伸べられた由良の手に誘われて、彼女の元へ集まってきた。小さな光は手のひらでお互いぶつかり合ってはぱちんと弾け、次第に大きくなっていく。

由良はしゃがみ込み、雪玉ほどになったそれを夕影の背に落とすた。

七色の瞳で厚い雲が垂れ込める空を振り仰ぎ、目を細めると由良は唇を尖らせ、ふうつと吐息を吐く。すると、灰の地面の奥深くからさわさわと騒がしくなり、あちらこちらで緑の芽が芽吹いた。

顔を出した芽はまたたき一つで数十年という時を越える成長を見せた。枝を伸ばし、葉を茂らせ、蔦を這わせ、木々が何百年、何千年とかけて創り出した深い森が、灰色の世界に広がっていく。

新しい命の芽吹きと成長の音を聞きながら由良はまぶたをそつと閉じると、その場にくずおれた。

ぴちゅん、と滴が垂れる音が耳に滑り込んできたことで夕影は震えるまぶたを開いた。視界には鮮やかな濃い緑と、遠くに星屑をまぶした夜空が見えた。

雨でも降ったのか、葉にたまった滴が頬にぽつりと落ちてくる。

身を起こすと、地面についた手のひらが瑞々しい苔の感触を伝えた。どこか森の様子が様変わりして、生え揃って出来上がったばかりのようにも見えた。

「目が覚めたのね」

背後から響いてきた声に夕影は飛び上がって構えた。が、知った姿を見止めて緊張を解く。緑の苔に覆われた幹に手を当てて、一段高い所からこちらを見下ろしていたのは由良だった。白い下衣はところどころ赤黒く鉄錆色に汚れていた。

肩に羽織った小袖が濃紺で周囲の森の色に溶け込んで見えたため、

なおさら由良の白さが際立った。

由良が首をかしげると艶やかな黒髪が肩に落ちた。

「わたしが、殺めてしまった……」

夕影は心臓を掴まれた思いでひくつと息を吸うと、己の首筋を手で押さえた。血濡れた跡は確かにあったが、すでに血液は乾き切っていた。

思い出して背筋が冷えた。そうだ、首を切られて事切れたはずだった。

「……なぜ、生きて」

夕影はぎこちなく由良を見上げると、由良は泣きそうにくしゃつと顔をゆがめた。

「そうよ……覚えてない、けど、わたしが九龍の力を使って助けたんだわ。でも同時にたくさんの人を、あなたの兄弟を殺めてしまった……!!」

夕影はあたりを見回したが、加賀忍の朽ちた骨さえも見つけることが出来なかった。緑の絨毯が全てを覆い隠してしまって、まるで何事もなかったかのようなようだ。ぼんやりと新緑の青臭い匂いを感じていると、由良は踵を返して小さく言った。

「もう、側にいられない」

逃げるようにして深い木々の中へ身を滑り込ませて行ってしまおう。

「ゆら、さま……」

どうして、とその背中に問いかけて、夕影は追いかけようとした。しかし思ったように足に力が入らず、立ち上がりざまに地面に膝をついた。体が鉛のように重い。四肢が言うことを聞かず、体を支えきれずにその場に崩れた。

その様子に足を止めて振り返った由良は、一度は夕影から離れようと深い森の向こうへ向けていたつま先を彼の方へ慌てて戻した。駆け寄って、苔の上につづくまる夕影の頭を膝の上に乗せる。

「どうして、側にいられないのですか。行かないでください」

大人しく由良の手に髪を撫でられていた夕影は上体を起こした。

知らない場所に一人で置いてけ堀にされた幼子のように不安を滲ませた瞳で見上げると、由良はぐつと唇を引き結んだ。

「だって怖い……わたし自分が怖い！ふとしたときに何をしようかわからない！この先、ゆうと一緒にいれば、ゆうを傷つけてしまうことがあるかもしれない……そんなの嫌」

夕影はようやく起き上がると、嗚咽を上げて泣き始めた由良の頬を包み込んだ。

「由良様、俺は、死ぬ覚悟で由良様を連れ出しました。安齋に捕まればそれまでの命でしたし、九龍の力を操れる鍵となった俺を霧矢様は決して許さないだろうと思っていました」

由良は、そのとき初めて己の軽率さと、夕影の覚悟の重さを理解した。

「わたし、ゆうがいなくなるのは嫌と言っているながら、ゆうを殺めようとしていたのね」

「由良様のせいではありません。どちらにせよ俺が選んだ道です。でも死ぬ間際、俺はあなたと生きていきたかった、そう思ったんです」

頬を伝う涙を指で拭つてやると、由良は何度かまたたいた。そのたびにまなじりから涙がこぼれて、長いまつげを濡らした。

「側にいさせてください。それとも俺は不要ですか、由良様」

覗き込んできた夕影の視線から逃れるように、由良はうつむいてしまった。

「……本当に、わたしが側にいいの？この力を持っている限り、きつと狙われ続けるわ。それに、一瞬で人を殺めたのよ。この世を滅ぼすことなんてきつと造作もないわ。いつか九龍の力に呑み込まれて、世界を滅ぼしてしまうことになるかもしれない」

「させません。俺が九龍にさせません。由良様が力に溺れることはありません。その御身も、由良様の心もお守りします。お側にいます、何があっても。我が儘を申し上げます、もう離したくありません。だから、お側に置いてください」

「う……」

うん、と由良は一度頷いて、夕影の首に抱きついた。この人を失うと思っただけ怖かった。怖くて胸が張り裂けそうだった。

抱き締めた体が温かくてほっとした。

「独りにしないで……側において。側仕えでもなんでもない、ゆうが いいの。ゆうじゃなきゃ嫌なの。私を怖がらないでいてくれたのは ゆうだけだった。すぎ、好きよ……わたしも、ゆうと生きていきたい」

夕影がなだめるように背を撫でると、しばらくしてから由良はみじろいだ。落ち着いた様子を見て、

「行きましよう。長くここにはいられない」

そう言って、夕影はゆっくりと立ち上がった。

## 九龍祭

しゃらん、と鈴の音のような高い音がした。鬼灯に似せた赤い提燈が軒先に列を成して連なっている。夕暮れ時は過ぎ、そろそろ夜の帳に包まれようかという時刻になると。提燈には一斉に灯が入れられた。

一年に一度、一週間に渡って行われる祭りの日だった。この秋、無事に収穫を迎えたことと、この先一年の豊作を願う祭りだ。九龍神に感謝を捧げ、また、一年我らをお守りくださいという意味も込めて鬼灯の提燈を灯す。

暗闇に良く目立つ赤い提燈の灯りに誘われて、九龍がやってくるという言い伝えだ。

また、祭りの間、人々は表に出るときに面をつける。素顔をさらしてはいけないという習わしなので、外からやってくる商人も例外ではなかった。

祭りの夜の一週間は普段規制されている酒や賭博が解禁される。

よって夜半でも人々は眠らず、郭は騒がしかった。

「薬、要りませんか」

二階の軒先にも鬼灯提燈を吊るした宿の戸を叩いたのは、一組の男女だった。面をかぶっていて顔は見えないが、声の調子からしてまだ大人になりきれしていない男と、女も少女の域を出たかどうかという年齢に見えた。

薬の商いをして回っているのか、男の方は行李を背負っていた。

「兄妹かい」

二人とも目元に赤いくまどりを施した狐の面をかぶっており、番頭のこの問いには同じように首を横に振った。

「夫婦です」

短く答えて二人は互いを見る。若いこともあってこの仕草にはどこか初々しさが残る。

行商人の若夫婦は珍しいことではない。身寄りのない幼子同士で支え合い、それが男女ならなおのこと、そのまま夫婦となる者たちが大勢いた。

番頭は煙管をくわえていたため半ばまで面をはいでいたが、年若い薬売りの相手をするため面をかぶりなおして体裁を整えた。

「お若いのでえへんだねえ。お狐さんはどこから来なされた」

「東の方から」

「はあ、東つてえとアレかい。？ 峨の方から？」

「ええ、まあ」

頷いた狐面の男はもう一度「薬要りませんか」と言った。

「祭りの夜にせっかちな。見せておくんな。それから決めようじゃないか」

狐面の男は行李を下ろすと取り出した小さな紙包みを幾つも番頭の前に並べた。

「どのようなものがご入り用でしょう？ こちらは傷薬。こちらは風邪薬。軽い風邪でしたら耳かき一杯ほども飲めばたちまち治ります」  
「本当かね」

いぶかしげな声だ。狐面の男は気に留めずに次の紙包みを指差した。

「番頭さん、帳簿をしっかりと見ることができなければまんまを食い損ねますよ。目は大事です。こちらは目病みに効きます」

「まあ、確かに。見えなくなっちゃったらお仕舞いだな。どぶさらいでもしてせせ貰うしがあるまいな。他はどんなだい」

「……あと、こちらは夜の薬にございます」

「おおつ、そんなものまで扱ってるのか」

嫌に敏感に反応した番頭に、ふふふと狐面の男は意味深げに笑った。

「おや番頭さん、お困りで。でしたらこちらはお勧めです。最近調子が出ないとお困りでしたら、三日飲み続ければもう元通り。むしろ元より澁刺になること間違いなしです」

「やるねえ若いの」

ふふ、と含みのある笑みを浮かべた狐面の男が端から値段を言うと、半ば購入する気であった番頭は高直だと渋り始めた。頬杖をつき、番台を指先で叩く。

「それにしても、東の方は最近不吉な噂を聞くよ。真つ黒い雲が空を覆い尽くして、昼なのに夜のように真つ暗になったとか。九龍がお怒りになって天罰が下ったのだと、みな噂している」

「天罰……穏やかじゃありませんね」

「このご時世どこへ行っても穏やかじゃないさ。それに？峨の大殿は病氣らしいじゃあないか。世継ぎもおられないんだろ？どうするんだろうねえ」

「そうですね、不吉だ」

あつさりとその答えたが、まだまだこの話を続けたいらしい番頭の口は塞がらなかった。ぐつと身を乗り出して距離を詰めると、面越しに声をひそめた。

「だが、大殿が病氣というのは嘘らしいぞ。表立って言わないだけで、もう死んでいるという噂もあるさ。若いの、あんた東から来たのになんも知らんのか」

狐面の男は黙っていたが、番頭はそれを是とみなしたのか己の知り得る情報を頼んでもいないのに話し始める。顔は面で隠れていて窺えないが、ひそめた声色が弾んでいることから己の知識をひけらかしたくてたまらないようだ。

「もともと？峨は過激な国だろう。昨今、あの九龍を完成させたという噂も絶えない。全く、神なんぞ手に入れてどうするつもりなんだか。天上人の考えることは理解できん。

それに？峨の大殿はずいぶん人を殺めていたそうじゃないか。なんぞそんな必要あったのかわからんが、大殿が倒れたのも祟りか何かねえ。今まで？峨に手出しがでなかつた他国も、攻め入る好機と見ているらしいしね。ああ全く嫌な世の中だ、徴兵されでもしたらたまつたもんじゃない」

油紙に火のついたように話し始めて止まらない番頭だったが、商売目的ではなく泊まりの客がやって来たことで狐面の男との話は終了した。

狐面の男は素早く薬を仕舞い、離れたところで猫とじゃれていた妻のもとへ小走りに向かった。

「猫？」

うん、と言って幼い仕草で頷いた狐面の女の隣に男はしゃがんだ。「さて、どうしたものかな」

「夕影？」

独り言のつもりだったが、彼女が不思議そうに小首をかしげてきたことで狐の面をそちらへ向けた。

「いいえ、独り言です」

あのあと無事に？峨郷の深い森を抜けた二人だったが、しばらく野宿の続く生活となった。由良を連れ出す際に銭の用意もできずに着の身着のまま逃げてきてしまったことで、まずは日銭を稼ぐことから始まったのだった。

幸いなことに夕影は薬の知識を豊富に持っていた。今はこれが生計つぎの道だと思っている。

今まで白波にも接触せずに？峨郷を出ることができたが、？峨郷国主、安斎康持の生死、そして動向が気になるところでもある。

（安斎は本当に死んだのだろうか）

他国に流れる情報は信頼が置けない。しかし、調べるにも手段がなかった。己の目で見てくれば一番手っ取り早いものの、そうなる問題は山のように出てくる。忍び込むのは骨が折れるし、由良を連れて行くのははばかられる。かといって置いては行けない。

安斎が生きているにしろ死んでいるにしろ、どうしてもこのまま安穩とした生活が続くとは思えなかった。

夕影が考えにふけていると、片目が不自由なのか塞がってしまった猫が、何かをねだるように由良の手にすりすり顔をしりつけていた。由良が耳の後ろを搔いてやると気持ち良さそうに目を

細めた。

「あつたかい……」

ぼつりと呟いた由良の表情は、面に隠れていて読み取れなかった。夕影は無機質な面を向けると、その横顔を見つめる。

しばらくして、猫の小さな頭を撫でていた由良の背に手を添え、夕影は立ち上がるように促した。

「さ、行きましょう。祭りの間に幾らか売れると有難い」

「あら、買ってもらえなかったの？どれもすごく良く効くのにね」

夕影の薬の効力を、身を持って知ることとなった由良は小首をかしげた。

町人のように歩くことの少ない　　というか草履を履いたことすらなかった由良の白くやわな足が膿んでいないのは、ひとえに夕影の調合した薬のおかげである。草鞋食いこそ盛大にこさえたものの、今では痛々しさは消え、すっかり治りかけていた。

残念ね、とこぼした由良に対して、ちらと猫を見やった夕影は声をひそめた。

「それと由良、軽々しく力を使つてはいけません。気取られたらどうなさいます」

「夕影も、そのかしこまった言葉遣いはやめないと。気付かれたらどうするの」

夕影は押し黙った。

「善処し……する」

言葉に詰まるところがまだまだ硬いなあと由良はあきれて首をすくめる。周囲には夫婦と言っているのに、片方が丁寧な言葉遣いをしていると奇妙だ。しかし、夕影は長年の癖がなかなか抜けないようである。

夕影を見上げてようやく立ち上がると、猫はにやあと小さく鳴いて二つの真ん丸な瞳で狐面の夫婦を見上げた。由良は最後に猫に手を振って踵を返す。

しっかりと見開かれた一對の緑の瞳には、背中を向けて歩き出し

た二人の姿が映っていた。

そうして、寄り添った二人は鬼灯提燈の灯された暗闇に姿を消した。

## 九龍祭（後書き）

拙作を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1112v/>

---

九龍姫物語

2011年9月14日03時30分発行